
忘れない男と憶えない女

堀 雄之介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れない男と憶えない女

【Nコード】

N1095E

【作者名】

堀 雄之介

【あらすじ】

高校で惚れた女性が忘れられず、青年は無価値な日々を過ごしていた。それがあるとき、焦がれた女性と邂逅を果たす。青年は思いがけない幸運に戸惑いつつも、愛する女性との日々を酔い、明るい将来も夢見た。しかしそんな生活も、全てを記憶できるといふ怪しい男の登場と共に崩れ去る。男はその女性を、殺人事件の被疑者だと指摘した。

導入

毎日のように手を引かれ、連れていかれた公園だった。

ブランコがあり砂場があり、そして僕と同年代の子供たちがいる。子供たちは砂場にあつまり、それぞれの手に持ったスコップをふるっているはずだ。

母親に連れられて、また一人少年がやってきたようだ。少年はまっすぐに砂場へと駆けて行く。それは、彼の足から放たれる小刻みな足音で判断できた。

僕は目と耳をふさいでいたのだが、どうしても彼らの甲高い声は脳みそに響いてしまう。

「よう」「おう」と短い挨拶を交わし、その新しい少年が砂場遊びに参加した。

「なにつくってるん？」

「山、富士山、そんでトンネルとおすねん」

「富士山にトンネルなんてあらへんよ。トンネルとおるんは六甲山やで。ぼく、お父さんに教えてもろたもん」

「富士山にトンネルないからほるんやないか。あるもんほってもしやあないやろ」

「そやね。ぼくらでないもんほるんやね」

「んでな、穴開いたら水流すんよ」

「うん、川つくる」

新たな少年を加え、子供たちは山をつくりトンネルを掘る。空虚で、非論理的な会話が自然と理解し合えているのが不思議だ。否、理解などしていないのだらう。彼ら子供は混沌の世界に生きている。

山とトンネルが完成すると、彼らはバケツで水を汲んできて、それを流す。見事にトンネルをとり、水が反対側から流れ出ると、一団は狂ったような歓声を上げた。

何度も成功している作業だらう。

何故そんなにも喜べるのか。
いつもしている遊びだろう。
何がそんなにも楽しいのか。

僕は一瞬だけうすく目を開き、砂場で遊ぶ子供たちを覗き見た。
白いキャップを被った一人の少年と視線が合う。

見たことのある顔だった。『あっちゃん』と、仲間やその母親に
呼ばれている少年だ。無論関心のない僕は、再び目と耳を閉じた。

「ねえねえ、あそこに座ってる子、いつもいてへん？」

「ああ、おるねー。いつも一人で」

「それも、なんかおかしいねんで。あいつ、めえつむって、指で耳
せんしとんねん」

「そんなことしたら、何も聞こえへんし、何もみえへんやんか」

「うちのおかん、あの子と遊んだらあかんゆうてた」

放っておいておいて欲しい。僕は誰にも迷惑をかけていないし、誰
とも関わりたくはないのだ。毎日毎日、僕の脳みそは無限の情報で
満たされる。その大部分が不必要で不細工で、そして意味のないも
のばかり。そんな無駄な情報を吸収し続ける僕の頭は、もうじき破
裂してしまうことだろう。だから僕はこうして、出来得る限り情報を
を排除しなければならぬ。無駄なことを頭に入れたくはないのだ。
唐突に僕の右耳は聴力を取り戻し、子供たちの奇声、車のエンジ
ン音などが、一度に大きな騒音となって聞こえてきた。近くの建築
現場からは、電動工具が生み出すモーター音も断絶的に響いてくる。
それまで静寂の世界にいたぶんだけ、やかましさは格別だった。

僕は驚き、つい眼を開けていた。

そして、目の前でゆれる、小さなスコップを見た。

「いっしょにあそぼうや」

頬を上気させた少年が、泥に汚れた手を僕へと差し出していた。
白いキャップを被っている。先ほど目が合った『あっちゃん』だっ
た。

「なあ、そこで座ってるだけじゃおもしろいやろ。いっしょにトン

ネルほろ」

更に手を差し出して、あっちゃんは言った。

僕がなにも言わずにいると、あっちゃんは僕の袖を掴んだ。彼がその袖をぐいぐい引っ張るため、左耳の耳栓も外れてしまった。

感情がない視線で一瞥してから、僕は再び目を閉じる。

たまにはあるが、こうした余計な世話を焼く子供がいる。きつと、『困っている人は助けてあげましょう』『体の不自由な人には優しくしてあげましょう』と教えられ、それを忠実に実行している類の子供なのだろう。しかしこうした世話焼き好きも、僕の凍りついた視線で睨みつけられると、すぐにそばから離れていった。

「ねえ、いつしよにあそぼ」

あっちゃんは諦めなかった。僕の腕をさらに引っ張り、ゆるする。

「なあ、一回だけでもいいから、トンネルほつてみよて」

無理やりに、僕はスコップを握らされていた。

そして気がつくと、僕は砂場に向かって歩き出していた。あっちゃんはいぐいと僕の手を引き、砂場へと導いてゆく。抵抗しようと思えばできたはずだった。あっちゃんはほぼ同年齢のように見えたが、身体は小さく、線も細い。当時から大柄な子供であった僕からすれば、腕力で負ける相手ではなかった。

しかし僕はなすすべなく、砂場へと引っ張られていた。

正直になろう。僕は、それまでに一度たりとも、実際に砂場で遊んだことがなかった。何をして遊ぶ場所なのか、知識としては知っていた。しかし、実体験はないのだ。そんな僕は、泥まみれになつて遊ぶことに、一種の羨望を持っていたのかもしれない。

砂場で遊んでいた他の子供たちが、僕が近づいてくるのが分かる。と奇声をあげて逃げ出した。

これはいつものことだ。もう、慣れている。

それでもあっちゃんは、僕の手を引くことを止めなかった。

「おーい。みんなどうしたん」

どうやらあっちゃんは、この公園では新参者のようだ。実際僕も、

あっちゃんをみかけたのは7回だけだった。

「ま、いいやね。二人で遊ぼう」

あっちゃんと僕は、二人だけの砂場で山をつくることとなった。スコップで砂をすくい、山にかけるという単純作業だ。やはり予想したとおり、何ひとつ面白いものはなかった。

「じゃあ次はトンネルほるよ。君は、反対側からほってな。ほるときは、スコップよりも手の方が具合ええよ」

あっちゃんは自分が指導する立場という気負いからか、重要な手順を省いていた。

「水」

僕は単語だけを口にした。しかしその言葉だけでは、あっちゃんには気づかなかった。

あっちゃんは砂山を掘る。しかし、掘った場所は上から砂が崩れ落ち、形を止めない。

「水をかけなくていいの？」

仕方なく、僕は教えてやった。サラサラに乾いた状態である砂山を、いくら掘っても無駄である。水をかけ、ある程度固めなければ、トンネルを掘ることはできない。それくらいは、見て学んでいた。

「そうか。じゃあ水かけよ」

あっちゃんは砂場に転がっていた誰の物とも知れぬバケツを持って、水飲み場から並々と水を汲んできた。そして、その水を豪快に砂山にかける。

あっちゃんが乱暴にかけた水のせいで、山の形が崩れてしまった。あっちゃんと僕はまずその修復作業にかかり、そして再度トンネル掘りをはじめめる。

先に言われたとおり、僕は素手でトンネルを掘った。水を含んだ砂は冷たく、その粒子が爪の間に入り込む。それは、極めて不快なものであった。何故子供たちは、このような嫌な思いをして、砂場で遊び続けるのだろうか。それも、同じ作業を何度も繰り返すのだ。「もうちょっと。もうちょっとでとおんで」

肩まで入りそうなほど、反対側のあっちゃん掘り進んでいた。僕は、あっちゃんの体の向きを計算し、彼が掘り進めるルートと一直線上になるよう、濡れた砂山を掘った。

ふと、指先の抵抗が弱まり、温かなものを感じた。

「わー。かんつうした」

僕の指と、あっちゃんの指が、砂山の中で絡み合う。

濡れた砂は相変わらず不快であったが、指先に感じるあっちゃんの体温はとても暖かく、心地よいものに思えた。

僕はなぜか、不思議な感動すら覚えていた。その感覚は、言葉で言い表すことができない。安直な表現をするとすれば、心の触れ合いか。子供たちが飽きることなく砂山をつくり、トンネルを掘るのは、これが目的であったのだ。私はそこで、ようやく理解できた。

「やったね。次はもっと大きい山つくる」

僕は、自然と笑顔になっていた。

序章

赤ら顔の女の足は、転がるように歩を進める。

その不規則な靴の音が、朝を迎えたばかりの住宅街に響いた。

「飲みすぎちゃうんか、伸子」

大股で女の後を追う男が呼びかける。しかし女はカラカラと笑いながら、昨日夜半に降った雨の跡が残るアスファルトの上を右へ左へ、今にも転びそうに歩き続けた。男の顔も先を歩く女に劣らず赤みを帯びているが、こちらの足取りは軍人の行進並みに毅然としたものだ。男のその鋭い目と筋肉質の体躯は、初見の者に玄人筋の人間と勘違されることが多々あったが、彼の職業はラーメン屋の雇われ店長だ。

「あら、篠沢はん。今お帰りですか」

カーディガンを羽織っただけのパジャマ姿で、門の所まで朝刊を取りに出ていた中年男性が、汚いものを見る目で伸子に挨拶をよこす。カレンダーでは四月の中旬にさしかかっていたが、寒い日が続いていた。特に京都という町は朝が冷え込む。中年男は両手で身体を抱いて震えていたが、見事に禿げ上がった頭を上下させ、伸子を舐めるように見ている。その眉間には、終始しわがよっている。

「ええ、仕事ですんで、仕方ありません」

半分閉じかけた目でみかえしつつ、伸子は中年男へ酒臭い息を吹きかけた。四十八歳にしては艶っぽい視線は、中年男性をいつそう不快にさせる。

「あなたさんもええ歳なんやさかい、そない無理して働かんでもええんとちやいまつか」

「あら、無理なんてしてやしまへんで。おかげさんで、毎日面白うしております。なあ、あなた」

後ろを歩く男に視線を移し、再び伸子は笑い出す。禿頭とラーメ

ン屋は短い間視線を交差させるが、双方苦笑いであった。禿頭は五十を間近にした男女の恋を笑い、ラーメン屋は近所の者だというだけの他人による、お節介な言動に呆れた。

「息子はんは立派やのになあ……」

そう呟きながら、男は禿げ上がった頭を掻きながら家の中へ帰っていく。その男の言葉は、伸子にとって厭味でも蔑みでもなかった。むしろ喜びだ。酒を注ぎ、下品な話を繰り返すことを朝まで続けることで、一人息子を女手一つで育て上げたのだ。贅沢はできなかったが、大学も卒業させた。どこに出しても恥ずかしくない息子に育てた。だから、何に対しても我慢ができた。息子は宝であり、唯一の生きがいだ。自分がどれだけ世間から蔑まれようと、息子がいるからこそ、彼女は胸を張って生きることができたのだ。

「誠一君は、もう仕事に出かけた時間やるか」

伸子の腕を支え、ラーメン屋は問う。伸子の子である誠一とは、何度も会い話もしていた。近い将来籍を入れるつもりがあることも伝えてある。息子の誠一は、その申し出を快く祝福してくれていた。それでも、男にはその家上がりにくい理由があった。伸子はその理由を遠慮であると決め付け、いつも強引に家上げるのだった。「まだ家におると思うよ。もう、そない気にせんでええんよ。あの子、あんたのこと好きやって言うてるんやから」

男の表情が陰ったことから、その思いを察した伸子がこたえた。

そして、男の厚い胸板を拳で二度叩く。

「しかし、彼も今は大事な時期やからな。俺たちのことで、変な迷惑はかけたないし」

途端、伸子の顔から笑いが消えた。彼女は今、大きな問題を抱えている。それは、最愛の息子の結婚話であった。息子は二十九歳。いくら溺愛しているからといっても、いつまでも一人身でいさせるわけにはいかない。当人同士が望むのであれば、結婚を許し、祝福しなければならぬだろう。それくらい覚悟は、伸子にもできている。しかし、その相手が問題だった。

息子の婚約相手は容姿が良かった。自分の息子とは不釣合だと認めなくなるほど、整った顔立ちをしていた。言葉遣いも正しく知性があり、笑顔も明るい。何度か手づくり料理を食べてみたが、その腕も良いようだ。女性の社会進出が叫ばれて久しいこの時代に、働いた経験がないということを除けば、なんら問題のない女性である。しかし、伸子はその婚約者を好きになれなかった。

何故なのか。伸子は何度も自問したがこたえがでない。生理的に受け付けないのか、それとも単なる母親の僻みなのか。ただ、その女を見ると、何かに苛つくのだ。その何かを彼女は言葉にすることができない。強いて表現するならば『恐怖』である。そう、伸子はその婚約者に対して脅えていたのだ。何か、その女が不幸を運んでくる。そんな気配を女の勘として感じていた。

それに、彼女は理解しきれなかった。インターネットの掲示板などという、架空の世界で知り合った男女の関係などは。

「どないしてん。具合、悪いんか？」

伸子は真っ青な顔をしていたようだ。男が肩を抱き、心配そうに伸子の顔を覗き込んでいる。

息子の婚約者を考えることで、伸子の酔いは急速に醒めつつあった。

「なんもないけど、早く帰ろ。私、いやな胸騒ぎがすんねん」

伸子の家は二階建ての一軒家だ。誠一が生まれたばかりの頃、亡き夫が建てた家だった。誠一が五歳のときに不慮の事故でこの世を去った夫が、唯一残してくれた財産。この家があったからこそ、伸子は一人で息子を育て上げることができたのだ。築二十五五年を越えたあたりから、壁にひび割れが目立つようになってきたが、暮らすには問題ない。そして何より、亡き夫の記憶と、誠一と過ごした思い出が詰まった家である。

そんな我が家を前にして、伸子が今のような不吉な思いを抱いたのは、夫が事故に遭ったと報告を受けたとき以来だった。入院の必要があると知らされ、家まで着替えを取りにきた。夫は伸子が着替

えを持って病院に向かっているあいだ、容態が急変し帰らぬ人となっていた。

玄関の鍵は閉められていた。普段ならば、誠一は朝六時半には日課としてジョギングから帰り、熱いコーヒをすすりながら新聞を読んでいる時間である。これまでに施錠されていたことは極めて稀であった。風邪などで体調が悪い日にはジョギングをサボるが、年に一日あるかないかのことである。たとえ日曜日でも、誠一はこの習慣を守っていた。

震える手でハンドバックから鍵束を取り出し、伸子は玄関の鍵を開ける。

扉を開けて先ず目に付いたのは、赤いラインの入ったスニーカーである。伸子はその靴に見覚えがあった。それは、誠一の婚約者のものである。息子の白いランニングシューズに並んで、きちんと揃えて置かれていた。

伸子は、自分の頭に血が上っていくのを感じた。酒は見開かれた目から抜け、頭は完全に覚醒する。

昨夜は面倒な仕込みがあったため、伸子は普段よりも早い時間に家を出た。誠一の婚約者は夜に訪れることが時折あったが、それでも伸子が祇園の店に出勤する七時過ぎには帰るようにさせていた。外で二人がどこへ行くとうなにをしようと構わないが、この家にいる限りは、二人きりで夜を過ごさせることを伸子は許さなかった。

それなのに、自分がいないことをこれ幸いと、あの女はぬけぬけとこの家に入り込み、のうのうと一晚を過ごしたのだ。誠一がジョギングをサボった理由は、それなのだろうと、伸子は確信した。

伸子は乱暴にヒールを脱いだあと、息子と仲良く並んでいたスニーカーを蹴飛ばす。そして、意図的に足音を響かせながら廊下を進む。案の定、居間には誰もいなかった。伸子は歩みをゆるめることなく、そのままの勢いで階段を駆け上がった。足音を聞きつけた女が、慌ててベッドから起き上がる光景を思い浮かべ、伸子は密かに笑った。女は裸かもしれない。整った顔が、焦り、歪む様を望んだ。

「誠一！ 誠一ちゃん。今帰ったよ。何やの？ あんた具合悪いんか？」

誠一の部屋の前に立ち、伸子は拳で戸を叩く。薄いベニア板を重ねてつくられているその戸は、伸子が叩く度に軋み、細かな埃を放出した。

先ず、冷や汗をかいた息子が顔を出すことを伸子は予想していた。しかし、反応は全くなかった。物音一つ、うめき声一つ聞こえない。一瞬、間の悪い静寂が伸子を包む。

伸子の怒りは加速した。自分の居ぬ間に盗人のごとく家に忍び込んでおきながら、存在を無視するかのごとく対応されている。伸子は更に力を入れて戸を叩いた。

「ちよつと。起きなさい。さっさとこの戸を開けなさい！」
穴があくほど戸を叩いたが、やはり反応はなかった。

伸子は戸のノブに手を伸ばす。今までは息子のプライバシーを尊重して、勝手にそのノブを回したことはなかったが、このときの伸子にそんなことを悠長に考えている余裕はなかった。

しかし、ノブは回らない。間違いなく施錠されていた。その部屋は、元々亡き夫の書斎としてつくられ、鍵が付けられていたのだ。部屋の内側から、ノブの中心のボタンを押すタイプの鍵だった。外に鍵穴はなく、息子が部屋の中にいるのは確実である。

再度伸子は戸を叩く。何度も何度も叩いた。怒りの感情は次第に薄まり、代わって不安感が伸子を支配しはじめていた。愛する息子の身に、何事かが起きている。やがてその騒ぎを不信に思ったラーメン屋も二階に上がってきて、二人で声を出した。伸子は心配のあまり、半狂乱となって騒ぎはじめる。

「壊してもええか？」

伸子に了解を得ると、ラーメン屋は戸に体当たりをはじめた。二度、三度。戸は見かけ以上に頑丈で、なかなか開く気配がない。体当りを続けながら、ラーメン屋は伸子に語りかける。話しかけなければ、彼の恋人は正気を失いそうだった。伸子の中に息子とその婚

約者がいることを信じきっているが、中には誰もいないのだろう。靴があつても、別の靴を履いて出かけているのだろう。前日に互いに新しい靴を買ってきていないと何故言えるのか。そうでなければ、この静けさは異常である。鍵は、なにかの拍子に自然と施錠されてしまっただけだ。

話しても伸子は落ち着くそぶりを見せなかった。伸子の気がすむのならと、男はいつそう力を込めて、戸にぶつかっていった。

大柄なラーメン屋がぶつかる毎に、戸は悲鳴を上げた。六回目か七回目、木が裂ける音がした。そこから更にラーメン屋は、足で蹴ること五回、ようやく戸は破壊された。

伸子は戸が開くと同時に部屋に飛び込んだ。そうして先ず、ベッドに呆然として座る、息子の婚約者を見つけた。普段は整った顔立ちのその女が、弛緩した表情でただ座っている。その衣服に乱れはなく、ただ、ポスター一つ貼られていない部屋の白壁を眺めていた。口が僅かに開いている。

「あんた！ おるんやったら、何で返事一つせえへんの？ 誠一ちゃんは何処行つてん？」

ベッドに座る女の視線がゆっくりと動き、伸子を捕らえた。その瞳は、なんの意思もない、単なる穴に見えた。

気味の悪さに、伸子はその視線から逃れようと首を曲げた、その瞬間だった。

伸子は、自分の足元に黒いシミが広がっていることに気づく。そして、その中心に頭があつた。うつ伏せで倒れている、男の頭だった。

それが、愛する我が子のものだと分かると、伸子は声にならない悲鳴を上げた。彼女にとってそれは、世界の終焉にも等しいものであつたのだ。

人生で一番初めの友のことを、憶えているものだろうか。家族を除き、最初に心を通わせあった友達のことを。

少なくとも、私は憶えていない。顔も、声も、名前も、存在したのかさえも憶えていない。しかし、第一の友は確かにいたのだろうと思う。ぼやけた黒い影が、私と手をつないでいた。そんな気がするんだ。

御堂筋沿い、本町駅構内にある黴臭いトイレ。私は毎日夕刻、この一番奥に位置する洋式便所に座り込み、空虚な時間を過ごす。便座は一部が欠けており、黒いビニールテープを何重にも巻き一時的な補修がなされていた。そのテープ部分が尻に張り付き、座り心地は最悪だ。

それでも私は仕事帰り、毎日その場に立ち寄った。湿気た空気に、遠慮のない芳香剤の香りと、小便の臭いが混じり合う。ときには、酒と吐しゃ物の臭気も加わるその場の空気が、惨めな私の居場所として相応しく思えたのだ。

しかし、永遠にその場にいることは許されない。今も慌しく戸がノックされている。私は澄んだままの水を流し、居心地のよい空間をあとにした。

ホームに出て空気の流れを感じると、生駒行を告げる無機質な市営地下鉄のアナウンスが聞こえた。タイミングよく、私が乗る電車が滑り込んでくるところだ。

白線ギリギリに立つと、生暖かい風が顔に触れた。

私は、電車がやってくる方向に目を向ける。手に持った文庫本に

は、全く意識が向いていない。全神経は背中に集中していた。

誰かが、この背中を押してくれることを願う。勢いよく押された私の体は宙に舞うよう、電車の前に飛び出すのだ。

警笛が鳴り響いた。

いつも、この刹那私は祈る。見知らぬ誰かが私をホームへと突き落としてくれるのを。

しかし電車は私の目の前を通過し、速度を落として停車する。電車の風圧で、私の短い前髪が揺れ、ゆるめていた紺のネクタイがふわりと浮かんだ。

気落ちしたまま、私はその場にたたずむ。そして、電車から吐き出される人の波により右へ左へと突き飛ばされた。そうしてようやく私は、人々が下車し終わった電車に乗れる。汗と化粧の臭いに押し返されそうになるが、息を殺して足を進めた。

ドアが閉じ、うねりを上げて電車が動きはじめると、私は慟哭を抑えるのに必死だった。

死にたい。もう、死にたい。誰か殺してくれ。

それが私の唯一の願い。他には何もなかった。

大学を卒業し、無難に就職して一年。営業の仕事にも慣れ、変わらぬ日常が永遠に続くと思われる惰性の日々。同僚たちは営業成績で一喜一憂し、コンパでの出会いに色めき立つ。しかし、私には何一つ楽しいことなどなかった。周りの人間に合わせ笑い、ときにははしゃぐこともあったが、それらは全て演技だった。本当に心を震わせたことはない。正確に言えば、高校を卒業したとき、それ以来、私にはなにもなかった。あったのはただ、演技の上手い空虚な函だ。電車は、からっぱの函である私を家へと運ぶ。私は好きでもない推理ものの小説に目を走らせてはいるが、内容は全く頭に入っていない。それはただ、得意先の担当者がこの作者のファンであり、話を合わせるのに便利であるから読んでいるだけだ。

地下鉄はカーブにさしかかり、連結部が悲鳴を上げる。大阪の町を東西に走る地下鉄中央線は、地図上ではまっすぐな中央大通りの

真下にあるが、実際に乗ってみると右へ左へとよく曲がる。これは、どこの都市の地下鉄にも通じるものなのかもしれない。

車両が緩やかな弧を描くと同時に、私はふらりと二三歩よろけた。左手は文庫に、右手はアタッシユケースにより塞がっていたため、つり革にも掴まっていなかったのが悪かった。私はすぐ後ろにいた人物の足を踏んでしまった。泥に汚れた、赤いラインが入ったスニーカーだった。それが女性のものだと判ったのは、短い悲鳴を聞いたからだ。

「すみません」

相手の顔を見ることなく、蚊の鳴くような声で私は謝る。その後何事もなかったかのように、私は体勢を整え、再び文庫本へ目を向ける。

しかし、先にも増して小説には集中できなかった。奇妙な感覚だった。女性の短い悲鳴が、何度も何度も、頭の中で木霊する。

そうだ。私はその声を知っている。その悲鳴を知っている。忘れはしない。それは、私が愛した女性のもの。白い肌が瞼に蘇った。風に揺れる長い髪。鮮やかな唇。そして、鋭く冷たい瞳。

彼女になれば、本気で殺されても良いと思っていた。その女性が傍にいる。今、私の後ろに立っている。おそらく、足を踏みつけた私を恨めしげに睨み付けているのだろう。

私の動揺を気にも留めず、地下鉄は森之宮駅に着く。私は冷や汗をかいた。後ろの女性が降りてしまわないだろうか、気が気ではなかった。

やがて地下鉄は停車し、買い物袋を抱えた太った中年女性が他の客を押しつけて降りていく。私も押され、自然と体が反転した。

文庫本を抱える体勢は崩していない。しかし、私の正面には彼女がいた。

視線を上げることができない。私はただ文庫本の下から、少し汚れた彼女のスニーカーを覗いていた。スニーカーに描かれた二本の赤いラインがやけに目に付いた。

鼓動が高まる。もう、文庫の文字は単なる記号と化していた。何故か涙も溢れてくる。私はまばたきの回数を増やし、それがこぼれないようにすることに必死だった。

再び車両は揺れた。私のアタツシケースが振られ、彼女の足にぶつかる。そのときはじめて、私は彼女がブルージーンズをはいていることを知る。カバンがぶつかった瞬間、彼女は鋭く舌打ちした。私の疑惑は確信へと昇華した。まだ顔を見ていないが、確かにその女性だった。喜びと恐怖を、私は同時に感じていた。

「あれ、中井君……」

声をかけられ、ようやく私は顔を上げる。

そこには、黒い大きな瞳があった。文字通り目と鼻の先に、透き通るような白い肌が見える。

「やっぱり、中井君じゃない。わたし、憶えてない？ 浅野、浅野沙耶。ほら、高校で三年間同じクラスだった」

無論、憶えていないわけではない。それどころか、この六年間、一日たりとも忘れたことはなかった。彼女のことならば、血液型も生年月日も、食べ物の好き嫌いも、全て憶えている。どれも彼女が他の生徒と喋っているのを立ち聞きした情報であり、直接言葉を交わしたことは数えるほどであるが、一つ一つ、私の脳裏に鮮明に刻まれているのだった。

「……ああ、浅野さんか。憶えてるよ。なんや、久しぶりやね」

揺れる車両に負けず私は動揺していたが、必死に平静を装った。声も震えていたのだが、地下鉄の喧騒により、目立ったものではないと信じたい。二人の距離が近すぎるため、自分の口臭がとても気になった。

「ほんと、久しぶりね。なに？ ネクタイしてるってことは、ちゃんと就職できたんだ。ああそうか。中井君、京大入ったんだよね。世の就職難なんか関係ないか」

彼女が、私の進路について知っていてくれた。「何で知ってるんや」とすぐにも問いかけたかったが止めにした。おそらく友達に

でも聞いていたのだろう。私は一浪して入学できた口だったが、それでも私のいた高校から京大へ進学できた人間は限られている。極めて地味な存在であった私であるが、進学先の件は彼女の耳に入っているもおかしくはなかった。

「浅野さんは何してるん？ 仕事帰りにはみえへんけど」

距離が近すぎるせいで彼女の全貌は何えないが、ジーンズに色あせたパーカー、お世辞にもおしゃれな格好だとはいえない。強いて言えば、近所のコンビニかレンタルビデオ屋へ出かけるようなスタイルである。周りは会社帰りのサラリーマン、OLが多いだけに、彼女は浮いた存在であった。

「私？ 私もなんとか大学は卒業できたんだけど、今は無職。お兄ちゃんに養ってもらってるの……。家事手伝いって言ったら聞こえはいいかな」

頭の中に言葉は溢れているのだが、口から上手く出てこない。私金が金魚のように口をパクパクと開いているうちに、電車は次の緑橋の駅に到着しようとしていた。

「あの、俺、この駅なんや」

自分でも驚くほど淡白な声だった。嘘を付いてこのまま電車に乗っていたい願いと、すぐにでもこの場から逃げ出したいと欲す二人の私が出た。結局私は、楽な道を選択した。ろくに別れの挨拶もしないまま、電車から降りようとしていた。これまで歩んできた人生そのものだった。

電車を降りた瞬間私は振り向き、せめて携帯電話の番号を聞こうかと思つたが、後から押し出されてきたサラリーマンに突き飛ばされてしまい、最後の機会も失った。

扉は無情な音を立てて閉まり、間の抜けた警笛を鳴らして電車は動き出す。私は必死に彼女の姿を社内を探したが、曇ったガラスと他の乗客のせい、みつけることはできなかった。

突然の幸運に鼓動が治まらない。しかし同時に、その幸運を自ら捨て去ってしまったことを思い出し、うつ状態へと陥った。なんと

いう愚か者だろうか。その女性と会えなくなったことが、人生における生きがいを失い、自殺を常に考えるような精神にまで追いやられていたにもかかわらず、いざその女性が目の前に現れたら、しつぽをまいて逃げ出してしまふ。これほど愚かなことはない。いくら心の準備ができていなかったからといっても理由にならない。自分のことを好きだと思ったことはなかったが、これほど嫌いになったこともなかった。

拳で頭を三回小突き、私は改札へと歩きはじめた。

「頭良いのに、そんなことしたら馬鹿になるよ」

弾かれたように私は振り向く。そこには、微笑みながら立っている浅野沙耶がいた。

「あれ、何で、そ……」

やはり言葉は上手く出てこない。しかし、幸運はまだ続いていたのだ。

「せっかく久しぶりに再会したんだから、どっか飲みに行こうよ。今日は金曜日だし、明日は休みなんですよ」

彼女の声を再び耳にすることができただけで、私は幸せだった。

その上、誘われもしているのだ。信じる神などいなかったが、私は何かに感謝した。

「でも、もう遅いで。それに君、どこかへいく途中だったんちゃうの」

この期に及んで、私はまだ及び腰だ。

「いいからいいから。そんなことは心配しないで。さあ、行きましょ」

沙耶は私の腕に絡みつき、自ら進んで歩きはじめた。私たちはそこから改札を通り、地上に出て店を探したはずだが、その辺はよく憶えていない。私は、完全なパニック状態にあったのだろう。

気づくと、私たちは一軒の居酒屋に入っていた。そこは、全国各地にでもあるチェーン店で、店員の掛け声が常に響いている騒がしい場所だった。

「じゃあ中井君はメーカーの営業マンやってるんだ。さすが、なんかエリートって感じよね。よくテレビとかで見る名前だもんねこの会社」

私の名刺と顔を交互に眺めながら、沙耶は話している。

「ね、私よく知らないんだけど、中井君の会社って結局何をつくっているわけ？」

「何って、一言じゃ説明できへんな。建築材料とか家電とか住宅設備とか、正直俺も全部は分かっとらんね。俺のいるセクションは、工事現場のおっちゃんらが使っている工具を担当してるんやけど、分かるかな、電動工具ってやつ。ネジ締めたり、釘打ったりすんの」
「ふーん、なんか分からないけど、お給料も良いんでしょ？ 大企業だもんね」

「そんな、バブルの頃やったらどうかしらんけど、今じゃどこもしんどいよ。うちもリストラで、四十歳以上のおっちゃん達はビクビクしてるな」

内心の焦りを感じかねないように、私は意図的に言葉数を増やしていた。

金曜日の居酒屋は、全てのテーブルが埋まっている。待たずに座れたことは幸運だった。私と沙耶はカウンターに並んで腰掛けている。彼女の向こう側に座り一人で飲んでいる中年男性が、沙耶の口から滑らかに語られる標準語に対して不快な表情をみせていた。

「この辺りに住んでるってことは、大阪へ引越したのね」

「ああ、京都の実家から通えないこともないけど、遅うなる日も多いしな。それに、大学も実家から通ってたから、一人暮らしもしてみたかったからな」

嘘である。本当は京都から離れたくはなかった。その方が、沙耶と出会える可能性が高いと信じていたからだ。

「そうなんだ。私はね、高校出てから東京の女子大に行ったの。でも学校の寮に入ったから、一人暮らしはできなかったな。私も一度はしてみたいよ」

彼女が東京の大学に進学したことは、風の噂で知っていた。私も彼女を追って東京の大学へ進むことを浪人時代に考えたが、結局地元から離れることができなかった。そこまでの行動力はなかったのだ。それでも、お盆や正月といった帰省シーズンには、街を歩く度に彼女の姿を探し求めている。奇跡的な幸運を期待していた。私が大阪で一人暮らしをはじめたのは、通勤の利便性と同時に、そうした自分の女々しさを改善したかったという理由があった。思い出の詰まった土地で暮らしては、いつまでも私は沙耶という呪縛から開放されないのではと恐れたのだ。しかし、結局どこに住んでも、私は沙耶を忘れることができなかった。

「君、確か高校進学と同時に東京から引越してきたんちゃうかった？」

「ううん。生まれ育ったのは横浜」

彼女が横浜育ちであることを知っていたが、私はわざと間違えた。人の過去を正確に記憶している人間は気持ちが悪い、君が悪いと感じられると恐れたからだ。

学生時代を含めて、関東から関西へやってきた人間を何人か知っているが、皆一年もしない間に、多少は言葉に関西弁がうつるものだった。しかし彼女は違っていた。決して周囲とのコミュニケーションをおろそかにしていたわけではない。むしろ友達が多く、男女問わず人気があった。彼女はその中において自我を失わず、言葉が訛ることはなかった。影で彼女の標準語に不満を言う一部の女生徒もいないわけではなかったが、それはごく一部に限られていた。

「まあともかく、関東へ戻って、また関西にやってきたわけか。東京で就職する気はなかったの？」

この質問に対して、一瞬ではあるが彼女の表情が暗鬱なものへと変化したのを私は見逃さなかった。今、沙耶は無職であると言っていた。就職に関する話題をふったことを後悔したが、口に出してしまったのは仕方がない。私は二杯目のビールを口に運びながら、彼女の表情に注目する。

「ま、色々あってね。まあ良いじゃないの。飲もう飲もう」

明らかに繕った笑顔であったが、私は救われた。

それからしばらくは、高校時代の思い出話を語り合った。高校三年間を同じクラスで過ごしていたながら、二人の会話はこの居酒屋に
いる間に行われた方が密度・量共に勝っていた。彼女と共通する話
題などないと恐々としていたが、教師のこと、変わった友人のこと、
話は尽きないかと思われるほど続く。そして、二人ともよく飲んだ。
私はビールを飲み続け、彼女は日本酒を好んだ。

酒が進んだせいか、私は彼女を観察する余裕も出てきた。格好は
先に見たとおり、余所行きのものではない。髪型も寝癖こそないも
の、整髪料を使った様子はなく、化粧もしていなかった。声を出
して笑うが、どこか表情に影がみえ、時折周囲をさり気なく窺って
いるようにも見える。

それよりも先ず、彼女がこの地域にいること自体が不可思議だ。
正直、私はいつでもどこでも、彼女の姿を探していた。横顔が似て
いる女をみれば、正面に回り込み確認する。声が似ている女がいれ
ば振り向いた。しかし実際、偶然電車で出会うなんて幸運はできず
ぎていると自分でも思う。しかし、本当の幸運というやつはそのよ
うなものなのかもしれない。

気づいたときは、既に遅かった。時刻は十二時半を回っていた。

「浅野さん。電車、大丈夫なんか」

京都市きの終電は、京阪もJRも、既に出発してしまっている時
間だった。

青ざめた私とは正反対に、彼女は平生としており、お猪口に残っ
た日本酒を呷っていた。

「うん。もういいの、特にどこかへいこうとしてたわけでもないし
ね」

私たちは、ともかく店を出た。会計は私が払ったが、沙耶は酔っ
ているのか、財布を出すそぶりもみせなかった。

「この後どうするの」

沙耶は髪を掻き揚げ、火照った顔を私へ向けてそう言った。繁華街のネオンを背景としたその姿は神々しいまでに美しく、私の酔いを醒ます。

「家に帰るんちゃうんか？ 電車はないかもしれんけど、タクシー代なら立て替えたるよ」

言った後に気づいたが、私の財布にはここから京都までのタクシー代相当のものは入っていなかった。それでも、近くのコンビニのATMで下ろすことはできる。

だが、彼女は首を横に振った。

「実はね、私、今日は帰るつもりはなかったの……」

次の瞬間、私の周囲の時間は間違いなく止まったのだ。

「今日、中井君の部屋に泊めてくれない？」

私の狭いワンルームマンションに、浅野沙耶がやってきた。

酔った頭でありながらも、私の羞恥心はしつかりと目を覚ましており、彼女を玄関に待たせ、部屋中に散らばる雑誌や食べ散らかしたスナック菓子の袋を乱暴にゴミ袋へ詰め込んでいた。

「なんか、普通なんだね」

沙耶の顔は日本酒により桜色に染まっていたが、動作、言動はまったくのしらふに見える。私の部屋に入り四方を見渡して、少しがっかりした口調で彼女は言った。

「京大出のエリートには、もっとおしゃれで、広々としたマンションに住んで欲しいものよ。ドラマに出てくるようなね」

舐めまわすように部屋の中を確認したが、面白みのある物をみつけられなかったようで、彼女はどさっと私のベッドに腰掛けた。

夢と現実の区別ができなくなっている。この光景は、私が長年求めていたものであった。高校の入学式で出会い、一目惚れしてから丸九年。幾度も幾度も思い描いた理想の姿が、今眼前に広がっていた。私のベッドに腰掛ける彼女。本当にこれが現実なのか、思い切り自分の頬を打って確かめてみたかった。

「ねえ、お願いだからそんなふうには座らないで」

呆れた顔をした彼女が言った。私はなんのことかすぐには分からなかったが、どうやら私は玄関近くに正座していたようだ。

「なに？ 酔っぱらってるの？ お酒弱いんだね」

足元に転がっていたテレビのリモコンを拾いながら、彼女は笑った。沙耶の笑顔は、悪魔的な魅力を持っている。

「なあ、本気でうちに泊まる気なんか」

私の声は明らかに震えていた。私の動揺が手にとるように伺えたのか、彼女はいつそう明るく笑う。

「もしかして、すごく迷惑だった？ 中井君の彼女が怒るとか、大

丈夫かな……」

「そんな、彼女なんておらへんよ」

彼女の目に、私はひどく激昂しているように映ったのだろう。沙耶は驚いた表情をみせ、その後また笑い出した。

「そうなの。じゃあ、何も問題ないよね」

笑顔を維持したまま、彼女はテレビをつける。この時間は、多くのチャンネルが報道番組を組んでいるが、彼女は若手芸人が馬鹿騒ぎしているバラエティを選んだ。

「ねえ、中井君お風呂入っておいでよ。仕事で疲れてるんでしょ。私、ちよつとテレビ見たいから」

私はネクタイを解き、上着と共にハンガーへかける。その間、沙耶はテレビをみながらクスクスと笑っていた。

私の部屋に脱衣所といったものはない。部屋から直接ユニットバスへいくことになる。彼女の前で着替えるわけにもいかず、どうするかと悩んでいたときだった。

「中井君、タバコない？」

「ああ、俺吸わへんから……」

「そうなの。じゃあ、部屋で私が吸ったら嫌よね」

「構わへんよ。灰皿はないけど、空き缶でも使つてよ」

「じゃあ、ちよつと買つてくる。すぐ隣にコンビニあったよね。タバコ置いてるよね」

彼女は自分の財布をつかみ、私の部屋を出て行った。そのときはじめて気づいたが、彼女はハンドバックも持っていないかったようだ。沙耶は私が風呂に入るのに対して、気を利かせてくれたのだろうか。それとも単にニコチンを欲しただけだろうか。

ともかく、この期を逃すかと素早く衣服を脱いでいるそのとき、私は心臓が縮み上がる思いをする。ベッドの上、枕に並ぶように置かれている革張りの分厚い本。それは、高校の卒業アルバムだった。寝る前に沙耶の写真を眺めるのは、私の体に長年染み付いた習慣である。

卒業アルバム自体をみられても、何も彼女に気取られるようなこととはいいはずだ。私は、沙耶の写真に丸印をしているわけでもなく、付箋を張っているわけでもないからだ。しかし、心のやましさというものはあった。誰しも、自分の知らないところで写真を毎日眺められているということは、気持ちのいいものではないだろう。私は卒業アルバムをクローゼットの奥へと投げ込み、その後急いで風呂へ入った。

熱いシャワーを浴びれば、少しは落ち着くと考えていたが甘かった。私は妄想を膨らまし、この後起きるであろう事態を、なんパターンもシミュレートする。いつもより念入りに体を洗い、最後にもつもは無視している湯垢などを拭取ってユニットバスを出た。部屋の中で着替えができないことを予測して、予め着替えの下着とスエットは持ち込んでいたが、湯気のせいでそれらは湿っていた。

風呂場から出た私の目には、最悪の事態が映っていた。

沙耶がいないのだ。

瞬時に私の脳は混乱する。彼女を思うあまり、終に私は幻覚を見るまでになっているのだろうか。タバコを買いにいくと言って出かけた彼女だったが、それにしても帰りが遅い。私は急いで入浴を済ませたつもりだが、それでもゆうに十分間は経っていた。コンビニからは二、三分で帰ってこられるはずであった。

濡れ髪のまま、私は部屋の中を右往左往し、彼女の痕跡を必死で探した。しかし、元々沙耶は手ぶらで現れたのだ。部屋の中には、何一つ残されていない。唯一、バラエティ番組が流れるテレビがついたままになっている。それだけだった。

本当に夢だったのか。私は自虐的な笑みを浮かべて立ちすくんでいた。

錆付いたドアが音を立てて開いたのはそのときだった。沙耶はコンビニの袋を下げ、私を不思議そうに眺めた。

「そんなに面白い？ そのテレビ」

私は不自然に浮かんでいた笑みを振り払い、空咳をする。

「えらい遅かったな」

「心配した？ ちょっと雑誌を立ち読みしてきたの。あと、歯ブラシと、下着買ってきた」

それに、「と間を持たせてから、彼女はそれまで背中に隠していたもう一つのビニール袋を取り出す。

「ビールも補充してきましたー」

嬉しそうに彼女が揺らすそのビニール袋は、銀色の缶ビールで膨らんでいた。

「まだ飲むんかい」

「いいじゃないの。明日は休みでしょ」

彼女は乱暴に靴を脱ぎ、テーブルに転がるように倒れこむ。そして、さっそく五百ミリリットルのビールを取り出しプルトップを引き、缶のまま旨そうに喉を鳴らした。その姿は、私が長年思い描いていた成長した浅野沙耶とは若干異なったものであったが、飾らない仕草には好感が持てた。

ほら、と彼女が私に差し出すビールも、シャワーで汗をかいたせいか、とても旨いものだった。

「じゃあ、あたしもシャワー浴びようかな」

長い睫毛に挟まれた瞳が、一瞬だけ私を捉える。その意図を瞬時に汲み取った私は、缶ビールを片手に立ち上がる。

「俺、散歩してくる」

私は、スエット姿のまま外へ飛び出した。これがサンダルであつたらそれほど不自然ではなかっただろうが、スエットに革靴はいただけない。変質者の観がある。急いだせいではない。元からサンダルなどもっていなかった。

そんな姿で深夜の散歩へでかけるわけにもいかず、私はマンションの階段踊り場で、所在無く時間を過ごした。持って出た缶ビールはすぐになくなり、私は何もすることができなかつた。こんなとき、タバコを吸う習慣がある人間が羨ましく思える。だが、四月の夜風は風呂上りのほてった体には心地良かった。無論熱くなっていたの

は、風呂のせいばかりではない。

女性の入浴は時間がかかると聞いたことがあるため、余裕を持って約一時間後、私は自らの部屋をノックした。耳を傾けると、「中井君なの？」という沙耶の声が聞こえたため、慎重に扉を開く。

そこには、Ｔシャツ姿の沙耶が、缶ビールを片手にテレビを見ている姿があつた。

「どうしたの？ 貴方こそどこまで散歩してきたの？」

テーブルの上には、既に空となった缶ビールが二本転がっていた。彼女が浴室から出たのは、ずいぶん前だと推測できた。

テレビでは見慣れぬニュースキャスターが、今日の、正確には昨日起きたニュースを無表情で伝えている。私がニュースに目をやると、何故か沙耶は急いで手元のリモコンによりテレビの電源を消した。

「ねえ、ところで私、どこで寝たらいいの？」

それは、私が四月の寒空にたたずむ間、ずっと考えていた問題だった。何もすることがなかった私は、考えることしかできなかったのだ。

彼女に私のベッドを譲り、私が床に寝るのが、まあ順当な判断だろう。しかし、私の寝汗が染み込んだベッドに、彼女を寝かすことに抵抗がある。臭いはしないか、心配だ。

それでも、沙耶を床で寝かす訳にはいかない。友人が泊まりにくることもない我が家には、客用の布団などないのだ。

「一緒に寝ようか」

彼女は薄く笑いながら言った。完全にからかわれていると分かっていても、私の体は素直な反応を示す。先ず顔が真っ赤に染まるのを感じた。

「もう、勝手に寝てくれや」

私は押入れの中から冬用の毛布を一枚取り出し、さっさと床に転がった。座布団を枕にし、きつく目を閉じる。「冗談で言った彼女の言葉が耳からはなれず、私は下腹部が熱を帯びていくのを感じてい

た。もう、立ち上がることはできない。

クスクスと沙耶の笑い声が聞こえ、その後すぐに蛍光灯は消された。

「ねえ、明日どこかへ行こうよ。大阪って、あんまりきたことないんだ。案内してよ」

無論ばれていただろうが、私は寝たふりを続けており、彼女の言葉にこたえることはなかった。それでも頭の中では、明日はどこへ行こうと考える。これが夢でないことを祈りながら、私は重苦しくも心弾む長い夜を過ごすのだった。

まさに、まさしく、その日は紛れもなく、私の生涯で最良の一日となった。

十時過ぎに目を覚ました沙耶と共に、大阪で一、二を争う繁華街である難波界隈へと出かけた。比較的落ち着いた梅田よりも、若者向けのスポットが多い難波の方がより大阪らしく、より沙耶を楽しませることができると判断した結果だった。

昨晩は緊張と期待とにより、殆ど眠れなかった。寝不足のせいで顔は普段以上にさえないが、持っている服の中で最もましだと思われる紺のシャツとカーキ色のパンツという、私にとっては最大級のおしゃれをしている。ちなみに普段の祭日に出かける格好は、首周りが伸びた古いTシャツに穴の開いたジーンズが多い。それどころか、休みの日に外出すること自体珍しかったりする。

地下鉄を乗り継ぎ、私たちは心斎橋駅で降りた。

沙耶ははしゃいでいた。先ず地味な格好をなんとかしたいと小さな洋服屋に入る。店内は土曜日だというのに閑散としており、暇そうな中年女性が爪を切っていた。

そんな店でも、私は女性ものの服を売っている店に入った経験が皆無であったが故に、店内に五分も留まることができなかった。

約二十分間、所在無く道行く人々を眺めていた私の前に、別人と化した浅野沙耶が現れた。麦わら帽子に大きなサングラス。肩を露にしたピンクのキャミソールに七分丈の白いパンツ。スニーカーは大きなコスモスが飾られたサンダルに変わった。沙耶の体の線がはつきりとわかる服装だった。彼女は高校生の時分よりも、幾等か痩せたように見えたが、美しいことに変わりはなかった。

「どお、似合う？」

手を腰に置き斜めに立ってポーズをとり、彼女は聞いた。私は細

かく、何度も頭を縦に振っていた。その姿がよほど滑稽だったのか、沙耶は声を出して笑った。

「これで何とか街を歩けるかな。中井君に恥ずかしい思いをさせない？」

「そんな、俺の方が恐縮してる」

「化粧ができたなら良いんだけど、そこまでは準備してないからね」
今まで着ていたジーンズやパーカーは、コンビニで買った紙袋に詰め込み、私が持つことになった。まだ季節として彼女のキャミソールは早すぎるかに見えたが、その日は五月上旬並みの暖かさで、空も晴れ渡っていた。私は白く滑らかな彼女の肩のラインを、歩きながら何度も盗み見していた。

そこから、御堂筋に沿って建つレンガ造りのカフェで遅めの朝食をとり、若者が集うアメリカ村へ向かった。私も沙耶も、特に明確な目的があつたわけではない。ただ、華やかな場所に行けば、何かしらで沈黙が苦になることもないだろうと思われた。

アクセサリー屋やジーンズショップをひやかしながら、私たちは時間を過ごす。沙耶は何にでも興味を持ち、よく喋り、よく笑った。私はその隣で、ただ微笑んでいた。人込みは嫌いだ、彼女という限り、人々がつくり出す雑踏も心地よく感じられた。

時間はいつの間にか午後二時をまわっていた。ランチを食べていなかった私たちは、若者の町には似つかわしくない古びた定食屋に入った。彼女はもつと明るい、洒落た店を好むだろうと思っていたのだが、そこへ入ろうと先に言ったのは沙耶の方だった。

昼飯時を過ぎているからか、それとも常にその状態なのか分からなかったが、とにかくその店は空いていた。我々の他は、半分ほど空いたビール瓶を前にして動かない老人が一人いるだけだ。

私は塩サバ定食、沙耶はてんぷら蕎麦を注文した。腰の曲がった一人の老婆がつくついているとは思えぬ早さで料理は完成し、空腹だった私たちは、黙々と箸を動かしていた。

食事も済み、老婆が無言で注いでくれた番茶をすすっていると、

私はふいに自分の中で慟哭が始まるのを感じた。自分でも、それが何故だか分からない。後で考えたことだが、このとき私は喜びのあまり泣きそうになったのではなく、その後訪れる夢の終焉を怖れ、子供のようにむせび泣きしそうになったのだ。

不自然な咳払いでそんなむせびを振り払い、私は無理に笑顔をつくる。

「なあ、この後どうする？」

口に出した後、すぐに私は後悔した。沙耶がそのまま帰ってしまったのでは、という不安が脳裏を過ぎる。が、沙耶の口からは明るい口調で提案が出された。

「そうねー。久しぶりにビリヤードがしたい気分だわ」

定食屋を出ると、幸運なことに歩いて数分でビリヤード場をみつけることができた。原色が予想できないほど色あせた小さな看板を掲げているその店には、難波駅の近くであるにもかかわらず客がない。不健康に痩せた青年が店番をしていた。彼は無言で一時間七百円と書かれた料金表を指差して、手書きの伝票を渡してから、ずっとテレビを見続けていた。その店が流行らない訳が分かった。

用意されているボールの番号は九番までで、必然的に我々はニンボールをすることになった。幸いなことに、私は学生時代に一時ビリヤード場に通っていたことがあり、沙耶の前でもそれほど恥をかかずに済んだ。しかし、彼女の腕は本物だった。綺麗なフォームから打ち出される力強い手玉は、正確にボールをポケットに落とすていく。一時間で八ゲームをこなしたが、ジャンプショットも見事に決める沙耶に結局私は一勝もできなかった。

軽い運動をして汗をかいた我々は、少し早めではあるがビールを飲むことにした。これを提案したのも沙耶だった。この日は終始、沙耶が発起した行動をとっていた気がする。

イタリア料理を主体とした、創作料理の店に入る。アンティーク調の落ち着いた店が難波の若者に敬遠されたせいも、席はガラガラに空いていた。柄物のベストを着たウェイターが仰々しく持ってきて

たメニューを見ると、どの料理もびつくりするような値段であったが、沙耶と過ごす特別な食事だということ、その場で席を立つような真似はしなかった。

ビールを飲むつもりだったが、そんな空気ではなく、私は無作為に選んだボトル五千円のワインを注文する。注文の際私の声が上がっていたせいか、沙耶は長い間クスクスと笑っていた。財布の中身を思い出してから、一人七千円のコースを注文する。

「お金大丈夫？ 私、自分の分はちゃんと払うからね」

と沙耶は言ってくれたが、そもそも金の使い方知らない私である。こんなときでなければ、単に預金通帳の数字が増えていくだけの、つまらない人生なのだ。

ワインボトルが半分になるころ、順場に料理が運ばれてきた。沙耶はよく飲み、そしてよく食べた。普段小食な私も、彼女につられてフォークを口に運んだ。値段と見比べるとそれほど美味しい料理ではなかったが、それまでの人生で最も楽しく、最も幸せな食事だった。

奮発してもう一本同じワインを頼んだが、食事で満腹となった私に代わり、沙耶が殆ど一人で空けた。

「そんなに飲んで大丈夫か？ 帰れるんか？」

と心配した私に、思わぬ言葉が返ってくる。

「大丈夫。今晚も中井君の家に泊めてもらうもの」

沙耶の言葉は、私の思考を止めるに十分なものであった。私は所在無く、鶏のように辺りを見回していた。何故か自分が、とんでもなく背徳的な行為をしている錯覚に陥ったのだ。

そのときには客も僅かに増えており、我々の右隣のテーブルにも中年のカップルが座っていた。その男の方が、目を細めて沙耶の胸元を眺めているのに私は気づいた。不快だった。その男がではない。いやらしい目つきをした男が、自分の影と感じられたからだ。私は勢いよく立ち上がり、彼女の手を掴むと、逃げるようにその店を後にした。

「いったいどうしたの、中井君。私、何か気に障るようなこと言っちゃった？」

店を出るとすぐに、心配そうな上目遣いで沙耶が聞いてきた。

酒のせいかな、私の顔は赤みを帯びているようだ。それが彼女には、怒っているように見えたのだろう。

「何も無い。浅野さんは、何も悪ない」

そのまま目的もなく、私たちはしばらくの間、人で溢れかえった心齋橋を歩いた。

「私、やっぱり帰った方が良い？」

一歩後に付いて歩いてきた沙耶が、突然言った言葉だった。私の視界に、地下鉄の入り口を示す看板が入っていた。沙耶の視線の先にも、やはり地下鉄の看板があった。

「なあ浅野さん。そもそも、なんで大阪にきてたん？ どこかに向っている気配もなかったし、今日もこうして一日過ごしてるし」

私はついに、昨日から抱いていた疑問を口にすることができた。彼女が帰宅する素振をみせたことが、私の背中を押したのだ。沙耶が大阪に来ていた理由を知らなければ、彼女を引き止める術も思い浮かびはしないのだ。

人の流れは大河のごとく止まることはない。私たちは、その濁流の中にたたずみ、向かい合っている。

「……実はね、私、兄と喧嘩したの」
蚊の鳴く声で、沙耶は語り出した。

「それで、家出したの。恥ずかしいよね。二十四歳にもなつて家出なんて。だから言えなかったの。ごめんなさい。いくら高校のクラスメイトだったからって、二日も泊めてもらおうなんて迷惑だよ。私甘え過ぎたみたいね。……もう、私帰るから。本当にごめんなさい」

私の横をすり抜け、沙耶は地下鉄の駅へと下ろうとする。私はとっさに、その腕を掴んだ。あまりに力が入ってしまったせいか、沙耶の顔は痛みにゆがんでいた。

「俺、浅野さんのことずっと好きやってんで」

自分の言葉ではないようだった。それでも、しっかりと彼女の目を捉えながら、長年言えずにいた台詞を、私は吐き出すことができた。

沙耶の顔は、痛みにゆがんだものから、瞬時に驚きへと変わる。

それから、彼女は優しく微笑んでくれた。高校時代は、何度も何度も盗み見た。そして、高校卒業後は、数少ない写真と、記憶の中にある彼女を何度も見ていた。そんな私でも見たことのない、優しい笑顔だった。

「……ありがとう」

沙耶の反応は、ただそれだけだった。

結局のところ私の思いを受け止めてくれたのか、それとも拒絶されたのか分からないが、ただ、私の気持ちは理解してもらえたのだろうと思う。

私たちは来たときと反対のルートで地下鉄に乗り、一緒に私の部屋へと帰った。

部屋の中に入ると、沙耶は後ろから私の首に腕を回してきた。一瞬、私は彼女に絞め殺されるのではないかと疑うほど、その腕はしっかりとした力を持っていた。

「うれしかった」

そんな、沙耶の細い声が聞こえた。

魂が抜けた状態となった私は、部屋の明かりを点けることもなく、ただ玄関にたたずむのみであった。

私の首を開放した沙耶は、先に立って暗い部屋に入り込み、家主であるはずの私を逆に迎え入れる形となる。そして、私の手を引きながら、彼女は呟くのだ。

「いいよ」と。

彼女の口の動きだけが、薄暗い部屋の中でもやけにはつきりと見ることができた。彼女の白い歯が光っていた。

私たちは、闇に溶け込むように部屋の奥へと進んで行く。

沙耶の髪が揺れ、甘い香りが糸を引くようだった。

もう、私に意識はなかった。全て彼女に任せきってしまった。
ただ二人して、ベッドに倒れこんだ。

そして私は、このときはじめて女性を知ったのだった。

世界が変わったようだった。今まで見ていた景色には色がなかったが、今は全てが明るくみえている。

今私は、白いカーテンの隙間から柔らかく差し込む朝日を、穏やかな彼女の寝顔越しに見ている。静かに寝息を立てる沙耶の顔は、陶器のように白く滑らかだ。ピクリと黒く茂ったまつ毛が動き、薄く瞳が覗かれる。

「おはよ」

と、かすれる声で彼女は言った。

寝顔をみつめていたことを咎められるかと思い、私は急いでベッドを出る。立ち上がった瞬間、自分がトランクス一枚の姿であることに気が付き、慌てて転がっていたジーンズを履いた。そんな姿を見て、沙耶はやっぱり笑った。

「ねえ、今日はどうする？ 昨日はお金使っちゃったから、今日は節約コースで遊ぼうよ。近くに公園あったでしょ。そうそう大阪城公園。そこ行こうよ」

私が淹れたインスタントコーヒーをすすりながら、沙耶は楽しそうに今日一日の予定を立てはじめていた。私は黙って彼女の話聞いていたが、その予定の最後に沙耶が帰宅するという言葉が出ないことを、ただ祈っていた。

「夕ご飯は私がつくってあげるね。こうみえてなかなか料理は上手なのよ。何つくろうかな……」

「夕飯食って、その後はどうするん？」

耐え切れず、私は問いかける。絶対に聞きたくない言葉を、彼女に言わそうとしていた。

「どうって、どうしたら良いの？」

問いは問いで返された。彼女の瞳が濡れかけているのをみぬよう、

私はこたえる。

「もう二日も経ってる。お兄さんも心配してるやろ」

私の言葉はそこで途切れた。だからなんなのだ、という目で沙耶は私を睨んでいる。

「私、まだ帰りたくないの」

最後の部分は震える声だった。沙耶は俯き、両手で持ったコーヒークップを握りしめる。

「もうええ、分かった。しばらくこの部屋においたらええ。だから泣かんといってくれ」

途端沙耶は顔を上げ、私に抱きついた。そして彼女は私の耳元で、殆ど聞き取れない声で「ありがとう」と呟いた。

しばらくの間、私たちは静かに抱き合っていた。どのような兄妹喧嘩をしたのだろうか気にはなっていたが、沙耶の体温を感じている間に、そんなことはどうでもよくなってしまった。

私たちは一駅分を歩き、大阪城公園へたどり着く。もう一年も大阪に住んでいながら、この公園を訪れたのはこれがはじめてのことだった。

今日も晴れている。加えて日曜日。ましてや桜の季節ともなれば、花見の名所の一つであるこの大阪城公園は、人で溢れているのは目にみえていた。ゆっくり座って花見をできるスペースはない。

しかたなく私たちは、沙耶が買ってきた缶ビールを片手に、四月中旬の葉桜をみながらゆっくりと歩いた。連日飲み続けて胃が重くなっていたが、沙耶と桜並木を歩いているだけで心が弾んだ。ヒラヒラと無数の花びらが舞い、沙耶を神秘的に彩る。私は、気が遠くなるほど幸せだった。

堀に沿って広大な大阪城公園を歩き回り、私たちは心地よい疲労感を感じていた。私は夕食の準備前に喫茶店で休憩することを提案する。

『カンザス』という名前の喫茶店が、私のワンルームマンションの近くにある。毎日その前を歩いていたはずだが、私はその存在を

知らなかった。沙耶とその道を歩くことにより、はじめて気が付いたのだ。それまでの私がいつたい何を見ていたのか、とても不思議だった。

店内は三十席あるかないかの狭さだ。大通りに面しており日当たりも悪くないが、窓に曇りガラスがはめ込まれているせいで、午後四時という早い時間であるのにも関わらずとても暗い。ダークグレイで統一されたテーブルとチェア、そしてポリウムをしばられて流れているビリーホリデイも、その暗さに一役買っている。

席は殆ど空いていた。新聞を広げたまま人形のように動かない老人と、座っただけでも長身だと分かる細身の男が、別々のテーブルに付いているだけだった。

私たちは勝手に空いた席に腰掛けた。するとすぐに、口髭を蓄えたマスターが水を運んできた。私はアイスコーヒー、そして沙耶は目敏くメニユーの中からアルコールをみつけ出し、ハイネケンを注文する。マスターが引き返すとき、奥に座っていた長身の男と、私の視線は交差した。正確には、私の連れである沙耶を凝視している男を、私が発見したのだった。私の視線に気づいたその男は、次に私の顔を見続ける。

同姓である私が呆然とするほど、男の顔は美しい。肩まで伸びた黒い髪、涼しげな瞳に高い鼻。滑らかで白い肌は、石膏彫刻を彷彿とさせる。推定で百九十センチはあるうかと思われるその体躯でなければ、女性と見間違えていることだろう。

男は微動だにせず、ただ鋭い目で私を捉えていた。私はその視線に耐え切れず、目を逸らせた。

「どうしたの。そんなに疲れちゃった？」

沙耶の話の聞いている間も、視界の隅から向けられてくる男の視線を感じていた。

アイスコーヒーとグラスに注がれたハイネケンが運ばれてくる。

沙耶は男の視線には全く気づかず、咽を鳴らしビールを呷った。

「ちょっと、飲みすぎとちがうか」

私の言葉が無視するように、沙耶は早々とグラスを空にする。そして、慣れた手つきでタバコに火を点けた。私にかからないように天に向けて大きな煙を吐き出してから、ようやく沙耶はこたえた。

「もう、お兄ちゃんみたいなこと言わないで」

彼女がアルコールを求める理由が、兄との喧嘩であるのなら良いが、どうやらアルコールそのものが兄妹喧嘩の要因である気がする。沙耶は明らかに、アルコール依存症の気があった。盲目的に彼女を愛している私にも判るくらいだ。しかし、「もう帰る」という沙耶の言葉が恐ろしく、私はそれ以上彼女を責めることをしなかった。

所在なく、私は沙耶から目を逸らす。しかしその先には、依然として私たちを見続ける男があった。機械のように微動だにせず、凝視している黒い眼が見えた。

「すみませーん。おかわり下さーい」

空いたグラスを振りながら、沙耶は店のマスターを呼ぶ。口髭のマスターは素早く新しいビールを運んできて、泡だけが残っているグラスを持ち去った。私はその仕事の速さを苦々しく見ていたが、沙耶はもう新しいビールで咽を鳴らしていた。

そのときだった。私の視界の隅で何かが動いた。気づくと、私の隣に何者かが腰掛けている。あの、長髪の男だった。

「よおー」

と男はなれなれしく声をかけてくる。この男は、沙耶の知り合いだったのだろうか。ならば、男がしばらく我々を見続けていたことも頷ける。しかし、沙耶はグラスを傾けるのを止め、訝しげな顔を男に向けている。

「中井君のお知り合い？」

沙耶の言葉は意外なものであった。沙耶の知り合いでなければ、男は何者なのか。無論、私に心当たりはない。

「久しぶりやな」

男は私の目をしっかりとみつめたままだった。どうやら、沙耶に

ちよつかいを出しにきた軟派男でもないようだ。

「なんだ、やっぱり中井君の知り合いなんじゃないの。紹介してよ」
「いや、知らへん。どちらさんですか？」

この言葉を言うには多少の勇気が必要だった。もしも取引先の間だとしたら、この先の付き合いが悪化するかもしれないからだ。ただ、見た目上は私とほぼ同年齢で、相手の態度からもビジネスの臭いはしていなかった。

「つれないな、中井君。君、中井厚司君だろ」

不気味だった。全くの見ず知らずの人間に、名を憶えられている。仕事上の取引先、過去の友人を幾人も思い出してみたが、このような大男はいなかった。加えてイントネーションが標準語だ。そんな特徴深い人物が知り合いにいれば、記憶に残っていないはずはないのだ。

「小学生んときの、クラスメイトか？」

私の問いに対して、男は首を横に振った。

「わからないか。わからないだろうな。よし、クイズにしよう。なんで僕が君の名前を知っているのか。当たったら、君たちの飲み物代は僕が払おう」

「面白そうね」

沙耶はいち早く警戒を解き、男に笑顔を向ける。一方私は、無言で男を睨みつけていた。沙耶との時間を邪魔されて不快であったが、この二日間で、話題も尽きかけていたのも事実だった。

「とりあえず、貴方の名前を教えてくださいませんか？ それとも、クイズをする上でそれは大きなヒントになるのかしら」

新しいタバコに火を点し、紫煙と共に沙耶は質問を吐き出す。

「いや、問題はないだろうね。僕の名前は御渦宗茂。御する渦と書いてミウズだ。珍しい苗字だろ」

男の姓を聞いても、全く知らぬ名だった。確かに珍しい名字である。一度でも聞いていいるならば、滅多に忘れることはないだろう。ムネシゲという名前にも心当たりがない。

いつの間にも持ってきたのか。男の前には中身が半分減ったコーヒークップが置かれている。御渦はそれを少しだけ飲んだ。

「今のはヒントにもならないな。それじゃあ第一ヒント。僕の年齢は二十三歳です」

二十三歳。私よりも一つ年下だ。見た目通り、同年齢であった。

「大学での友達じゃないの？ 京都大学での。友達とまでいかなかったも、同じゼミだったとか」

私が考えていることを沙耶が先に口にす。そう、考えられるのは大学の授業だ。小さい教室などでは、いちいち生徒の名前が呼ばれていた。私は他の生徒の名など一人も覚えていないが、一年間定期的に名前を聞いていたならば、記憶に残ってしまっている可能性はある。

「おしいな。同じ大学つてとこまでは当たってる。でもね、僕と彼は在学中、全く同じ授業がなかった。同じ学部だったのに全く被らなかつたんだ。これもまた珍しいかな」

男の言葉に、私は何か違和感を感じていた。

「同じ授業がなかったの。それじゃあ、サークル活動で？」

「俺、サークルにはどこにも入ってへん」

沙耶の質問には、私がこたえてやった。

「何？ それじゃあ、二人にはまるで共通点がないじゃないの。もう、さっぱり分からない」

判りきつたことだった。断言できるが『忘却』などということもない。私はこの男を全く知らない。なぜなら大学生時代、私には友人どころか、知人と呼べるような人物は一人もいなかったからだ。毎日まじめに授業を受け、ノートを取り、帰る。四年間、日々同じことをただ繰り返した。おかげで単位は、卒業に必要な量の倍は取ってきた。ただ、得られた資格などはない。時間つぶしをしていただけなのだ。それを裏付けるよう、何一つ身についた知識などなかった。

「あなた、ノーマルな方？ そうでなけりゃ……」

片目を細め、沙耶は御渦を睨みつける。私は彼女の質問が意図することが分かった。

御渦も同様に理解したようで、声を出さずに笑う。

「残念。僕にそんな趣味はない。この中井君を、心ときめかせて電柱の影からみつめていたことはないよ」

否定しながらも、御渦は私に流し目をくれる。もちろん私にもそんな趣味はないが、無意識に顔を赤くしてしまった。

沙耶は乱暴に、灰皿でタバコを揉み消した。そして、諦めのため息と一緒に言葉を続ける。

「わかった。あなた、中井君とどこかでぶつかったりしたんでしょ。教室の入り口とか、学食とかでばったりと。そのとき中井君は学生手帳とか自動車免許証を落としてしまう。それを貴方が拾ってあげた。学生手帳には写真と名前が書いてあるでしょ。これでしょ。正解？」

沙耶の投げやりな態度にも、御渦は表情ひとつ変えない。

「そんな、マンガやないんやから。第一……」

「第一……そんな些細なことを憶えているわけがない。だろ？」

御渦は私の言葉を遮るように言った。私が言いたかったことはまさにそのとおり。仮にそんなマンガのような出来事が、一日に二度あったとしても、一月もすればきれいに忘れてしまっているような事柄である。沙耶が茶化したように、一目惚れでもしない限り記憶に残るわけがなかった。しかし、御渦は唐突に手を叩きはじめてこう言った。

「正解。シチュエーションは少し違うが、大まかなこたえとしてはオーケーだ」

音を絞ったジャズが流れる店内に、御渦の拍手は響き渡る。

私は、彼の言葉の意味が理解できない。

「おい、どこが正解やねん。ちゃんと説明せんかい」

「そうだな。今から五年前。正確には千八百四十五日前。空一面、雲ひとつない、とても気持ちのいい日だった。最高気温十九度、湿

度七十パーセント。降水確率一〇パーセント。ちなみに実際雨は降らなかつた。時刻はお昼前、君は合格発表の掲示板の前にいた。お母さんと、家庭教師の先生が一緒だったね。『ようやったな厚司』と君のお母さんは涙声。『がんばったもんな、中井君は』と、黒ぶち眼鏡の痩せ細つた家庭教師は大喜び。君はただ、皿のような目でじつと自分の受験番号をみつめていた」

御渦の口からこぼれる言葉は、私の頭にスコップを差し込み記憶を掘り起こし、当時の情景をまざまざと思い出させる。確かに私は母と、そしてガリガリに痩せていた家庭教師と共に大学入試の発表をみに行つた。ただ、その日付や天候までは覚えていない。それどころか、家庭教師の顔もはつきりとは思ひ出せなかつた。

「僕は君のすぐ隣で、同じく合格発表の掲示板を見ていたんだ。だから、君の顔と名前を知っているんだ。どお？ つまらないこたえだろ」

「おいおい、ちよつと待たんかい。分けわからんて。なんや君は、五年前のそんな些細な光景を、今でもはつきり憶えてると言うんか。そんな嘘、小学生でも騙されんわ。ふざけとらんで、ちゃんと説明してもらおか。なんで俺の名前を知ってるんや」

恐怖により、私の苛立ちは促進されていた。普段出したことのない口調になっている。

「そんな、怒られてもな。今のがこたえなんだつて。あのときを除いて、君をみかけたことはないよ。僕、殆ど学校へは行かなかつたから」

「じゃああなたにか、自分は見たもん全て、聞いたもん全て、何もかも残らず記憶してるつて言うんか？」

「そう、言ってるんだが」

急に、御渦の目は鋭く光る。私にはそう見えた。

時間が止まつたように、しばらく誰も口を開かなかつた。

「……へえ、そう。すごいよね。見たもの全部憶えてられるんだ。じゃあ、毎朝新聞なんか読んでたら大変ね。パンクしちやいそう」

黙りこんでしまった私に代わり、沙耶が口火を切る。半分ほどに減ったビールをぐいと飲み干し、カラカラ笑った。

「なんだい。二人とも信じてくれないのか。なら証拠をみせよう。なあ中井君、この店の入り口にマガジンラックがあるだろ。あそこから何でも良いから、新聞を取ってきてくれ。僕が取りに行くよりフェアだろ？ とつてきたら、どの項でも構わないから、僕に問題を出してごらん。この店に置いてあるものならば、いつも全て読んでいるからね」

御渦は私に命令した。その仕草は、執事に物事を命ずる英国紳士といった具合だ。私は不平を言う間もなく動き出していた。元来、私はそのような役どころが似合う性分なのだろう。高校時代も体格の良いクラスメイトに、パンと牛乳を買いにいかされたことが何度かあった。

「くだらないわ。もういいから帰りましょうよ」

新聞を手にする前に、沙耶が言った。何故かとげのある声であったが、私は笑顔で彼女を制し、全国紙のひとつを掴み取り席に戻る。その間、御渦に紙面を読まれないように、背中に隠した。

沙耶はやけに私の手の新聞を気にしたが、一瞥すると新しいタバコに火を点け、面倒くさそうに煙を吐いた。

私は、紙面が一切御渦にみえないよう慎重に新聞をめくった。

「よし、じゃあ今日の読売新聞から、社説の最後の一行をこたえてもらおうか」

「うーん。こたえづらいな。『タイできない。』だ。文章としては『若者の活躍には期待できない。』となってるんだけど、期待の期のところで改行されているから、『タイできない。』がこたえになるだろうね」

御渦のこたえのどおりに、記事の文章は改行されていた。改行の他にも、一字一句違うことなく正解している。

熟考した様子は全くなかった。ポケットから小銭を取り出すような、そんな当たり前の顔を御渦はしている。私は脇の下に冷たい汗

が流れるのを感じたが、表情は未だ平生を装っていられた。

「なら次や。今度は六面の広告から、健康食品の写真が下半分を占めている。小瓶が横になり、中から錠剤がこぼれて転がっている。その数を言うてみ」

御渦は腕組みし、今回は熟考しているように見えた。うーん、と一度唸る。

「微妙だなあ」

と、頭を掻いた。

「錠剤は七つ瓶の外に転がってるんだけど、一つ、瓶の口から半分だけ覗いているんだよな。これをカウントしたら、全部で八つかな」

私は、御渦に写真を全くみせていない。無論テーブルの上に新聞が乗せてあるわけではない。透けてみえている心配もない。私は問題となる部分を裏側から、掌ですつと押さえていたのだから。それにもかかわらず、彼は私と一緒にその広告写真をみながらこたえているようだった。確かに転がっている錠剤は七つ。そして、瓶の入り口に一つ隠れている。これは、私自身も言われるまで気づかなかったことだった。

私の表情は、さぞ青ざめていたことだろう。

「どうだい。信じてくれたかい？ 中井君」

大袈裟に、御渦は額にかかった前髪を掻き揚げた。

「凄いのね。本当になんでも憶えられるんだ」

信じられない、と沙耶は空になったグラスを眺めて言った。驚きの表情を隠せない私とは正反対に、彼女は退屈しているようだった。「いや、正確には『なんでも呼び出せる』かな。人は誰でも、見聞きしたものを記憶するのだよ。それは死ぬまで消えることはない。忘れるなんてことはないんだよ。忘れるという現象は、単に記憶を呼び起こせなくなっているだけさ。より専門的な話をする、記憶というシステムは三段階で機能しているものなんだ。新しい情報を見聞きして、それを認識することを『記録』、それを長時間、これにも色々段階があるんだけど、保存し続けることを『保持』といわ

れる。そして保持したものを意思上に再び呼び起こすことを『追想』または『想起』という。忘却という現象は、この『追想』が正しく行われなかった場合を指すんだ」

記録、保持、追想。これらの単語は大学の一般教養で耳にしたような気がする。確か、心理学概論ではなかったらうか。

御渦は更に続ける。

「記憶が『保持』される期間は、瞬間記憶、短期記憶、長期記憶に区分される。瞬間を短期、短期記憶を中期とも呼ぶ場合があるけどね。瞬間記憶は文字通り一瞬だけの記憶、電話帳を見てダイヤルするまでの数字や、レストランでメニューを見てから注文するまでの間だけ使われる。次に短期記憶、試験前の一夜漬け勉強なんてやつがこの部類だね。そして長期記憶、いわゆる思い出や知識というやつだ」

また聞いたことのある単語が並んだ。

そのとき、沙耶が大きな欠伸をした。それから、つまらなそうに彼女は語りだす。

「変ね。私が聞いた話では、記憶のメカニズムってのは研究が進んで、記憶の期間に応じて脳のどの部分が働いているかってことも分かっているそうよ。瞬間記憶では、頭頂葉から側頭葉までの間。短期記憶は側頭葉から帯状回・海馬を情報が回る。回っている間が記憶される。長期記憶は、最終的に前頭葉に蓄積されるものだってそうじゃなかった？」

正直、私は沙耶の話が殆ど理解できていなかった。

「あの……」

私の理解の遅さを察して、沙耶はすばやく解説を加えてくれた。「つまり、記憶が留まっている時間というものは、脳の中での役割機能の違いなわけ。というよりも、頭の中をぐるぐる回って、長い間記憶される入れ物に入るの。その入れ物に入れない、どうでもいい情報は消去されちゃうの。だから、貴方のお友達の話は全部でたためだつてこと。瞬間記憶を全部記憶しているなんて不可能だわ。」

生涯にかける電話番号は何桁になると思う？ この人はそれを全部憶えてるなんて言っているのよ」

沙耶は昔から頭の良い女性だったと思う。試験の成績は平凡なものであったかもしれないが、友人や教師との接し方で、彼女が愚かな行動をとったことはない。しかし、彼女がこのような知識を有しているとは意外だった。

「それくらい憶えてるよ。小学校四年のころ仲が良かった島田君の電話番号は五四七三の……」

この御渦のこたえには、さすがに沙耶も驚きの表情を浮かべる。しかし、顔の筋肉はすぐに脱力してしまった。島田君の電話番号を確認する術は我々にはない。彼がその電話番号を正確に憶えていようがいまいが、そのこたえを口に行っている男に呆れたのだ。

「あなた何なの？ 何を企んでいるわけ？ 新聞紙を一日分、隅から隅まで憶えるなんてことまでして、中井君から何を得ようとしてるの？」

刺すような沙耶の声だった。私に対して言われているわけではないのに、心を裂かれるような痛みを感じてしまう。

しかし、御渦は何もプレッシャーを感じなかったようだ。その証拠に、彼はこんなことを言った。

「そんなに怒るなよ浅野さん。アサノ サヤさん」
時間が停止した。

沙耶のことを、私は彼に紹介しただろうか。

私は、沙耶と目を見合わせた。お互い、この数分間の記憶を辿っている。

言っていない。

私が彼女を呼ぶこともしていない。例え無意識に彼女に呼びかけていたとしても、私は必ず「浅野さん」とだけ言っていたはずだ。彼女と知り合ってから、名前で呼んだことなどない。心のうちでは何度も呼びかけていたのだが、実際に口に出したことはない。断じてない。

御渦が彼女の名前まで知っていることは、明らかに不自然だった。無論彼女は、有名人でもなんでもないはずだ。

「何？ 何なのあなた。気持ち悪い……」

吐き捨てるような沙耶の言葉だった。鼻の横にある筋肉が片方だけ痙攣していた。それは私が始めて見る、彼女の醜い顔だった。

「ああ、そうか。私のことも、いつかどこかで聞いたのね。きつととても些細なことで。それをあなたは憶えているのね。分かった分かった。あなたの記憶力自慢はもういいわ。その特技でいつかテレビにでも出たらいいわ。それじゃあ、私達は失礼します」

沙耶は伝票を御渦に投げつけると、勢いよく席を立つ。そして彼女は、私を引きずるようにして店を出た。

料金を持つと言ったのは御渦だった。沙耶の回答を正解としたのも御渦である。伝票を彼に預けたことに不正はないはずだった。それでも私は気にかかり、店を後にする瞬間まで、御渦の様子をみつめていた。

青年は笑っていた。

微笑でもなく、哄笑でもなく、薄笑いでもなく、苦笑いでもない。口は確かに笑いの表情なのだが、目だけは何故か、悲しそうであった。

昨夜は、互いに殆ど口をきくことなく、早めに寝ることとなった。沙耶は終始不機嫌であり、身体を触らせない雰囲気を漂わせていたため、私は初日のように床で寝た。

やはり、あのようなおかしな男と関わったのが間違いだっただ。それでも朝になると、沙耶の様子はいつもどおりに戻っていた。まだ彼女と時間をともにして三日しか経っていないため、本当の浅野沙耶を私は知らないのかもしれないが、仕事に出かける私を笑顔で送り出してくれた。

月曜日であるが、会社を休もうかと思った。沙耶との貴重な時間を、下らない取引先に奪われるかと思うと、休暇届けではなく辞表を出してもいいとさえ考えた。しかし沙耶は、そんな私の甘えた考えを正してくれた。

「ちゃんと待ってますから、しっかりと働いてらっしゃい」

私は沙耶の笑顔を見ただけで、まだ夢を見ているような感覚に囚われる。

何度も何度も、会社から帰るまでこの部屋から去ることがないように彼女に懇願してから、私は地下鉄に駆け込んだ。いつもは始業時間の三十分前には会社に着いている私であったが、その日は遅刻ギリギリだった。

一日中沙耶のことが気にかかり、仕事には全く集中できなかった。何度も自宅に電話をかけたい衝動にかられたが、誰も電話に出ないかもしれないという恐怖のせいではなかった。

幸い事務処理に追われた日であり、取引先に迷惑をかけることはなかったが、残業する羽目にはなった。

結局、オフィスを出たのは二十時半を回っていた。駆け込むように地下鉄に飛び乗る。

会社から私のワンルームマンションまで僅か四駅の距離であるが、とても長く感じる。一秒でも早く家に帰るため、私は右側の扉に張り付くように立っていた。緑橋駅で開く側だ。

電車が到着すると誰よりも早く飛び出し、風のように改札を抜ける。

異変はそのときから感じていた。誰かが私を見ている気がする。

この駅は、日に無数の人が行き来するにも関わらず、見知らぬ顔が妙に気にかかった。

暗い階段を駆け上がり、中央大通りに面した歩道に出た瞬間、私の顔に赤色灯が当たった。

普段は何気なく、私の横を通り過ぎていくだけの存在であると思っていた赤い光だ。

その光は、私の住むワンルームマンションの前から発せられている。大阪府警とペイントされた、白黒の車が二台停まっていた。遠巻きに、訝しげな瞳を向ける人々が集まっている。

何が起きているのか、私には理解できない。

何者か如何わしい、法に反する不届き者がこの建物にいたのだろうか。

そのときようやく、私は沙耶の安否を気遣った。その不届き者に、沙耶が危害を受けていないだろうか。怪我でもしていないだろうか。悪いことばかりが頭に浮かぶ。私は自然に走り出していた。

野次馬の群れを泳ぐようにかき分けて、私は進む。しかし、ようやくマンションの入り口にたどり着こうとしたその瞬間、私の腕を何者かが乱暴に掴んだ。とても強い力だった。私の体はいとも簡単にその何者かによって人目のつかぬ路地裏へと運ばれた。

私はヒステリックに、その腕を振り解く。「なんや！」と、とりあえず叫んでいた。私にこれほど大きな声が出せるのかと、自分で驚いてしまったくらいだった。

「落ち着いて、僕の話を聞くんだ」

黒く深い瞳が私の目の前にあった。その肌のきめ細かさ、額に

かかる長い髪から、はじめは女かと疑った。しかし、その人物は私よりも一〇センチ以上背が高い。それが男だと気づくのには数秒を要してしまった。吸い込まれそうな美しさと、宇宙の深遠を想像するに似た不安を与える黒い瞳が、私を凝視している。乱れた漆黒の長髪を整えることなく、男は私の肩を掴んでいた。

それは、昨日喫茶店で出会った御渦という男だった。

「なんやねん自分は！」

「一つだけこたえるんだ中井君。君は、あの女が何者か知っているのか？」

昨日の御渦と同一人物か疑わしいほど、彼の表情は険しく暗い。

声のトーンも低いものだった。

「あの女って、浅野さんのことか？ 浅野さんのことなら知ってるわ。何もかも知っている。彼女は、彼女はなあ……」

言葉は続かなかった。私は、浅野沙耶のことを知っているのだろうか。彼女の生年月日、血液型、身長、声、性格、困ったときに唇を触る癖、細い指、右目下の黒子、茶色の瞳、好きな色は緑、嫌いな色は紫。後は、後は。

私は彼女について、色々な情報を持っている。しかし、それでも私は彼女を知っているのだろうか。改めて問われると、言葉が出なかった。

「なんで急にそんなこと、赤の他人のあんたにいわなあかんの」

「どうやら君は何も知らないようだね」

抑揚のない御渦の言葉に再度反発を覚えたが、結局私は何も言い返せなかった。

「中井君、君はとても微妙な立場にある。余計なことを喋ったら、君も共犯にされてしまいかねない。終始、知らぬ存ぜぬをおすことだ。実際に知らないならね。本当は知っているなら、隠すことは愚かだ。真実には忠実になるべきだ」

目の前の男が、いったい何を喋っているのか、私には理解できない。

不可解の連続に憤り、私は御渦を睨みつけた。御渦は動じることなく、真正面から私の視線を受け止める。その涼しげな眼には、私に対しての哀れみが浮かんでいた。

「御渦君。彼がゆうてた人かい？」

いつの間に現れたのか、御渦の後ろに立つ男がいる。

山のような男だった。長身である御渦と並んでも遜色ない身長に加え、横幅が常人の四倍はある。一応スーツを着て、ネクタイも締めているのだが、丸いボールが着飾っているようにしかみえなかった。

「山根います。よろしゅう」

黒革の手帳を開き、自分の顔写真を示して男は名乗る。温和に見える外見と似つかわしくない、太く濁った声だった。

警察手帳など見るのは、それがはじめでだ。

「あんた、中井さんやね。中井厚司さん。生駒電工にお勤めやね」

警察が私のことを知っている。それだけで嫌な気分させられた。「そない心配せんでも、会社に連絡したりしませんで。まあ、あなたの心がけ次第ですけどな」

山根と名乗った刑事の口調は柔らかなものであったが、明らかに私を脅していた。

「浅野沙耶さんについてお尋ねしたいんやけど、あんた彼女のことよう知ってはるな？」

沙耶の名前を山根が口に出した瞬間、私の脳は三度沸騰する。

「浅野さんに何かあったんか？ 彼女は無事なんか？」

私は、叫ぶように問いかけた。

掴みかかる私の体は、いとも簡単に御渦により押し留められる。

「何を勘違いしてるのか知らんが、事件を起こしたのが浅野沙耶ですわ。ですんで、彼女が無事なのは当たり前ですわ」

再び、私の頭は言語を理解できなくなっていた。

「事件？」

誰が見ても、私は間抜けな顔をしていただろう。目を見開き、才

ウムのように相手の繰り返すことしかできなかった。

「そう、事件です。それも最悪の、殺人事件。浅野沙耶、彼女はその被疑者なんですわ」

「殺人……事件？ 被疑者？」

テレビや新聞でしか見ることでできない言葉が、今突然目の前に現れた。その言葉は知っている。しかし、私の頭はその意味を思い出せずにいた。

「山根さん。このとおり、彼は無関係ですよ。事件の存在すら知らないんだ。あの女に利用されていただけです」

御渦は静かな目をしていた。動かない瞳は私を捉え離れない。その真摯な視線が物語っている。今の話は事実なのだと。

「そう、みたいやな。あんたも、とんでもない同級生を持ってしもたな。ま、とりあえず、署の方までご同行願いますかな。一応、しきたりみたいなもんですわ。そない緊張せんでもようおまつせ」

山根は、私の腕を力強く掴んだ。警察の車に押し込むつもりなのだろう。任意同行というやつだ。

「浅野さんは、どこに？」

「すぐに降りてきますよ。なにせ女ですからな。逃げ場は完全に遮断しとるから、準備だけはさせてやっただんです。それから、部屋の中、少し調べさせてもらいます」

私の住むワンルームマンションの、薄汚れた入り口をみつめて山根がこたえた。読み取れぬ大きな朱印と、何か短い文が書かれた一枚の紙をみせられたが、それが捜査令状であることは後で分かったことだ。

その直後、扇状に取り囲む野次馬の群れが一斉に声を上げる。芸能人でも現れたかのような盛り上がりだ。

暗いマンションの入り口から、白い顔が浮かび上がった。沙耶が、左右を婦人警官に支えられるような姿で現れた。

沙耶の瞳は濡れていた。

道路に歩み出た途端、方々からフラッシュが焚かれる。それまで

は気づかなかつたが、マスコミ関係者も大勢やってきていた。不思議と、誰も私には関心を寄せていない。

「あなたの社会的な身の安全は保障します。せやさかい、ちゃんと捜査に協力していただきまっせ」

黄色い歯をみせて、山根は笑っている。それを無視して、私は沙耶をみつめていた。

私は何をしたらよいのだろう。何を考えたらよいのだろう。何を言ったらよいのだろう。

沙耶は、どうすれば笑ってくれるのか。

彼女を救うのではなく、どのようにすれば笑ってくれるのか。そればかり私は考えていた。

私の目の前を彼女が通る瞬間、私は声をかけねばと息を吸う。しかし、実際には声は出せなかった。横に立つ御渦が、私の肩に手を置き、私の発言を制したのだった。

沙耶は濡れた瞳で、私の目をまっすぐにみつめていた。

そして、ゆっくりと二度、彼女は首を横に振る。一滴の涙が右目から零れ落ち、彼女の頬で弾かれた。

私はその瞬間確信した。

これは何かの間違いであると。

いったい何が起きたのか、私にはさっぱり分かっていない。しかし、沙耶が左右を警官に挟まれ連行されるということは、全く間違っている。誰かと間違えられているのか。ともかく、この光景は間違っている。彼女の手首には、呪わしい銀色の手錠がかけられていた。そんなものが似合うはずがない。

婦人警官に促されるまま、沙耶は素直に車に乗った。

群れるカメラマンを追い払うための警笛を鳴らし、パトカーは素早くその場を去って行く。半身を捻り、パトカーの中から沙耶が私を見ていた。

それは気のせいだったのかもしれない。しかし、私の目にははっきりと見えた。救いを求める沙耶の顔を。不条理からの救いを求め

る声を聞いた。

「通報したのは僕だよ」

弾かれたように、私は声の主を求めて振り向く。そこには、沙耶を乗せて去って行く車を遠い目で見送る御渦宗茂がいた。

「君は知らなかったようだが、彼女は先日起きた殺人事件の被疑者として、指名手配されているんだよ。詳しくはこの後の取り調べで聞くことができるだろう」

山根が小さく手を挙げる。宜しくという意味だろうか。

「一目見て、彼女が指名手配犯だということはすぐに分かったからね、君たちが店を出てから、知り合いの刑事、この山根さんに連絡したんだ」

この男が、何故沙耶の名前を知っていたのか、これで判明した。そして、この不条理な光景を生み出した原因も。

そこからは、あまり良く憶えていない。

私の頭は真っ白になっていた。自分の体は、もう制御することができなかった。

御渦に殴りかかっている自分があった。

しかし、拳の先に御渦はなく、逆に腕を取られ倒される。

地球がひっくり返ったかと思った次の瞬間、私はアスファルトの臭いを嗅いでいた。

腕を背中で締め上げられ、骨を削るような鈍い痛みが肘から肩にかけて走る。

「頭を冷やせ。君はつまらない小石につまずいただけだ。さっさと忘れるんだ。忘れるんだ」

頭に血が上り過ぎ、私は暫し意識を失ったようだ。朦朧とする意識の中で、御渦の声だけが響いていた。

「忘れるんだ。忘れるんだ……。君は忘れることができるんだから忘れられるわけがない。御渦は、どのくらいの時間私が彼女のことを想い続けているか知っているのだろうか。忘れられるわけがない。」

大げさでもなんでもなく、彼女が私の半生の全てであり、生きがいであったのだ。

私の半生を捧げた女性が、犯罪者のはずがない。

それは、あつてはならない事である。

山根刑事に抱きかかえられるような格好で、私はどこかの警察署に連れて行かれた。名目上は任意同行であるが、扱いは容疑者と同じだった。

焦点が定まらぬまま取調室に投げ込まれ、軋むパイプ椅子に座らされる。

「いやいや、ご苦労さまでんな中井はん。この度は、不幸というか、不運というか、ほんま……」

椅子が壊れるような音を立てて、私の正面に山根は座り込んだ。

「さつさとお話聞かせてもろた方がよろしいな」

私の不機嫌な表情を見て取り、山根はようやくやくファイルを広げた。ここはどこだろう。私は何をしているのだろう。

一瞬の混乱の後、大切な質問を思い出した。

「沙耶は、浅野さんはどこですか？」

山根の目つきが鋭く変わった。咄嗟のことで、心の中の叫びが口から出てしまっていた。

「沙耶、沙耶ね。呼び捨てにできる間なんですなあ」

ボールペンを走らせることはなかったが、刑事の頭の中にメモは刻まれただろう。

「浅野沙耶はね、今、別の警察署に送られている最中ですね。事件が起きたのが、京都やったからね」

事件という言葉に、私は過敏な反応を示したようだ。体が痙攣したように動いてしまった。

「あんた、中井さん、あんたは、事件のこと何も知らないようだが、ほんまかね。私はね、あの御渦という青年を信頼してはいるんだが、一応確認しとかなとね……」

舐めるような視線で私をみつめ、山根は言葉を続ける。

「ほな、唐突ですけど、先週の木曜日、四日前ですな、この日、あんなところで何をしてはりましたか？」

刑事の顔はファイルに落としているが、鋭い目だけは真つすぐに私を向いていた。

四日前。四月十日木曜日。私は何をしていたのだろうか。正直、殆ど思い出せなかった。

私はその間、死んでいたも同然だった。なにしろ私は、ほんの三日前に生き返ったのだから。沙耶と再会したことにより、息を吹き返したのだ。

「……仕事を、していました」「
「でしような」

反応の速さから、既にその日の私の行動は確認済みのようだった。会社の上司か同僚、取引先にも連絡がいつているのかもしれない。仮にそのとおりならば、そんな質問に意味があるのだろうか。私は己の心が冷え固まっていくのを感じていた。

「いやいや、そう構えんでよろしゅうおまつせ。私ら、あんさんを疑ってるわけではないんです。何事もしきたりといいますが、順番といえますかなあ。ともかく、気長にやりまひよ」

そう言つと、山根は緩慢な動作でタバコを取り出した。思い出したかのように私に了解を得ようと小さく手を挙げたが、私の返事を待つ前に火は点いていた。

刑事は上手そうに紫煙を吐き出した後タバコの箱をこちら側へ差し出してきたが、私はそれを黙殺する。弛んだ頬を震わせて、山根は呆れたような、怒つたような、どちらともいえる顔をみせた。

「中井さん、あなたは翌金曜日もいつもどおり出社し、普段と変わらない仕事をこなしている。木曜の晩から金曜の朝にかけて、どこぞへと出かけたことはありませんか」

「ありません。家で寝ていました。帰りも遅かったので……」

その日は確か、残業のせいでオフィスを辞めたのが十一時をまわっていた。

期待通りの回答なのか、山根は小刻みに頷いていた。

「話を進めまひよか。あんさんは、十一日金曜日の夕方に、浅野沙耶と再会した。高校を卒業して以来、五年ぶりの再会だった。そうですね？」

私は小さく頷く。

「もう一度確認します。高校卒業以来、浅野沙耶とは、一度も会っていませんか？」

「会ってません」

「彼女の、この二日間の様子はいかがでしたか？」

「様子つて、別に、普通ですよ」

「五年も会っていないのに、彼女の普通が分かるんですね」

「以前のままの彼女だった、という意味です」

狭い取調室に、自分の声が響く。自然に、私の声は大きくなっていった。

「怒りつぽかったり、急に泣き出したりと、情緒が不安定ではなかったか。何かに脅えたりしていませんか？」

私はただ首を横に振った。私の不用意な言動が、沙耶の不利益に繋がるかもしれない。そう考えると、もう何も口にする気にならなかった。

しばしの間、部屋の中を沈黙が支配する。静けさを消し去るため、山根刑事は大きなため息とともに紫煙を吐き出した。

「実際あんた、何が起きていているのか、全然理解してないんところがいます？」

視線を上げて山根と目を合わせたことが、肯定したと理解された。山根はニヤリと頬をたらせて笑い、念入りにタバコを揉み消す。

「この二日間、新聞とかテレビとか、ニュースを見てないんところがいますか？」

その瞬間まで気づかなかったが、確かに私は先の週末、一度もニュースをみなかった。普段の休日ならば時間潰しのためだけに、昼のワイドショーまで見ているというのに。情報といえば、昨日の夕

刻、御渦と出会い、彼の記憶力を試すために新聞を捲った、ただそれだけだった。

それは偶然なのだろうか。それとも、意図的にみなく、いや、隠されていたのか。思い当たる節はあった。

「凶星でっしやる」

再び、山根が黄色い歯をみせた。

黙って首を縦に振った、沙耶の姿を思い出す。彼女の無実を確信していたはずなのに、私の心は揺れはじめていた。

「あんた、浅野沙耶と、計三回の夜を過ごしてはるな。あんたも若いし、あの女もなかなかみないベツピンさんや。何もなかったわけはないやろ」

突き破るほどの勢いで、私は山根を睨み付けた。

そんな私の視線にも動じず、山根は新しいタバコに手を伸ばす。

その太い指は正確にタバコを一本つまみ出し、百円ライターで火を点けているが、刑事は粘着性の視線を私から外すことはなかった。

「知りませんやろ。あの女、婚約者がおるんでっせ」

すぐには理解できない刑事の言葉だった。

コンヤクシャとは、どうゆう意味だったろう。

「いや、正確には、婚約者がいた、ですかなあ」

背筋を、冷たい汗が流れる。

殺人事件、容疑者は沙耶、今はいない婚約者、これらの単語を結びつける意味はなんだ。

「あの女がね、殺してしもうたんですわ」

世界が揺れる。私の視野は狭まり、刑事の顔が映りの悪いテレビのようにゆがむ。

椅子に座っていられないほど、目が回った。

「聞いてらっしやいまっか？ もう一度言いまっせ。浅野沙耶は、婚約者を殺害して逃走していたのです」

嘘や、と私の口は動いたが、声は出ていなかった。

「あんた、ほんまに知らんようなんで、詳しく教えて差し上げまし

よ。

四月十日木曜日。あんたが浅野沙耶と再会する前の日ですな。その日、浅野沙耶は篠沢誠一の家を夕方五時頃に訪れています。篠沢誠一ゆう男が、今回の事件の被害者であり、浅野沙耶の婚約者ですわ。歳は二十九。京都市内のコンピュータ会社に勤務し、システムエンジニアをやっております。まだ詳しいことは捜査中ではありますが、沙耶と篠沢は、どうやらインターネット上で知り合ったようです。なんです？ 私にはよう分からんですが、チャットだから掲示板か。ともかく、二人が付き合いだしたのが、凡そ半年前。篠沢が沙耶にプロポーズしたのは十月のはじめだということ、かなり早い展開ですな。結婚式場の予約まではしていないが、これまでに二人で京都市内の式場を三件訪れて話を聞いている。担当した者の中では、来年の春、つまりちようど一年後に式を挙げたいという希望だったそうですわ。まあ、人からみれば、非の打ちどころがない、幸せなカップルに見えたそうです」

刑事は手帳を捲りながらも私の顔を盗み見るように、チラチラと視線を向けてくる。

既に、私は自分の意思で表情を保つことができている。顔面の筋肉は弛緩していた。目にも涙が溜まっている。

「大丈夫ですか中井はん。話を続けます？ それとも、ここで止めますか？」

私は首を左右に振った。とても緩慢な動作であったが、刑事は私の意図を理解し、話を続けてくれた。知りたくはないが、知らないままでは気が狂いそうだ。

「事件当日の話に戻りましょう。浅野沙耶は篠沢誠一の家を訪れたこのとき、彼女は一人ではありません。沙耶の兄、浅野邦夫が車を運転し、沙耶と共に篠沢宅へとやってきたのです。この兄、邦夫のことはご存知ですか？ 沙耶とは七つ歳の離れた兄です」

会ったことは無いが、沙耶に兄がいることは、私の記憶にも残っている。また、先日沙耶が言っていた、『兄と喧嘩して家出した』

という言葉が甦った。

「家族ぐるみの付き合いにまでなっていたのかというと、その辺りが複雑なのですな。篠沢誠一は母と二人暮らしでして、どうやらその母親が、浅野沙耶にあまり良い印象を持っていなかったようです。母一人子一人の生活が長かったせいも、他の女に大事な息子を奪われるという感じでもあったんでしような。まあ実際、命まで奪われてしまったのですがね……」

刑事は自分の言葉により、苦しそうに笑った。どこが可笑しいのか私には分からなかったが、不謹慎であることを恥て、山根はわざとらしい咳を一つした。そして、何もなかったの如く話を続ける。

「母親が、息子の彼女なり嫁なりを嫌うという話は、世の中に星の数ほどありますな。ただ、篠沢誠一の母は、息子の婚約者は嫌っても、その婚約者の兄にはとても好意的だったのですわ。これは珍しい話に分類できます。その理由は、兄浅野邦夫の職業に由来していたようです。医者だったんですわ、邦夫は。篠沢のお袋さんは、権威というやつに弱い人だったようです。医者という肩書きだけで、もう心を許していた節がある。

母親との間があまり上手くいっていなかった沙耶は、篠沢家を訪れるときには決まって、気に入られている兄を連れて行っていたのです。

その兄と、その日も共に訪れたわけですね。しかし、当日は敵対する母親がいなかった。お役御免の兄邦夫は、早々に篠沢家を辞している。供述によるとその時間は十七時三十分前後。それから翌朝、母親が帰宅するまで、沙耶は婚約者篠沢誠一と二人きりで過ごしている。犯行はこの間に行われました。比較的住宅の密集している地帯でしてな、夜に誰かが訪れたならば、車の音などですぐに分かっってしまうそうです。付近の住民の話では、その日は兄邦夫が帰宅する以外、車の往来はなかったようですわ。

鑑識の見解としては、死亡推定時刻は十日の二十三時三十分から日付が変わる二十四時。

直接の死因は頸部圧迫による窒息死。その直前に、後頭部に鈍器の一撃も受けている。鈍器で頭をどつかれて朦朧としたところを、首を絞められとどめをさされたゆうことです。

翌朝七時十五分、誠一の母が男と共に帰宅しました。男というのは、母親、篠沢伸子いますねんけどな、この伸子の恋人やそうです。伸子は誠一を一九で生んでますさかい、今は四十八歳。独身ですし、恋の一つをしてもおかしくはありまへん。ちなみに伸子はスナックを経営してまして、この恋人はその常連なんですな。

二人が家に帰る。しかし、屋内はとても静かだったといいます。毎朝六時には起きて近所の公園までジョギングすることを日課としている息子が、その時間に起きていないというのは稀だったとのこと、母伸子は二階にある息子の部屋を覗きにいった。このとき伸子は玄関に置いてあったスニーカーを見えています。そのスニーカーが、気に入らない女のものであることを伸子は知っていた。そんな朝早くからやってくるわけはなし、自分がいないことをこれ幸いと、一晩泊まったのだと思うと、伸子は無性に腹が立った、と言っております」

スニーカーという単語が、私の記憶を鮮やかに甦らせる。沙耶と再会したとき、彼女はやはりスニーカーを履いていた。この現実離れした話が、はじめて実感できた瞬間であった。

「階段を踏み鳴らして、伸子は息子の部屋の前に立つ。そして、叩き壊すかの勢いで、戸を叩きはじめた。しかし、部屋の中からは全く反応がなかったんです。靴があるのに外出しているわけがない。戸は内側から鍵のかかる仕組みになってまして、このとき戸は施錠されていました。伸子は自分が無視されたと考え、さらに数十回、戸を叩きます。しかし、やはり反応がない。怒り猛っていた伸子も、これはおかしいと考えはじめる。伸子の恋人、名前は伊藤重信ゆう男ですが、これも手を貸して、戸を叩いたり怒鳴ったりしたらしい。それでも応答がないため、仕舞いには伊藤が戸を蹴り破った。

そして、篠沢誠一の絞殺死体と、呆然とその横に座っている浅野

沙耶を発見するのです。

母伸子は泣き叫びながらも警察を呼ぶ。しかし近所の交番から巡査が駆けつけつくるまでの間に、浅野沙耶は逃亡。京都府警は各方面に緊急配備。マスコミも使い、顔写真を公開もした。それが報われて三日後の今日、ようやく逮捕に至ったわけです」

刑事は腕時計をみつっ、短くなったタバコを揉み消した。

「ちよつと待つてください。それだけですか？ 動機は？ 彼女が何故、夫となる人を殺さねばならなかったのですか？ それに、絞殺って言ってますけど、間違いないんですか？ もしかしたら、自殺って可能性もあるんとちがいますか？」

私は興奮し、立ち上がった。勢いで、パイプ椅子が後ろに転がる。

「ちよつと、落ち着いて中井さん。まあ、座りなさい。我々警察も、安易に判断したわけと違います。顔写真を公開するのですから、間違いがあつてはいけません。先ず自殺か他殺か、この線は間違いなく他殺ですわ。こまかい事情は今説明できまへんが、これについては間違いないという報告を受けています。そして、彼女は密室の中に、被害者と一緒にいたわけですから、状況証拠からしても事件の被疑者となるのは当然。加えて沙耶はその後逃亡している。これからの取調べの中で自白が取れなくとも、十分裁判で戦える材料は揃っておりますな。動機なんてものがはっきりしない事件など、無数にあります。そのあたりは、これからの取調べで明らかになるでしょうがね」

山根は席を立ち、私のために戸を空けた。

「今日はお疲れでしょう。また、ご足労願うこともあるかと思えますけど。そのときはよろしゅうたのんます。何か思い出したときはすぐに連絡を下さい。では……」

『帰ってよい』ではなく『帰れ』という意味だろう。私になにも知らないと分かると、興味は薄れたのだ。となれば、無関係な者からの無用な質問にこたえてやる必要もないわけだ。

私は素直に取調室を出る。山根刑事に送りましようかと言われたが、あからさまに面倒くさそうであったため、私は返事もしなかった。建物を出てはじめて、そこが城東警察署であると知る。運転免許の更新で、一度訪れたことがあった。

絶望と混乱に満ちた頭を抱え、私は徒歩で家路につく。

無意識に腕時計を見る。短針は9の字を指していた。

どの路をとおり、私は歩いたのか憶えていない。ただ、まっすぐにあの部屋に帰ることはできなかった。

私は浅野沙耶を愛していた。そして、偶然にも彼女との再会を果たし、一晩だけであったが、愛し合った。少なくとも、私はそう信じている。

しかし、その沙耶には婚約者がいた。

そして、その婚約者は殺害された。

あるうことか、容疑が沙耶に向けられている。

とても理解の及ばない話である。私は文字通り、天国から地獄へと叩き落された気分であった。

だが私は、彼女を信じる。

世界中が彼女を疑っても、私だけは信じてやらねばならないと思う。彼女が連行される瞬間の、あの瞳は信じるに値する。何かの事情が、いや、何かの間違いがあるはずだ。

警察は間違っている。

今はなんの根拠もないが、あのときの沙耶の瞳、あの清らかさ、美しさ、それだけが私の生きる糧である。

そうだ、これが間違ったことならば、私が真実を突き止めてやる。私が、彼女の無実を証明してやる。

そう決意した瞬間であった。

私の肩を乱暴に叩く者がいる。

「意外と早く開放されたもんだね」

振り向くと、そこには今私が最も憎むべき対象がいた。御渦宗茂である。

御渦は肩まで伸びた長い髪を夜風になびかせ、私を見下ろしていた。

彼の方が遥かに長身であるため、仕方のないことかもしれないが、見下されていることに腹が立った。

「その様子じゃあ、僕の忠告通り知らぬ存ぜぬを通したようだね。」

賢明だよ。あんな女のために、人生を投げることはない……」
切れる、という言葉の意味がそのときはじめて分かった。

私は幼児のように不可解な唸り声を発し、御渦に殴りかかったのだ。

夜の十時近いという時間帯が幸いした。大通りから一本外れた小道は、車もめつたに通らない。大阪という街は喧嘩の絶えぬ場所である。怒声が飛び交う程度では、警察に連絡されることもなかった。やたらめつたらに腕を振り回し、私は御渦に向かっていくのだが、それはいつこうに届かない。御渦は軽やかな足取りで後退しながら、私の攻撃をかわしている。そうやって一〇メートルも進んだらどうか。仕舞いに、私は自ら転んだ。

興奮していたせい、受身も取れず顔から地面に落ちる。口の中に鉄の味が広がった。アスファルトの臭いが血のそれと交じり合う。「まったく、何を怒っているんだい。僕は君の救い主だよ。犯人隠避の罪を知らないのかい？」 『刑法第三百三条、罰金以上の刑に当たる罪を犯した者、又は拘禁中に逃走した者を蔵匿し、又は隠避させた者は、二年以下の懲役又は二十万円以下の罰金に処する』 ってやつ

口の中に溜まった血を吐き出した。唾が混じり、糸を引く。その糸が風に揺られ、自分の頬にへばりついた。

途端、咽の奥より込み上げる嗚咽があった。

私には、何の力もない。何の知識もない。何もできない。

私は、生きている価値があるのだろうか。

生き甲斐であった沙耶を、助けることができないのだ。

「みつともない。不甲斐ない。情けない」

吐き捨てるような言葉が、頭上から落とされた。

「君は、何も分かっていないようだ」

私は目に涙をためながらも、御渦を見上げ睨み付けた。

「分かってないやと？ 聞いたわ。浅野さんが何をしたのか。全部聞いたわ」

一筋の涙が頬を伝った。

「浅野さんは殺人犯や。俺に、いったい何ができるんか。何をしてくれるんか。俺には何もできんことが、俺にはよう分かった」

「何故？」

何故だろう。御渦に問われ、私は考える。

ほんの二、三分前まで、彼女の無実を信じると誓った。彼女の無実を証明してやると意気込んでいた。

しかし、実際に私は無力であった。怒り、拳を振り上げても、それを相手にぶつけることができないのだ。そして何より、心のどこかで、沙耶を疑いもしている。また、これほど愛しているにも関わらず、沙耶が別の男と婚約していたという事実は、私にとって裏切りであった。それがどれほど身勝手な考えだと分かっても、どうしても彼女への怒りが込み上げてくる。そして、そんな感情を抱く自分は醜いものであると自覚もしていた。

「何もできないと思っっているのか？」

御渦はしゃがみ込み、地面にへばり付く私に顔を近づける。彼には私の心が読めるようだった。

「僕が協力してやろうじゃないか、中井君」

唐突な、御渦の申し出であった。私の目には驚きではなく、疑いの色が浮かんでいたことだろう。

沙耶を警察に売り、私を蔑み、彼は何を求めているのだろうか。

「……協力？」

「そう、協力だ。君は考えていた。真犯人をみつけてやると。浅野沙耶の無実を証明すると。違うかい」

私はただ御渦を睨んだ。返事をしないことが、肯定を意味していた。御渦はニツコリと微笑む。

「何が目的やねん」

「そんな警戒しなくても大丈夫だよ。僕は、単なる好奇心から、君に協力を申し出ているだけだよ」

好奇心という言葉を聴き、素直に受け取ってよいものか、それと

もふざけているのか、私には判断しかねた。

「僕はね中井君、世の不可思議な現象を暴くことを生業としているんだ。ああ、そう構えなくとも大丈夫。別に君からお金を取るうなどとは考えていない。ちよつと記事を書かせてもらえば良いのさ。」

僕は、フリーライターのようなものだと思ってくれればいい」

「……自分のしたことを分かつて、そんなこと言うてるんか？」

「したこと？ したことつてなんだい？ 警察へ通報したことか？ 勿論分かっているよ。警察に指名手配されている殺人事件の被疑者を偶然みつけたので、知り合いの刑事に報告した。そのどこが悪いんだい？」

反論はできなかった。

「なら何で、その容疑者の無実の証明を手伝うなんて言うんや。矛盾しとるやないか」

「正直、彼女が犯人であることに疑いはないよ。ただ、いくつか納得のいかない現象があるんだね、今回の事件には。僕は、それを調べようと考えている。浅野沙耶が逮捕されて、それでお仕舞、といった単純な事件には思えないんだ」

そう言つて、御渦は右手を差し出してきた。

「それに僕には豊富な人脈があるよ。警察官にも、あの山根さんの他にも、関西では五人親しくしている人がいる。一番階級が上の人で警視正がいる。僕を味方にして損はないよ」

そう、人脈は確かにあるのだろう。山根刑事もこの青年を信用しているというような発言をしていた。

私は無力だが、この男は力を持っている。私の心は決した。

彼が差し出した右手を掴んだ。

それは握手ではなく、倒れた私を引き起こすための右手だった。

強引に立たされた私は、呆然と御渦の顔を見上げて言った。

「何から、はじめればいいんだ？」

歯をみせない笑顔となり、御渦は私の体に付いた埃を払ってくれらる。身長差もあり、まるで保育園児と保父のようだった。

「まずは、君が今回の事件を正確に把握する必要がある。僕が知っていること全てを、説明してあげよう」

「さつき、刑事さんに概ね教えてもらたけど」

「多分、それは全てじゃないだろう。状況、場所、時間、報道されていない情報も、僕は持っている。それらをまとめ、一緒に分析することからはじめよう。情報を把握することによって、何をすればよいのか。何の情報が必要か足りないのかが分かるはずさ」

私の体を叩き終えると、御渦はさっさと歩きはじめた。私は急いでその後が続く。

「僕の部屋へ行こう。ここからなら君のそこより近い」

私はてつきり、どこかの居酒屋かファミリーストランで話をするものと考えていた。この得体の知れぬ男の部屋へ行くことには、やはり抵抗があった。

「殺人事件のあらましを話すのに、人の目が気になる場所は避けるべきだろう」

私が彼の提案を拒否する前の、御渦の先制攻撃だった。私は御渦の話を聞かねばならない。しかし、やはり人が殺された話を、腰を据えてすることができる場所は限られてくる。私の部屋という選択もあったが、御渦を自分の部屋に招く気分にはなれなかった。

結局私は否を言えないまま、黙って御渦の後を追った。

しばらくの間、私たちは黙って歩いた。私の部屋よりも近いという話であったが、ゆうに三十分は歩いただろうか。車が通れないほどの細い道に入っていた。私のマンションと、さほど離れていない地域に当たるはずだが、全く見知らぬ土地にきたような感覚にとらわれる。迷路のように右へ左へ曲がっているうち、私たちは古い二階建てのぼろアパートの前に立っていた。

「到着だ」

それまで無言だった御渦が、久々に口を開いた。ポケットから鍵を取り出しながら言葉を続ける。

「一つ、言ってなかったことがあるんだ。僕は、京大を入学から半

年で退学している。だから、君と授業が被っていないくて当たり前なんだね」

彼が退学していようとなかろうと、私には全く興味のない話だった。大学生活に水が合わず、早々にキャンパスを去る者は少なくない。

「それから、全てを記憶できるなんて言ったけど、あれも嘘さ。そんな芸当ができるわけがない。信じてないとは思っけど、一応訂正しておくよ」

この告白に私は面食らう。何故なら、私は彼の異常能力の存在を殆ど信じていたからだ。『信じてないとは思っけど』などとかからかわれ、私は『当然だ』といった顔で平生を装う。

しかし、この彼の言葉が真実ならば、どのように新聞紙面の隅々までを記憶したのだろうか。

いや、そもそも、私の名をどうやって知り得たのだろうか。

途端、私は恐怖に襲われる。

私は今考えた疑問を口にしたが、御渦は鉄骨むき出しの階段を軽やかな動作で登っていた。カツンカツンという靴の音が夜空に響く。彼の部屋は階段を上ったすぐの所にあるようだ。御渦は鍵を差し込み扉を開け、入り口にあるスイッチを操作する。開け放たれた部屋の中から、煌々と光が漏れた。

「さっさと入れよ」

部屋の前に立ち、御渦は私を招いている。

逆光となった彼の顔は、真っ黒に塗りつぶされていた。表情はうかがえないが、彼は笑っているように思えた。

踵を返し、その場から逃げ出したい衝動にかられた。全速力で走り、家に帰りたくなった。そして、布団を頭まで被り、全てを忘れて眠ってしまった。たかが古いアパートに入るだけの話であるが、その扉をくぐってしまえば、もう後には戻れない。そんな気がした。しかし、私には失うものがもう何もないはずである。

これ以上の不幸はない、これ以上の悲しみはないと自分に言い聞

かせ。私は自らの背中を押した。とおり過ぎる地下鉄を前に、誰も押してくれなかった私の背中、以外と軽いものであると知った。

御渦という男は実は不動産屋であり、遠まわしな方法で私に空き物件を紹介したかっただけなので、と疑いたくなるほど、その部屋には何もなかった。

隅に置かれた小型の冷蔵庫。そして、ソファーベッドが一つ。それ以外はなにもない、六畳ほどの狭い部屋だ。テレビも本棚もなく、壁にはポスターもカレンダーもみあたらない。ただ白い壁が四方を囲っている。

「本当にここに住んでんのか？」

正直な感想を、私は問いとして口にした。

「住んでいるよ。一年以上前からね」

一年も住めば、たとえ身一つではじめた生活であっても、様々な物が増えているはずだ。本や雑誌、食器や雑貨、家具や家電など、普通に生きていく上でいつの間にか増える物が多い。ここが仮に御渦の名前で契約されていたとしても、仮眠場所としてでしか利用されていないことは明白であった。

「生活のにおいが全くせん部屋やな」

私の言葉は聞こえなかったのか、御渦は据付のクローゼットを開き、ジャケットをハンガーにかけている。御渦の脇から覗けたクローゼットの中身は、仮眠場所にしては思いの外充実していた。

「適当に座ってくれよ。座布団なんて気のきいたものはないけどね」
私は先ずベッドを見たが、他人のベッドに座ることに気が進まない。仕方なく、私はフローリングの床に座った。

「何か食うかい？」

私に倣ってか、御渦も同様にフローリングに座っている。

私は夕飯をとっていないことを思い出したが、食欲は全くない。

御渦の問いに対してただ首を横に振った。

「じゃあ、コーヒーは？」

喉は渴いていた。顔色を見ただけでそれを判断し、御渦は薬缶を火にかける。どこから取り出したのか、白いコーヒーカップが二つ、揺れるガスの炎の隣に置かれていた。そうした最低限の食器は用意されているようだ。

「君、気が付いていたか？」

ガスの青い炎を眺めながら、御渦は言った。

「気付くって、何を？」

「君、尾行されてるぜ」

「ビコウ？」

御渦は顔だけを私に向ける。私が彼の言葉を理解できないでいる様子を確認すると、自ら説明を加えた。

「勿論、警察のだよ」

「何で、俺を？」

「さあ。山根さんの指示だろうけど、君にはそれほど期待しているわけじゃないだろうね。期待していないというのは、新しい情報を得られないという意味だよ。気にしなくても良いさ。二、三日の辛抱だ。早ければ明日にも煙のようになくなるから」

御渦はガラス製の灰皿を持って床に戻った。胸のポケットからタバコを出して吹かしはじめる。

御渦の姿を見て、私もネクタイを緩め上着を脱いだ。脱いだ上着は床に放る。御渦にハンガーを借りようとは考えなかった。よく見ると、私のスーツはぼろぼろにくたびれている。一日二度もアスファルトに転がれば、仕方がないのだろう。

くつろいだ格好にはなっているが、私の緊張はほぐれない。警察からここまでの暗い夜道を、私の後ろからドラマに出てくるような二人の刑事が尾行していた様子を思い描いた。二人の刑事はトレンチコートをはおり、頭は角刈りだ。

既に私は、事件の関係者なのだろう。漠然とした恐怖を感じたが、そのような尾行を気にしては、本当に何もできない。始まらな

い。私は頭を振り、思考を切り替える。

そして目の前の人物も、私はすっかりと見極めねばならない。彼の存在は、沙耶を解放できるかできないかを左右している。信頼するに値するののか、私は判断しなければならなかった。

「なあ、御渦さん。事件を分析する言うてたけど、その前に、あんなの名刺か何かみせてくれへんか」

少し目を大きくして、御渦はタバコを吸う動作を止めた。

「あれ？ まだ信用ないの？」

「信用ないというか、念のために、な。俺、君がどんな人間か全く知らんもの」

私は御渦を観察する。ジャケットは既にハンガーにかけられていたが、その下に着ていたシャツは紳士服売り場ではみかけない形をしている。ホストと呼ばれる職業の人たちがよく着ているタイプのものだ。また、スリムで背が高く、足も長い。ファッション雑誌など見たことないが、モデルとして登場していてもおかしくはないような人物だった。どう見ても私のような普通の会社員とは思えない。「名刺なんて気の利いたものは持ち歩いていないけど、これで良いかな」

御渦はズボンのポケットから、くたびれた文庫本を一冊取り出す。「そのの、三八から四八までのページは、僕の記事が掲載されているよ。あまり満足している内容ではないけれど、薄いでしょ、それ。名刺代わりに持ち歩いてるんだ」

手帳のような文庫本を捲り言われた項を開くと、確かにそこに『御渦宗茂』の文字が読めた。タイトルは『蟻の声』。数名の著者が書いた記事を一冊にまとめた本である。その一人として御渦の記事が確かにあった。その内容を斜め読みした結果、自衛隊を退役した後の、数人の人生が扱われているドキュメンタリーであることが分かった。様々な資格を持つことで、職には就くことができるが、世間から向けられる白眼視が耐え難いという内容だ。とび職人、警備員、廃品回収業者として第二の人生を歩んでいる人々の苦悩が書かれていた。

意外なほど硬派なき記事である。裏表紙を見ると、バーコードも印刷されており、名の通った出版社名も記載されていた。私は背表紙などに細工がないかも確認する。

「自分の名前は、ホンマに『御渦』いうん？」

この問いに対し、御渦は財布から運転免許証を取り出し私に示した。そこには、多少顔色が悪いが、確かに眼前の男の写真が貼り付けてあった。

「少しは安心したかい？」

ここで、湯が沸いた合図として薬缶が悲鳴を上げていた。御渦は立ち上がり、コーヒーの準備をはじめ。コーヒーフィルターを取り出したのが見えた。インスタントではないようだ。

隙なく動く御渦を観察するうちに、コーヒーのよい香りが部屋に充満していた。

私は深呼吸し、気持ちを落ち着かせる。どうやら、ナーバスになり過ぎているようだ。

「改めて、協力を頼むよ。御渦さん」

背筋を伸ばし、私は御渦に頭を下げた。

「さん、はよしてくれ。呼び捨てで構わないさ。言い辛いなら、せめて君付けにしてくれ」

御渦はコーヒーマカップを二つ運んできて、それを床に置いた。そして、新しいタバコに手を伸ばす。

「事件の概要は聞いたんだね」

湯気が立つコーヒーマカップを口に運びつつ私は頷いた。

「ならば知っているのだね。浅野沙耶が、いわゆる密室の中で篠沢誠一の死体と共にいたことを。部屋は完全に施錠されていたという客観的に見て、彼女の容疑を覆すことは困難だろうね。彼女が今後の取調べの中で、どのような供述をするのか分からないが、容疑を否認するならば、それ相応の理由が問われることになる」

「その話は聞いた。でも、まずは、浅野さんが確かに、その部屋の中にいたのかを明確にすべきや。聞いた話では、殺された、篠沢さ

んか？ その母親は、浅野さんのことを嫌っていたそうやないか。だとすると、その母親と、母親の恋人が共謀して、浅野さんを容疑者に陥れたとも推測できる。まだまだ、果たして、篠沢っていう人が本当に殺されたのかも、俺ははっきりと説明されていない。不確定要素が多すぎる」

私が喋る間を利用し、御渦はタバコを吸う。そして、煙を吐くと同時に喋った。

「他殺なのか自殺なのか。この辺から片付けようか。篠沢誠一の死因が絞殺による窒息死であることは聞いているか？ その直前に、鈍器による頭部への一撃も受けている。この一撃で意識を朦朧とさせ、とどめに首を絞められたわけだ。鈍器とは、部屋の中にあった貯金箱だそうだよ。五百円玉が一杯に貯まった、人の頭大の貯金箱なんだって。アルミ製の円柱型の貯金箱だ。不憫だと思わないか。篠沢誠一は自分を殺すきっかけをつくるため、長年こつこつと貯金していたのだよ。金額で三十万円ほどにもなるらしい。その中身が盗まれているようなことはなかった。それから指紋の件だけど、室内には被害者篠沢誠一と浅野沙耶の指紋以外は検出されていない。そして、普通は付着するはずのドアの取っ手や机の上、その類の箇所は丹念に拭取られていた形跡があった。貯金箱にも指紋はなし。だが、血糊も付着していたから、これが凶器になったことに間違いはないとみられている。実際に誰が被害者の頭へその凶器を振り下ろしたのはか別にしておこう。殴られた瞬間に血が飛び散った形跡はなく、被害者は倒れた後、じわじわと出血し、カーペットにシミをつくっている。直接の死因となった頸部圧迫は、皮のベルトが使われた。これは、篠沢誠一が普段使用していた、スーツ用の地味な黒いベルトだ。首にくつきりと残されている絞められた跡と、ベルトの形状が一致している。自ら頭を殴り、窒息するまで首を絞めるなんて芸当は不可能だと思わないか？」

急に問われても、私はこたえる準備ができていない。金魚のようにパカパカと口を開け閉めしていただけだった。御渦は構わず話を

進める。

「もう少し細かく話すと、篠沢誠一は頭を入り口に向け、うつ伏せの状態で絶命していた。頭からの出血状態を考えると、殴られ、倒れた場所で首を絞められたというのが検死官の出した結論だった。ベルトは部屋の一番奥に当たると、窓の下に落ちていた。もしも篠沢誠一が、類稀なる強靱な精神の持ち主で、自ら首を絞めて自殺を図ったとしたら、彼は絶命の瞬間にベルトを放り投げたということになる。同室にいた浅野沙耶が首から外し、窓の下に置いた若しくは投げ捨てたというのが妥当だろう。彼女が首を絞めたか否かは置いておくとしても、篠沢誠一が何者かに殺された、というのは疑いよのない事実だ」

時間をかけて、私は御渦の話を理解した。確かに、彼の話全て信じるとしたら、篠沢誠一が何者かに殺されたという事実は疑いよすが無かった。

私が納得したのを認めると、御渦は満足げに話を続ける。

「順番に片付けてゆこう。部屋の中は荒らされた形跡がなく、無くなったものもないことから、物盗りの犯行とは考え難い。必然的に怨恨など、被害者をよく知る者の犯行が推測されることになる。先ず、この事件の関係者それぞれの、死亡推定時刻である四月十日の二十三時三十分から二十四時にかけての所在証明、いわゆるアリバイについて確認しよう。関係者を挙げてゆくと、先ず婚約者である浅野沙耶、そしてその兄浅野邦夫、被害者誠一の母篠沢伸子、伸子の恋人伊藤重信の計四名。これ以外にも勿論被害者には友人知人、親戚が多数存在している。しかし、物盗りではないとしてみた場合、怨恨や保険金目当てが考えられる。そうした深い付き合いとなるとこの四人に絞ることができるとして、この四人の中で確実なアリバイを持っているのは篠沢伸子一人だけだ。伸子がスナックを営んでいるのは知っているかい？ この店の名は『故郷』。全国に一千件はありそうな名前だね。経営時間は夜八時の開店から客のいる間ときには朝まで開けている。その日、つまり四月十日から十一日に

かけても、朝まで客が途絶えることがなかった。従業員は一人いるが、これはいつも午前二時に帰ってしまう。伸子の古い女友達であり、小遣い稼ぎ程度で働いている人だ。ともかく、この従業員が、犯行時間の伸子のアリバイを証明している。二、三分であれば、従業員や客の前から姿を消すこともあったが、基本的にはカウンターの中にいて、馴染みの客と馬鹿話を続けていた。この従業員の他に、三人の馴染み客が証言したそうだった。これら全てが共謀してるとは考え難い。そうそう、店の場所は祇園だ。篠沢家の場所は、京都市の北、岩倉にある。伸子の店から家までは、信号無視で車を飛ばしても十五分はかかる。つまり、母親が何らかの理由でその息子を殺害するというケースは有り得ない。まあ少なくとも、自分の手によることは、不可能だと言える」

そこで一息つくと、御渦は根元まで灰になったタバコを揉み消す。「第一、僕が調べた限りにおいて、この母親伸子に息子を殺さねばならない動機がない。これ以上ないほど溺愛して育てた息子だ。保険金などもかけられてはいなかった」

「でも、その伸子は浅野さんを嫌っていたんやろ。そない溺愛しとったなら、自分の思い通りにならないことで、可愛さ余って憎さ百倍つちゆうやつで、殺意も芽生えたと違うか？」

私としては思い切った発言であった。見たこともない他人であったが、殺人の疑いをかけるには勇気が必要だった。

「まあ、そう焦らず、一つずつ事実を確認してゆこうじゃないか」御渦はぬるくなつたであろうコーヒーにようやく口をつけた。

「篠沢伸子以外に、この殺人が起きた時刻の前後に関わった人物は浅野沙耶、浅野邦夫、そして伊藤重信の三人。では、伊藤重信から片付けよう。彼は現在四十五歳。元プロボクサーで自衛官だった経歴も持つ。スナック『故郷』の常連だ。伸子との関係は三年ほど前から続いているようだ。関係というのは無論、肉体関係だよ。これは常連客の間では公認のようで、二人の間を茶化すことが、一つの日常だったようだね」

既に御渦のコーヒーカップは飲み干されていた。

「話を当日に戻そう。伊藤がスナック『故郷』に現れたのは、十一日の午前一時過ぎ。これはほぼ毎日のことだそうだ。伊藤はいくつかの職を経て、現在は木屋町のラーメン屋で雇われ店長をしている。これが二十四時に閉まる。そこから掃除と明日への仕込み準備を一時間で済ませ、伸子のスナックへ向かうのが彼の日課なんだ。ただ、店は伊藤一人で切り盛りしているため、彼のこの日の行動を証明する人物がいらない。最後の客が帰ったのが閉店の二十四時ぎりぎりだったというが、その客はみつかつていない。一見客だったため、伊藤も顔まで憶えていないそうだ。つまり、犯行時刻の伊藤重信には、全くと言って良いほどアリバイがないのだね。店を二十四時にたたみ、急いで篠沢家まで車で向かい、誠一を殺害し、『故郷』へ到着することは不可能じゃあないな」

「ほなら、その伊藤ちゆう男が犯人違うか？ ほら、伸子との付き合いを息子の誠一に反対されたとかして、殺意を覚えた。筋はとおらへんかな」

「君は安直過ぎる、というより、浅野沙耶以外の人間ならば、誰が犯人であつても良いのだろう。憶測だけで話を進めてしまうと、とんでもない迷路に迷い込むぞ」

御渦は、私のコーヒーカップも空になっていることをみつけ、勝手に二杯目の準備をはじめていた。再び薬缶を火にかけながら、話を続ける。

「君は伊藤を標的にしたが、彼に関しても全く篠沢誠一を殺害する動機がない。篠沢誠一と伊藤は以前から見知った間柄で、仲も良かった。伊藤のラーメン屋にもよく顔を出し、談笑する様が目撃されている。誠一の方から伊藤に対し、早く母と結婚してくれと催促していたくらいだそうだ。伊藤は二度の離婚暦があつて、それが故に新しい妻を娶ることを躊躇していたそうだ」

御渦は最初に大量の湯を沸かしたようだ。改めて火にかけた薬缶はその余熱ですぐに鳴きはじめた。

「その上、伊藤重信は自動車免許を持っていない。勿論、車も持っていない。電車はもう動いていない時間だ。バスもない。伊藤が使うことのできる唯一の手段はタクシーということになる。しかし、タクシーを車で待たせて、人殺しを行うだろうか。僅かな時間で往復するためには、必ずタクシーを待たせる必要がある。篠沢家のある辺りは、京都駅周辺や四条河原町じゃない。深夜にはめったにタクシーなんて捨てる場所ではないんだ。これは大変リスクが高いね。運転手に顔を覚えられる危険も伴う。他に協力者がいない限り、実質伊藤には無理だろうと僕は思うよ。自転車や走って向うという手段も困難だね。その日の京都は午後十時過ぎから、豪雨とも呼べる大雨となっている。瞬間最大風速も二〇メートル程あり、傘を差すのも難しかった。雨は翌日の午前三時ほどまで続いた。そんな悪天候の中、自転車でも徒歩でも、限られた時間内に篠沢家に向うことはほぼ不可能だ。実現できても、相当目立っただろうね」

てきはきとそれぞれ二杯目となるコーヒを注ぎ、御渦が私の前に戻ってきた。

「次は浅野沙耶の兄、浅野邦夫だ。実は、彼についてはそれほど詳細な情報を僕も得ていない。でも、当日の動きは知っているよ。彼は十日の午後五時前後に、自分の車に沙耶を乗せて篠沢家に到着した。何故彼が妹を送ったのかは聞いているかい？」

「ああ、篠沢伸子に気に入られていたんやろ。彼が医者やから、伸子は邦夫さんを信頼してたって、刑事が言ってた」

私が沙耶の兄に『さん』を付けたとき、御渦は僅かに目を大きくしたが、その点に関して特に追求してやることはなかった。

「そう、医者だ。ちなみに病院で担当しているのは神経内科。彼がいると、伸子の機嫌が良かった。だから、浅野沙耶は毎回兄に送り迎えを頼んでいた。邦夫の仕事が忙しく、妹を送ることができないときは、篠沢の家へ沙耶が行くことは殆どなかったというほどだ。兄と妹、それぞれお互いしかいない家族だからこそ、兄は妹に協力してやったのだろうかね」

二杯目のコーヒーを飲むとする私の動きは止まった。兄と妹だけの家族とはどうゆう意味だ。

「なんだ、知らなかったのか。浅野邦夫と沙耶は、二人だけで暮らしているんだよ。父親は三年前に他界し、その後母親は再婚して別の姓を名乗っている。そのときには邦夫も沙耶も成人していて、二人とも姓を変えること、つまり、新しい父親の養子になることを拒んだんだ。それ以来別々に暮らしているというわけさ」

私は、本当に彼女のことを、何も知らなかったのだと悟らされる。確かに彼女は「兄に養ってもらっている」という旨の発言をしていた。あのとき私は混乱気味で、彼女の言葉を深く理解してやる余裕がなかったのか。普通、それだけで両親がいないことは分かるはずだった。

「まあ良い。話を戻そう。浅野邦夫は妹を車に乗せ、夕方五時に篠沢家に到着した。しかし、普段いるはずの母親伸子は既に店の方へ出勤しており留守をしていた。通常は七時を過ぎてから出かけるらしいが、その日は手間のかかる仕込みがあるとかで、早めにかけたのだね。伸子がいないのなら、邦夫の役目はない。コーヒーを一杯飲む間に世間話をしてから、邦夫は自分の車を運転して一人で帰宅した。家に帰った後はテレビを見て、日付が変わる前には寝たそうだ。先も言った通り、邦夫と沙耶は二人暮らした。片方がいなければ当然一人。よって邦夫のアリバイを証明できる人物もいない。翌日の十一日朝、警察から沙耶が逃亡したことを電話で知らされるまで、一歩も家を出てないと主張している」

「なら、その邦夫さんが、夜中に篠沢の家に忍んできて、誠一を殺すことも可能だったんやな」

「もちろん、邦夫が篠沢家に深夜やってこられるという可能性はあるよ。篠沢家は比較的密集した住宅街にあり道も狭い。車を家の前に停めると、他の車が通れないほどに狭いんだ。彼が車を使ったとすると、隣人に気づかれないうようにどこかで車を降りて、徒歩で行かなければならないけどな」

「しかし、なんか希望がみえてきた。沙耶の他にも、十分犯人がいる可能性があるやないか」

私は、さぞ目を輝かせていたことだろう。しかし御渦は、悲しげな視線を向けている。

「君は浅野沙耶以外の人間が犯人であれば、それで良いのだから、そんなに甘くはないよ。そりゃあ、単に犯行時刻に篠沢の家に向かうことのできる人間は、関係者の中に二人いる。伊藤に関しては協力者が必要となるけど、全く不可能ではないね。でも、これは単に家へ行くというだけの話だ」

「犯行時刻に現場に行けるゆうことは、そいつらにも誠一を殺すチャンスがあつたゆうことちがうか？」

「ちがうね」

御渦は強い口調で断言した。

「彼らには無理なのさ。動機やアリバイなんてものは、今回の事件では余り意味をなさない。何故なら、浅野沙耶以外に犯人は有り得ないからだ」

御渦の声には怒気さえ感じた。それほどの断定的な口調である。

「良いかい。彼女は、浅野沙耶は篠沢邦夫の死体と共に、施錠された部屋の中にいたんだよ。犯行時刻から母伸子が息子の死体を発見するまで、実に七時間。彼女は死体と共に、狭い部屋で過ごしたんだ。これは異常だよ」

「それは、シヨックやつたからやないかな。目の前で、恋……婚約者が殺されたんやから、放心状態になったのかもしれない。気を失ったとも考えられる。刑事も言うてた。沙耶は発見されたとき、呆然ととつたつて」

被害者篠沢誠一を恋人、婚約者と呼ぶことに抵抗があつた。その時点から、私にはこの事件を実感として掴みきれないものがあつたのだ。

「よし。なら、彼女が無実であると仮定してみよう。犯行時刻、何者かが篠沢家に侵入してきた。そして、篠沢誠一を絞殺する。同室

若しくは極めて近い場所にいたと思われる沙耶は、その犯人に対して抵抗したかもしれない。又は、トイレか風呂かでその場にいなかったかもしれない。だが、彼女が篠沢誠一の死体と同じ部屋にいた所を発見された以上、恋人が殺された、若しくは死亡したという認識はあつたわけだ。ここが重要だ。彼女は婚約者が死んだことを知っていた。何しろ彼女は部屋に鍵をかけたのだからね。良いかい。

何者かが篠沢を殺害した場合にも、彼女はその死体を一度は見ることなる。死体を見てから、部屋の鍵をかけるんだ。しかし、彼女はそれ以外何もしなかった。浅野沙耶は職歴こそないものの、二十四歳という立派な大人だ。ごく普通に大学も卒業した。目の前で、それが例えとても現実として捉え難い光景であつたとしても、人ひとり死んでいるのを見て、七時間もの間呆けているといのは異常だ。寝てしまふのはより異常だ。普通ならば、救急車を呼んだり、警察を呼んだりするはずさ。少なくとも泣き喚いたりするだろう。でも彼女はそれをしなかった。それどころか、部屋に鍵をかけ、自分と死体を封印しているんだ。翌朝伸子が嵐のように戸を叩いても、無視をした。シヨック状態となつていたとしても限度がある。どう考えても、この点が納得いかないんだな僕は」

一気に話終わると、御渦は深呼吸するようにタバコの煙を吸い込む。そして、大きな紫煙の塊が吐き出された。

確かに、彼女の行動には納得の行かない点が多いように思われる。「しかしそれは、浅野さんが犯人であつた場合でも、話の筋が通らないんとちがうか。もし彼女が本当に犯人なら、なんでわざわざ、密室をつくつて、自分が犯人だと分かつてしまうような状況にしたんや。本当にまともな頭をした人間なら、犯行を隠そうとするんとかやうか？」

「いや、彼女が犯行を隠す意図がなかったと考えた場合、話の筋は通る。彼女は警察が駆けつけるまでに逃亡してしまつているが、この点は土壇場で怖くなつたからだと推測することができるだろう」「それは違う。それだけは、絶対に違う」

私の断言に対して、御渦はまばたきもせず私の顔をみつめた。次に続く言葉を待っているようだったが、私には論理的に説明することができなかつた。ただ、あのときの沙耶の目だけを信じているなど、言えたものではなかつた。

「ま、なんだ。予測してはいたことだが、ここで話をしても、結論がでるわけがないな。どうだい中井君、明日僕は篠沢の家に行こうと考えているんだが、一緒に行かないか？ 君も見ておきたいだろう。犯行現場というやつをさ。ちょうど、葬式も明日行われるんだそうだ。関係者に話を聞くよい機会になるだろう」

齒をみせずに、御渦は笑っていた。

笑って、私を誘っている。

現場へ行く。人殺しがあつた場所へ行く。このことが、まだ現実味を帯びてこない。

しかし、その場に行けば何かが分かるかもしれない。

「ああ、そういえば君はサラリーマンだったね。そう簡単に休みはもらえないか。いいさ、僕一人で行ってくるよ。ちゃんと報告もしてあげよう」

「俺もいく。仕事は、なんとかする」

私のこたえに、御渦は更に唇を左右へ伸ばした。

「ならば、明日の朝八時に、君の家の前で待ち合わせよう。そうそう、ちゃんと喪服を着てくるんだぞ。なければ、黒っぽいスーツでも良いよ」

何でや、という疑問の言葉がとっさに口から出かけたが、私はそれを抑えることができた。そうだ。私は、人が死んだ家に行こうとしているのだった。

そんな当たり前のことが、最初から思いつかなかつた自分の精神が危ぶまれる。

私は壊れかけているのではないだろうか。

御渦は既に何本目か数えられなくなっているタバコを揉み消し、山となっている灰皿に投げた。

それを合図にしたように、御渦はシャツのボタンを外しはじめた。私は男同士であるにも関わらず、そんな御渦を見て気が動転する。

「な、なに急に服脱いどるんや」

「なにつて、もう寝るんだよ。君も、もう帰れ」

そう言うと、御渦は一人でベッドに潜り込んだ。

なんて横柄で身勝手な奴だと考えたが、私たち二人は友達でもなんでもないことを思い出した。私はごちそうさんと呟き、上着を着て部屋を出た。

四月十五日火曜日。沙耶が逮捕されたその翌朝、私は普段どおり七時五十分に家を出た。

会社へ行くためではない。勤め先には朝一で電話を入れておいた。幸い私の会社は有給休暇が取りやすい環境にあり、繁忙期でもない今は上司も快く了承してくれたのだった。

知り合いの葬式に行くと伝えた。全くの嘘ではない。

喪服を着て、昨日御渦と約束した場所である私のマンション入り口に立つ。ダブルの喪服は、二年前に叔父が亡くなったときに新調したものだった。クリーニングに出してからずっと、ビニールで覆われたままの姿で保管してあった喪服は、防虫剤のすえた臭いが染み付いていた。

通勤時間に黒尽くめでたたずむ男は異様なのか、通行人は皆私を見ているように感じる。あるいは、昨日の捕り物が起きた現場だからなのかもしれない。

天気はくもりだが、四月にしては蒸し暑く、脇の下に汗が流れるのを感じた。

御渦は時間通り、八時丁度に現れた。喪服ではない、ただの黒いスーツだった。長い髪は後ろで束ねられている。

「葬式は午前十時からだつて」

開口一番の、彼の挨拶代わりの台詞であった。

「詳しい住所、勿論知ってるんやろな」

「ああ知ってるさ。でもその前にどこかで朝飯を食おう。その真っ白い顔を見る限りは、どうせ何も食べてないんだろ。あまり早く行き過ぎても具合が悪いしな」

私の了解を得る前に、御渦は先に立って歩き出していた。

御渦に先導されて、『カンザス』へ向かった。最も近い喫茶店が

この店であったからなのであるが、私はあまり気が乗らなかつた。なにしろ、沙耶と私の関係を引き裂くきっかけとなつた店なのである。そして、その張本人の背中が、目の前にあつた。

「ああ、一昨日の席しか空いていないな。仕方ないね」

そう言つて、御渦は一昨日と同じ席に座り、私に対しても同じ席を勧めてきた。

口髭のマスターにモーニングセットを二つ注文すると、私は店の入り口近くに設置されているマガジンラックに向かう。比較的込み合う時間帯でありながら、幸いにも朝刊が一部残されていた。私は席に戻ることも忘れ、乱暴に紙面をめくる。

「二十四面だよ。その真ん中くらいさ」

テーブル三つを挟む距離を越えて、御渦が声をかけてくる。一瞬だが、別の席に座る一人の中年男性が怪訝な顔で御渦を睨んでいた。多くの人は、朝は機嫌が悪い。

私はともかく、御渦に言われたとおりの紙面を開く。写真こそなかつたものの、太字のゴシックで、大きな見出しが出ていた。

『京都婚約者殺人事件、容疑者逮捕』

推理小説のタイトルみたいな事件の命名に呆れたが、その内容はまさに私の周りで起きた事件であつた。

記事には、四月十日深夜に婚約者を殺害し、翌日逃亡した沙耶の行動が書かれている。逃亡後三日目の夜に、大阪市内で知人のマンションに潜伏しているところを逮捕、とある。彼女は京都市の下鴨警察署に移送され、現在動機などの取調べ中、として締められている。

三度読み返したが、彼女が連れて行かれた警察署の名を除くと、何一つ新しい情報はなかつた。

記事の中には私の名も、そして御渦の名も出てきていない。

ただ、被害者篠沢誠一（二九）と、浅野沙耶容疑者（二四）の文字だけがあつた。

そのときはじめて、私は見ず知らずの篠沢誠一に対して明確に嫉

妬した。

おかしな話である。彼はその経緯はともかく、何者かに殺された被害者であることに間違いない。そんな男に同情ではなく、私は嫉妬したのである。ただ、同じ記事に沙耶と名を連ねているだけだ。

「約束は守られていたかい？」

無意識のうち、私は席に戻っていたようだ。対面に座る御渦が、片方の唇を伸ばしていた。

「マスター、テレビ点けて」

店内に響き渡る声で、御渦が要求する。口髭のマスターはトーストを切る手を止め、テレビのリモコンを操った。

見慣れぬキャスターが現れ、悲痛な面持ちで では現場からだと語る。

画面は切り替わり、若い、ゆで卵のような顔をした女性レポーターが映し出される。春先にしては薄手と思われる紺のスーツの後ろには、古びたコンクリートむき出しの建物があった。

はい、浅野容疑者が連行されている下鴨警察署前にきています。

昨日の夜に大阪市内で逮捕された浅野容疑者ですが、今朝から取り調べが開始されるようです。現在のところ殺害の動機など、新しい情報は入ってきておりません

演出なのか、それとも機械的トラブルのためか、そこでようやく写真が画面左端に現れる。そこには、全く別人である浅野沙耶の顔があった。美人であることに変わりはないが、顔色は白く目つきが鋭い。何らかの意図的な加工が見てとれた。

結婚を間近にした被害者と浅野容疑者の間に、いったい何が起きたのか。何故、婚約者を殺害するに至ったのか。そして逃亡から三日の間、彼女がどこで何をし、そして何を考えていたのか。今後の取調べが注目されます。以上現場からでした

不自然な間を置いて、画面はスタジオに戻される。ニュースキャスターは暗い表情を保ちながら この事件に関しては、続報が入り

次第お伝えしたいとおもいます と締める。そして、一転して明るい笑顔に衣替えし、地域の祭りの紹介をはじめた。

「マスコミ関係者も、大した情報は仕入れていないようだね。でも君の名を把握しているところは、少なく見積もっても新聞で三紙、テレビで二局ある。この事件が、誰の目にも明らかかな解決を得るまで、君は取材対象となり得るだろうな」

「そんなことはどうでもええ。なんやねん。新聞もテレビも、浅野さんが犯人やと決めつけとるやないか。彼女はまだ容疑者っただけなんやろ」

「正確には『被疑者』だね。知ってるかい？ 『容疑者』という言葉葉は、マスコミが勝手につくり出したものだそうだよ」

「そないなことはどうでもええ。もう、こんなところでグズグズしとられへん。はよ行こうや」

「まあまあ、まずは座りなさい。早く行っても仕方がない。美味しいコーヒーを飲もうじゃないか」

タイミング良く、口髭のマスターが盆を運んできた。コーヒーとバターがたっぷり塗られたトーストの芳ばしい香りが胃を刺激する。周囲の目もあり、仕方なく私は席に座った。そんな私を満足げに眺めながら、御渦はさっそくタバコを取り出し啜える。そして、上着の内ポケットから携帯電話を取り出すと、素早くナンバーキーを叩き耳に当てた。私には、適当にボタンを押しているようにしか見えなかったが、電話は繋がっているようだ。

「おはようございます。御渦です…。はい…、はい…、分かりました。じゃあ、もうそちらにうかがわなくてもいいんですね。…了解しました。…ええ、伝えておきます。今僕の目の前にいますので。…なんだ、知っていたんですか。…はい、ではまた」

短い電話を終えると、御渦は私を見て微笑んだ。

「もう、警察には行かなくていいらしいよ。昨日の山根さんが言っていた。それから、君の尾行も止めてくれるそうだ」

そういえば、私は殺人事件の参考人として、任意同行された立場

であった。また警察に呼ばれる可能性は高いはずだった。今日にも呼び出されても不思議ではない。今御渦は、その確認の電話をしてくれたようだ。警察は既に私には関心を持っていないのだろう。なにしろ私は、事件が起きてから登場する人物なのだから。

当然といえば当然のことなのだが、私は安堵していた。私が沙耶を思うあまり、その婚約者を殺害したという推測を、警察が立てなかったことに感謝していた。

そんな私の心境を見透かすかのごとく、御渦は微笑んでいた。そして、唐突な質問をはじめめる。

「なあ、聞かせてくれないか。君がなぜ、浅野沙耶なんて女に執着するのか」

「執着つて、俺はただ……」

「ただ？」

私は言葉が続かなかった。

微笑を保ったまま、御渦はタバコとコーヒーを交互に楽しんでいる。

「ならば聞き方を変えよう。このままいけば警察は浅野沙耶を間違えなく起訴するだろう。テレビや新聞も、あの女が婚約者を殺したものだ断定している。世界中が彼女を疑っているわけさ。なのになぜ、君は彼女を擁護するんだい。君が彼女に対して恋愛感情を抱いているということはみれば分かる。でも、それだけでは僕には解せないんだな」

「解せないって、なんでや。俺にはあんたが分からんことが分からへん。好きな人のことを信じるのは当然なんちがうか」

「まあ、世間一般の常識からしたら、君のほうがまともなのかもね。でもさ、事件の話をも君も聞いたのだろう。彼女は、他殺体と共に、密室の中にいたんだぜ。これは誰が見たって、犯人は彼女さ。こんな明確な事象を目の当たりにしても、君は彼女の無実を信じるわけだよ。これってさ、凄く不思議じゃないかい？」

御渦がいったいどんなこたえを求めているのか、私には見当もつ

かない。しかし、彼の話聞いてるうち、本当に自分が不思議に思えてきた。

「僕はライターとして、記事のネタにするために、この事件を追う。では君は、いったいなにを得るのだろうね」

私は何をやっているのだろうか。何がしたいのだろうか。彼女を救い、彼女の感謝のキスを欲しているのか。彼女を、自分のものにしたいのか。

そのために、彼女の無実を得ようとしているのだろうか。

「僕が言いたいことは、『愛』なんていう曖昧なもので、君が何かしらの道徳的な行為を行うとしていると、そんな勘違いだけはしてほしくないということさ。僕は記事を書いて、自分の好奇心といくらかの金銭を得る。君は、これは成功したらの話だけど、彼女そのものを得るのだろう。これが我々の目的だ。異なる目的であるが、そのプロセスを共有するため、共に行動する」

「当然や。俺とあんたは、友達にはなれへんからな」

私は吐き捨てるように言っちゃった。

「そんな話をしているんじゃないよ」

少々呆れたように、私を見下して御渦は声を張る。

「つまり、期待するなということさ。人は何かを得ようとすると、大義というものを持ち出すんだね。そして、大義というやつは正義なんだ。人生の中の苦しみにおいて、自分の正義が瓦解するというのは最大級の苦しみとなる。本当は、欲望の一つが姿を変えただけのものであるにもかかわらず、大きな苦しみを生み出すのさ。君は浅野沙耶の無実を勝ち取るうとしてる。しかしそれは正義ではなく、彼女を欲する欲望でしかないということ。これを認識していれば、失敗した場合もダメージはそれほど大きくはないよ」

御渦の言葉を理解するのに、私は数秒間を要した。何か大仰なことを言ったようだが、なんてことはない。彼は単に、沙耶を司直の手から解放つことはほぼ不可能であると言いたいだけなのだ。

しかし、私は信じている。彼女の無実を信じている。

御渦の言葉は、私の意欲を削ぐことはなく、逆に確固とした決意を抱かせる結果となった。

目の前に置かれ、多少冷めはじめているトーストをほお張り、同じく冷めたコーヒーで流し込む。

「御渦君よ。君のつまらん哲学を聞いている暇はないんや。協力してくれるのはありがたいが、邪魔するようなら、俺は一人で動くからな」

そう言い残し、私は伝票を掴み席を立った。大股でレジに向かい、財布から小銭を探している間に、御渦も立ち上がり私の後ろに歩み寄る。

「一人で動いたとして、君にいったい何ができるのか見物だが、そう怒らず、一緒に行こうじゃないか」

伝票の上に自分の料金である五百円硬貨をパチリと置き、さっさと御渦は店から出て行った。私もすぐにその後を追う。このときはまだ、私は気づいていなかった。私はこの時点で既に、逃れられない歯車の中にいたのだ。御渦が与えてくれた警告を、私は尽く無視したのだった。

JRと地下鉄を乗り継ぎ、私たちは京都市の北に位置する国際会館駅に到着した。

岩倉と呼ばれるその地域は、同じ京都でも色が違う。暮盤の目と呼ばれる町並みから一転し、宝ヶ池公園を代表に緑が景色の主役となる。そもそも京都の町は、同規模都市と比較すると、点在する寺社や御所の御蔭で緑が多い。しかしそれは、あくまでつくられた緑である。狐坂以北は自然の緑が多くみられた。

無意識のうちに私は、国際会議場の陰にみえ隠れする桜並木を眺め、深呼吸を一つしていた。大阪に住むようになり、久しく忘れていた澄んだ空気で肺を満たす。

「観光にきたわけじゃないぜ。さっさと行こう」

相変わらず、御渦は率先して歩いている。ここにくるまでこの男は、地図やメモの類は一切見ていない。それでいて、悩んだり、考えたり、思い出したりという仕草がない。まるで、毎日通う通勤路のごとく、迷いなく歩き続けている。電車の乗換えの際にも、駅員に尋ねないことはもとより、ホームを探す素振りもみせなかった。地図と駅の構造が、全て頭の中に入っているようだった。

おそらく彼は、『迷う』という感覚を知らないのだろうと思う。

どちらの道を行けばよいのか分からなくなり、足が竦むという経験がないのだ。迷いとは恐怖であると思う。未知の事象に対して、何らかの決断を迫られたときに臆することを恐怖と呼ぶのだ。御渦という男は、自信という細胞が寄り集まって形成されたような人物だ。声の張り、まっすぐに伸びた背筋、指先まで計算されつくされた仕草、それら全てが主張している。俺が一番だ、俺以外は劣等だ、と。そんな思いに耽っている間に、私は御渦に十歩ほど遅れてしまっ

ていた。彼は立ち止まり、普段の表情で私をただみつめていた。その切れ長の瞳が、私の思考を読み取っているようで不気味だった。

「何か問題があるのかい」

「なんもあらへん。その、篠沢の家は近いんか？」

御渦はこたえる代わりに、歩いている道の先を指差す。その先には、白地に力強い墨の文字が書かれた看板が見えた。文字は『篠沢家葬儀場』と書かれている。

私はようやく、自分が葬式にきたことを思い出した。

そして同時に、自分の失敗にも気付く。葬式に必要なもの、数珠と香典を準備していない。

「おい……」

蚊の鳴くような声で、私は御渦を呼び止める。しかし御渦は、歩みを止めようとしない。

「ちよつと待てつて。俺……」

ようやく御渦の肩を掴み彼の動きを止めたときは、もう受付の前までできてしまっていた。

そこは私が想像していたような民家ではなく、豪勢な門を構えている寺であった。

「ありがとうございます」と、受付の男が頭を下げてきた。黒縁の眼鏡に、べつとりと固められた七三分けの頭が見事に光っている、三十前の痩せた男だ。その落ち着いた物腰から、親戚の者ではなく葬儀屋だろうと思われた。

「この度は、突然のことです……」

御渦は蒼白となっっている私に構わず、紋切り型の挨拶を交わす。そして、内ポケットからちゃんと香典袋を取り出した。

私の惨めさは増す。社会人として有るまじき姿である。「すいません。香典忘れました」などという言葉は恥ずかし過ぎ、この上なく間抜けだ。

「社を代表して参りました」

御渦の差し出した香典袋には、『株式会社アプラス』という達筆

な文字が書かれていた。御渦についての情報を全くといていいほど持っていない私だが、そんな企業が存在しないことは容易に想像できた。御渦は、一匹狼というイメージを抱かせる男なのだ。

「篠沢さんには、大変お世話になっておりました。まさか、こんなことになるうとは……。特に私たちは、個人的にも親しくさせてもらっております」

私は斜め後ろから目を大きくして、すらすらと嘘っぱちを吐き出す御渦を眺めていた。私もその、あるはずもない会社の一員にされている。

この場は逃れられるが、この嘘がばれはしないだろうかという、新しい不安要素が私に押しかった。

受付の男は慇懃に頭を下げると、我々を屋内へと導いた。

既に弔問客は集まっており、焼香の順番を待つて並んでいる。寺の中に全員が入りきらず、外に立った状態だ。

客は三十名前後。我々がその最後尾に並んだときに、ようやく読経が始まったようだった。つまり、それが集まった客の全てである。弔問客の平均数など知るすべも無いが、少なくとも篠沢誠一の死を惜んでいる者がそれだけいるのだ。しかし、私は違う。篠沢誠一を見たことも、声を聞いたこともない。

唐突に、自分がとても汚らしい存在に思えてきた。静かに涙を浮かべる初老の男は、故人の学生時代の恩師だろうか。前途ある青年が不遇の死を迎えたことに対して、怒りの感情を隠そうとしない中年男性は、彼の上司なのだろうか。ハンカチに嗚咽を漏らす太った女性は、近所に住むおばさんで、誠一の少年時代を思い出しているのだろうか。しかし私の目的は、彼の死を悲しむことではなく、彼の死の理由を暴くことだった。

読経をかき消すほどの大きな泣き声が屋内から響いてきた。獣のような咆哮であり、子を産む妊婦の苦しみに似ている。

その声の主が、誠一の母伸子のものであることは容易に想像できた。一人息子を、しかも殺されたのであれば、その悲しみの大きさ

は計り知れない。弔問客達もこの声につられ、次々にハンカチを目や口に当てた。

狂ったような伸子の嗚咽は、絶えることなく続いていった。悲しみの満ちた重い空気の中、弔問客の列はゆっくりと動きはじめた。焼香なんてものは、さほど時間を必要としない。中には長い間手を合わせる女性もいるが、それは少数派だ。三十名ほどの列は見る間に減り、意外に早く我々の順番が回ってきた。右側には喪主の席があり、悲しみにふける篠沢伸子が泣き崩れたままの姿勢で、尽きることとの無い悲しみを吐き出している。弔問客に対しての挨拶など全くなかったが、喪主というやつはそれでよいのだと思う。

菊の花に囲まれた白木の棺が横たわり、その上に笑っている青年の写真があった。

それが、私をはじめて見る篠沢誠一の顔だ。目が細く、団子鼻。二枚目とは言い難いが、優しさが顔に滲み出ているような青年だった。

数珠は無かったが、私は手を合わせ彼の冥福を祈る。写真の男は、私にとって恋敵に当たるのだろう。心のどこかで、彼が死んでくれていることを喜んでいられる自分がいることを感じ取り、それに恥じた。弔問客の大部分は、焼香を済ませると次々に帰路につく。会場に残るのは親族と、ごく親しい友人知人のみである。私より先に焼香を済ませていた御渦は、その親しい知人が座る席に、平然と腰かけていた。御渦と私はワンセットである。一人先に帰るわけにはいかず（それこそきた意味がない）私は御渦の隣に小さくなって座った。「これから、どないするんや？」

殆ど口を動かすことなく、私は御渦に問いかける。

「もちろん、犯行現場をみせてもらうよ。全てのこたえは、そこにあるはずだからね」

映画を観るためにはチケットを買わねばならない、というような御渦の口調だ。

その後、更に二組の弔問客が訪れた後、読経は終わった。会場に

響く音は伸子の叫び声のみとなり、空気は一層重たく感じられる。しばしの間、この伸子の悲壮な嘆きだけが会場を支配した。本来ならば、喪主の挨拶が行われる段階なのだろう。しかしその喪主が泣き崩れ、回復の見込みがなかった。進行役であろう葬儀屋も新米なのか、落ち着きなく親族を眺め回すのみで、動くことはなかった。

そうした中、一人の壮健な男がすくりと立ち上がる。

「本日は皆様、お忙しい中、篠沢誠一の葬儀に足を運んで下さいます。まことにありがとうございます。ご覧のとおり、喪主が挨拶をできる状態にありませんので、私が代わってお礼を申し上げます。誠一君は、本当によくできた息子でした。真面目で、優しく、母親思いで、いつも彼女の体のことを心配しておりました。そんな誠一君が、あのような恐ろしい事件の被害者となってしまったことに、私は憤慨しております。納得ができません。おそらく、今日お集まりになった皆様も同じ思いでしょう。彼は殺されたのです。既に、容疑者が警察に逮捕されてはおりますが、事件が全て解明されたわけではありません。誠一君の無念が、少しでも晴らされるよう祈るばかりであり……」

男の張りのある太い声は、伸子の喘ぎをかき消して会場に響く。最後には、男も感情の高まりに耐え切れず言葉がかすれてしまったが、そのときには会場にいる半数以上が頬を濡らしていた。

面識が無いはずの私も、つられて涙を浮かべている。

「今挨拶をした男、あれが伊藤重信だ。篠沢伸子の恋人。そして、伸子と同時にではあるが、死体の第一発見者でもある。僕も見るのははじめてだが、なかなか立派な人物だね。普通、突然あんなにすらすらと挨拶をすることはできないよ。予め、準備でもしていたんじゃないか。しかし不自然だな。喪主が挨拶できないような場合は、他の親族がするべきだ。伊藤は恋人であって、戸籍上は赤の他人なんだぜ」

私の耳元で御渦がささやく。

御渦は全くその場に飲まれることはなく、平然と分析をはじめて

いたのだ。

伊藤の助け舟により、ようやく普段のペースを取り戻したのか、葬儀屋は最後のお別れとして親族一人一人に花を持たせ、棺に入れよう促す。葬式の中で最大のクライマックスとなるその作業も、伸子は終始泣き崩れ、嫌だ嫌だと繰り返した。その隣には、伊藤が絶えず寄り添っている。

ようやく出棺の段となり、葬儀屋の顔に安堵の色が伺えた。私は運び出される木棺を、御渦と並んで見送った。脱力していた伸子もなんとか車に乗ることができ、霊柩車はクラクションを高らかに鳴らし火葬場へ向けて出発する。その後を、十名弱の親戚が乗り込んだ小型バスが追っていた。

「ほんにたまらんな」

「若いもんの葬式だけは、かないませんなあ」

「しかも、殺人やなんてなあ。あのお袋さん、大丈夫やるかなあ」

最後まで見送った弔問客も、ぱらぱらと帰っていく。その中に、霊柩車をいつまでも見送る男が一人たたずんでいた。伊藤重信だ。喪主の代わりに挨拶まで行ったものの、火葬場には親族のみと聞かされていたのか、彼が自ら遠慮したのか。ともかく、伊藤が残っていることは、私にとって意外であった。

すると、客の間をスルリと抜けて、伊藤に近づいていく長身の男が見える。私の連れ、御渦である。落ち着きかけていた私の心臓は、再びテンポを上げて胸をたたきはじめた。

私はなんとか、がっちりとした伊藤の肩に御渦が手をかける瞬間に、彼らの傍にたどり着くことができた。事件が動き出そうとしている。そう、私の肌が感じていた。

「あの失礼ですが、誠一さんのご親戚の方でしょうか？」

「……いえ、違います」

唐突に声をかけてきた長身の男を、伊藤は訝しげに睨めこたえた。「でも、先ほど喪主の代わりに挨拶をされていましたよね」

「はい、確かに代わって挨拶をさせていただきましたが、私は親族

ではありません。ま、なりかけてはいるのですがね。ところで、お宅様は？」

「ああ、申し送れました。私達は、誠一さんと仕事で懇意にさせていただいた者です。仕事の場を離れても、何度か個人的な相談も聞いていただいたこともありまして、よい友人としてお付き合いさせてもらっていました。この度は、本当に無念で……」

御渦は語尾を震わせ、俯く。上手い演技ではなかった。大根もいところである。しかし、伊藤は見事に騙されたようだ。その場の雰囲気というやつが、御渦に味方したのだろうか。

「それは、わざわざきてくれてありがとうございます。誠一君も、喜んでると思います」

御渦に触発され、伊藤は再び目に涙を浮かべた。

「先も言つたとおり、私は親戚の者やないんです。あの子のお母さんと親しくさせてもらってましてな、それで、誠一君とも仲良うさせてもらってたんです」

「もしかして、伊藤さんですか？」

緩みかけていた伊藤の顔に影が差す。警戒心が高まっていた。おそらく、喫茶店で見ず知らずの男から名前を呼ばれた、そんな気分になったのだろう。

「なんで私の名前を？」

「誠一さんに聞いたことがあります。新しいお父さんができるってとても、頼りになる人やって言っていました」

ついに、伊藤の目から涙が溢れ出した。しかし、伸子のように自分を失うことはなく、毅然と前をみつめていた。ハンカチを取り出し、ゆっくりとした動作で伊藤はその瞳を拭う。

「そうですか。私のことを話してましたか、あの子は」

鋭かった伊藤の瞳が、穏やかな線に変わってゆくのを私は見た。

御渦に対して彼が最初に築いた不信という名の壁は、完全に取り除かれたように思われた。同時に私は、御渦の嘘により勝手に罪悪感を感じていた。いままでは偽名を使い香典を渡しただけであるが、

今は一人の人間を騙している。御渦は故人の名を語ることで、その尊厳を踏みにじっても同じだと感じた。

「それで、私に何か用ですか？ 親戚ではないが、あの連中よりも私の方が誠一君をよう知っていると自負していますよ」

伊藤の言葉には刺が感じられる。泣き崩れる伸子の代わりに、他の親族が挨拶に立たなかった理由があるのかもしれない。

「実は私たち、誠一さんの最後の場所を見ておきたいんです」

御渦の言葉はあまりにストレート過ぎるのではないかと、私は不安を憶える。案の定、伊藤の眉間には深いしわが刻まれていた。

「誠一さんが、どのような最後を遂げたのか、知りたいのです。誠一さんがどれだけ無念だったか、どれほど苦しかったか。私たちがそれを知ること、誠一さんの痛みを分かち合える、そんな気がするんですよ。こんなの、おかしいですかね……」

やはり御渦の演技は拙い。横にいて、つい噴出してしまいそうなほど下手くそだ。

しかし、伊藤は嘘のように騙される。

「ええやろ。伸子は火葬に行って、しばらくは帰ってこようへん。私がか家の鍵を預かっていますんで、案内しましょう。家はすぐ近くですわ」

男三人連れ立って、篠沢の家に向かい歩き出した。

御渦と伊藤が並んで歩き、その後を私が追う。前を歩く二人は共に長身で、私は普段より一層自分が矮小に感じられた。

御渦は歩く間も、絶え間なく口を動かした。その御蔭で、僅か五分ほどの移動の間に、篠沢伸子が親戚の間から疎まれる存在であることを知ることができた。伸子自身の両親は既に他界しており、親戚もいない。今日きていた親族連中は、皆誠一の父方の者であり、この葬儀が済めばもう二度と会うこともないのだという。もともと水商売をしていた伸子に対して、親戚一同ははじめからよい顔をしていなかった。誠一の両親の結婚は、そうした周囲の反対を押し切ったのものであった。悲しみに押しつぶされた伸子の代わりに、こ

の伊藤という男が挨拶に立たねばならなかった理由がようやく分かった。

「この家ですわ」

伊藤は、小さな二階建てを指し示し、ズボンのポケットから鍵束を取り出した。

私は一歩下がり、先ずはその家を眺める。

元が何色であったのか分からない古びた壁には細かなひび割れが入っており、玄関の四隅には赤茶けた錆が見えた。それでも、雨樋に蜘蛛の巣はなく、窓ガラスも磨かれている。形ばかりの門扉には黒光りする大理石の表札がかかっており、『篠沢』と太い白抜きの楷書で書かれていた。裕福ではなかったのだろうが、亡夫が残した家を大切にする伸子の姿が思い描かれた。

家には小さいながらも庭がある。誠一のもんと思われるホンダの青いセダンを囲むように、松の枝が茂っていた。

「人の目がありませんさかい、早う入ってくださいますか」

伊藤に促され、私は門を潜る。だが、戸の前に立った瞬間、私は再度自分の心臓の小さを悟った。私は、殺人事件が起きた家に入ろうとしている。当然、これまでの人生で経験したことのない場面だ。肩の辺りの産毛が逆立つ。

「何してんだ」

と御渦に背中を押され、ようやく私は薄暗い家に入ることができた。

屋内の暗さに目が慣れず、視力は一時的に失われる。玄関で何かに躓いた。まばたきを繰り返すことで回復した目に、白いスニーカーが映った。御渦と伊藤の大きな皮靴は、別にそろえて置かれている。一回り小さいそのスニーカーは、故人篠沢誠一の物であろう。私は慌てて足を引く。死人の所有物に対し、無意識の内に私は穢れを感じていたのだ。

「現場は二階ですわ。すんまへんけど、それ以外の部屋は覗かんでやってくれますか。私の家ではありませんからな」

階段に片足を乗せ、伊藤は声をひそめて言った。彼は私たちの希望を聞き入れてくれたが、主に無断で家の中へ招待することの後ろめたさを感じているのだろう。

「あの、事件の当日は、誠一さんとあの、容疑者の女以外、誰もこの家にはいなかったんですよね」

階段を登りながら御渦が問う。

「そう、とちがうかな？　せやから、警察も彼女を逮捕したんでしょ」

伊藤の言葉は、どこか歯切れが悪いように私には聞こえた。

「伊藤さんは、浅野沙耶を知っていたのですか？」

「ああ、誠一君に紹介してもらったことありますよ。うちの店にもきてくれたことあったな……」

先ほど見事な挨拶を行った者と同じ人物とは思えないほど、伊藤の口調は淀んでいる。彼が勝手に他人を家に招き入れている後ろめたさとは別に、何かしらの迷いが感じられた。

「この部屋や。私、法律のことよう分かりませんが、部屋の中に入るのは止めてもらいます。この廊下から、覗くだけにしてください」

伊藤は体を横にし、我々に道をつくった。大人二人がすれ違うには狭い廊下である。部屋の中を覗くにも、二人同時にはできない。

先ず、御渦がその部屋に頭を入れる。扉は開きっぱなしになっていた。それは、目の前の伊藤という男が蹴り破った、そのままの姿なのだろうと想像される。

「伊藤さん、あなたが第一発見者なんですよね」

カマキリのように首を動かし、部屋の隅々までを御渦は確認しているようだった。

「そうですね。私と伸子、ほぼ同時にみつけましたな。戸は私が蹴り破ったんです。こうやって」

伊藤は右足を上げ、戸に向かって一振りする。

「そのときの様子を、詳しく教えてもらえませんか？」

「なんやあんだ、刑事さんみたいやな。まあええ。何度も警察に話したことやけど教えましょ。この家の主、つまり誠一君の母親やね。そいつと私は朝にこの家に帰ってきた。といつても、私はこの家に住んどるわけやないよ。伸子が泥酔しとつてな、送つてやっただけや。ようやく家に帰りついたと思つたら、伸子のやつ、狂つたようにこの部屋の前で騒ぎ出したんや。そんで私、どないしたんやと二階に駆け上がった。そしたら息子が部屋から出てこないという。私は最初、どこかへ出かけてるんやと思つたが、伸子は靴があるから絶対にこの中にいると言ひ張る。あの女も一緒にいると言つ。確かに私も靴を見た。もしかしたら、二人で部屋の中で具合を悪うしたのかもしれない。ついに私は体当たりをはじめたんや」

一度喋りだすと、伊藤は饒舌だった。伊藤の言葉に、目を見開いたり、小さく相槌を打つたりする御渦のせいかもしれない。最初話していた丁寧語も止めたようだ。

質問する役を御渦に任せ、私は問題の部屋を覗く。血の匂いでもするのではないかと一瞬躊躇したが、御渦に押されて頭を突っ込んだ。

「何回か蹴りつけて、ようやく鍵が外れた。もう何年も開けていない納戸みたいな空気が流れ出たようやった。今思うと、血の臭いやつたんやろか」

私は篠沢誠一の部屋を見た。長方形の六畳間。扉から眺めて正面と右側に窓がある。クリーム色のカーテンが閉じられたままになっていて、真昼だというのに薄暗かった。その二つの窓の間となる角に机があり、その上にデスクトップのパソコンが置かれていた。机にはキャスター付きのチェアが収められており、そのチェアの後ろ側に、シングルサイズのパイプベッドがある。白いシーツに若干乱れが伺えた。そのまま視線を下ろしていくと、灰色の床の上に、バスケツトボール大の黒いシミが見えた。先ほど葬儀で見た写真の顔がその上にあることが眼に浮かび、私はつばを飲み込んだ。

「部屋の中で、誠一君がうつ伏せで倒れとつた。彼女、浅野沙耶は

そのベッドの上に座った。遠くを見る目で、意識がないように見えたな」

私は、乱れたシーツの部分に座る沙耶を連想する。私の頭の中の沙耶は、視点の定まらぬ瞳で、髪の毛は乱れ、そして何故か微笑している。

強く目を閉じ、頭を振ってその映像を振り払った。

「警察に通報したのは、あなたですか？」

「いや、伸子が自分でしよった。といつても、あいつ、まともに立つこともできへんかったから、電話のとこまで私が支えながら連れて行った」

直接の死因ではないというが、鈍器として使われたといわれる貯金箱はみあたらなかった。証拠品として、警察が持ち去ったのだらう。

「浅野沙耶は、その隙に逃げ出したのですね」

「さあ、いつ彼女が出て行ったのか。私には分からんのだ。見た感じ、彼女はボーとしたから、すぐに逃げ出すようにはみえんかった。ちゃんとみはつたらよかったと思う。そしたら、警察に手間かけさせることもなかったのにな」

心底伊藤は後悔しているようだった。

「しかし、彼女は捕まった。伊藤さんも、さぞ安心したことでしょう」

「ああ、まあ、な……」

伊藤の言葉は再び歯切れが悪くなる。

「さ、もう十分やる。私、怒られてしまっわ」

私たちは追い立てられ、階段を降り玄関に立った。

私が急いで靴を履こうとしているのに対して、御渦はやけに緩慢とした動きになっていた。ようやく片足を革靴に収めたところで、御渦は体を捻り伊藤を見上げた。

「本当に無理を言って申し訳ありませんでした。誠一さんの最後を伺い知ることができました。最後に一つだけ質問してもよろしいで

すか？」

伊藤は八の字に眉をゆがめ、困惑気味な表情をみせる。

「何度も言いますが、ここは私の家やないんですわ。そやさかい、本当にもう帰ってくれませんか」

「何故あなたは、浅野沙耶を逃がしてやったんです？」

御渦の言葉に、伊藤の身体は硬直した。

「……何を言うてるんや」

「ですから、何故あなたは、意図的に浅野沙耶を逃がしてやったのか、とお尋ねしているのです」

「おい、御渦……」

私がこの家に来て、はじめて口にした言葉だった。

「変なこと言うなて」

「教えてください伊藤さん。何故逃がしてやったんですか？」

暗い玄関においても、伊藤の顔が赤く染まっていくのが分かった。

「なに馬鹿なことゆうてるんや。なんで私が、沙耶ちゃんを逃がしてやらにや……」

「沙耶ちゃん。そんな呼び方をすると、相当親しかったんですな」

私の印象では、伊藤がこのとき、御渦を殴り飛ばしたとしても不思議はなかった。しかし伊藤は怒りよりも、困惑している様に窺えた。その目は真っ赤に充血していたが、どこか悲しげで、御渦に救いを求めているような、そんな憂いを感じられたのだ。一方御渦はといえば、伊藤をまっすぐに睨みつけていた。

「そ、な……、わ、訳の分からんこと言い腐りよって、早よ出てか
んかい」

御渦の鋭い視線を浴びて、伊藤は全てを投げ出すようなパニックに陥った。

私たちは結局、伊藤の剣幕に押されるように、篠沢の家から転がり出たのだった。

親しい者を失ったばかりの人間に対して礼を欠く結果、怒りを買ったのならば納得もいく。しかし伊藤のこの狼狽振りには、別の何

かしらの要因があるように感じられた。

歩いて駅に戻る途中、我々は小さな店構えの蕎麦屋に入った。御渦が空腹を訴え、遅めの昼食を取ることとなったのだ。

「おい、なんで伊藤さんを怒らせたんや。あれも、何かの目論見があつてのことなんやろ。俺には分からへんけど」

「目論見なんてないよ。僕はただ、真実を突きつけただけさ」

日焼けで黄ばんだお品書きを真剣な眼差しで吟味しながら、御渦はこたえる。

「真実つて、ほなら、伊藤さんは本当に、意図的に沙、浅野さんを逃がしたつていうんか」

「そうだつて言つてるだろ。君もあの家を見ただろう。立派な一軒家だけでも、大きな家じゃない。家の真ん中に廊下があり、二階へ登る階段に繋がっている。家の中ならどこにいても、あの廊下を通る者が分かるはずだ。彼女を犯人だと思つていたのなら、そこを通り逃げ出そうとする彼女を、見逃すわけがない。最愛の息子を失い、混乱しきつていた篠沢伸子ならばともかく、伊藤さんはある程度の冷静さを保つていたはずだ」

「じゃあ、伊藤さんも浅野さんが無実だと思つて、彼女を逃がしてやつたんか」

「無実と信じたかどうか分からないが、結果として逃がしたことは変わりがない。そうでなければ辻褄が合わない。僕は確信しているよ。彼は篠沢伸子の目を盗み、浅野沙耶を逃がした。伸子は警察に電話をしている間、頭は混乱を極めていただろう。伊藤さんはその隙に、浅野沙耶を逃がしたんだ。『逃げなさい』つてね。また、そうでなければ、浅野沙耶はその場から逃げ出そうとしなかったはずだ。話を聞いた限り、彼女は一晚中呆然として過ごしたようだが

らね。自分から逃げ出そうと思っていたのなら、いくらでもその機会があつたんだから」

しわくぢやな顔をした老婆が注文を取りにきた。御渦は天ぷら蕎麦定食を頼み、私はざる蕎麦を注文する。依然として食欲はなかったが、お茶だけをすすっているわけにはいかなかった。

「なんであの伊藤さんは、浅野さんを逃がそうとしたんやろか」

「その理由を聞こうと思ったんだよ。でも、あんなに頭に血が上つた状態じゃ、まともな話はできそうもないね」

「もし、もしもあんたの話が本当なら、浅野さんの無実が証明できへんかな。彼女は逃亡しようという気はなかったが、伊藤に無理やり逃げるように仕組まれた。混乱する意識の中、いつの間にか逃げ出した格好になってしまった」

「そして、君の家に辿り着いたのか」

一瞬、御渦はニヤリとした下品な笑みをみせる。

「浅野沙耶が意図的に逃亡しなかったからといって、彼女の無実を証明する手立てにはならないよ。ただ、減刑の要素になる程度かな。ま、伊藤さんの考えを最終的に知らなければならぬとは思うがね」
私は温い茶を飲み、気になっていた一つの疑問を口にする。

「なあ、伊藤は確かに怒っていたけど、どこか驚いたようじゃなかったか？ 俺の気のせいかも知れへんけど、怒りと同時に困惑したような顔、してへんかったか？」

「ああ、確かに。それは、僕の指摘が的を射ていたということだろうね」

御渦は汚れた窓から曇りがかった空を見上げ、一方的に会話を打ち切る。私との会話で、得られるものはないという、そんな顔をしていた。

やがて老婆が、愛想笑いもなしで注文の品を運んでくる。食べたくもないざる蕎麦を無理やり喉へと流し込んだ。味は殆ど分からなかった。

しばしの間、私たちは黙々と箸を動かす。御渦が蕎麦湯を使い、

残ったつゆを飲みはじめた頃、ようやく会話は再開した。

「この後、行きたい場所はあるかい？」

私は何も考えていなかった。この御渦の問いに対しても、ただ首を横に振ることしかできない。

「じゃあ、僕が案内しよう。今度行く場所は病院だ」

「病院？」

私はオウム返しに問う。口に出してから、自分が馬鹿みたいに感じられた。

「そう、病院だ。浅野沙耶の兄、浅野邦夫が勤める京都府立相沢病院。ここに行つて、お兄さんに話を聞くんだ」

私には、この調査を進めるに当たり、全くというほど当てというものが無い。ただ、御渦の提示する場所に、コバンザメのように付いてゆくことしかできないのだ。しかし、沙耶の兄の勤め先に赴き、事件の話を聞きだそうということには抵抗を感じた。

「そんな、急に押しかけてももうたら、迷惑やないか……」

「迷惑？ 君は浅野沙耶の無実を証明しようとしているんじゃないか？ 自分の妹を助けるため、彼が君に協力するのは当然ではないかな」

「しかし、アポイントも何もない状態では、やっぱり迷惑になるんじゃないかな」

「いいんだぜ。じゃあ、僕一人で行つてくるさ。君の名前は出さないようにする」

御渦はタバコを啜え、苦しそうな顔で火を点ける。深く吸い込み大きな煙を吐き出すときの、右側の眉毛がゆがんでいた。私はその表情を、何度も見た記憶があった。小学校低学年時の、クラス担任の顔だ。クラスの面々がわがママを言い出したとき、担任は決まってその顔をするのだった。

「あ、やっぱり、俺も行く」

無意識のまま、私は言葉を発した。

「なんだい？ 無理しなくてもいいんだよ。昨日も言ったが、君が

この調査の主役だ。僕の役目はその手伝いさ。僕は情報を仕入れてくる。それは正確に君に伝えてあげるよ。君は、それから考えてもいいんだ」

御渦の言葉は、私を労わっているようでいて、暗に私の逃げをけん制していた。もう、片足を突っ込んでしまったのだ、今になってその足を引き抜くことはできない。御渦の大きな手が、私の足首をしっかりと握っている姿が連想された。

再び地下鉄に乗り三駅目。北大路の駅近くに浅野邦夫が勤務する病院があった。

加茂川に沿った道沿いに、古びた白い建物がひっそりと建っている。住宅街の中でありながら、廃屋にきたかと思われるほどの静寂があった。私は休診日なのではないかと疑う。

「何してんだ。行かないのか？」

私は二つの理由で躊躇していた。一つは今回の相手が浅野沙耶の兄であること、そしてもう一つは、今の自分の格好である。

「喪服で病院は、なんとというか、まずいんとちがうかな」

そう言われ、御渦も自分の黒いネクタイを解く。彼のスーツは単に黒っぽいものというだけで、礼服ではなかった。従ってネクタイを解くとカジュアルなものにみえなくもない。しかし、私のそれは黒光りした本物の喪服であり、黒いネクタイを解いたところで、病院という医療現場における違和感は拭えないだろう。

「そんなに気にするなって。意外と人の目というやつは、他人に向けられてはいないものさ」

私の逡巡に構うことはなく、御渦は病院に向かう歩みを進める。

立ち止まることは、私の癖になっているようだ。だが、このときばかりは御渦を先に行かせ、好き勝手させるわけにはいかなかった。「ちょっと待って。さっきの葬儀は仕方ないかもしれんけど、今度は相手が仕事や。せめて、外来の時間が終わるまで待った方がいいんとちがうか」

高い位置にある御渦の肩を苦勞して掴み、私は彼の動きを止める。「僕だって、そんな非常識ではないよ。無論、診察時間が終わるまで待つつもりさ。でも、そうするには今からゆうに二時間は待たね

ばならない。その時間を無駄に過ごす必要もないだろ」

肩に乗せた私の手を埃のように払いのけ、御渦は病院の玄関に向かい歩む。

『京都府立相沢病院』という黒ずんだ木製の看板を横目に、私は御渦に追いついた。そして、肩を並べて玄関を通る。黒いネクタイは歩きながら解いた。

感度の悪い自動ドアを通ると、外から見えた静寂さは姿を消し、子供たちの喚声が入った。とても医療現場とは思えない騒々しさだ。

「ここは、小児科なのか？」

「いや、一応総合病院のはずだよ」

鼻を突くアルコールの臭い、忙しく動き回る白衣の看護婦、これらを除けば保育園の感がある。

「総合病院だけれども、院長が小児科の権威だとかで、それが売りだということだよ」

待合室に並んだソファーの中に空きをみつけ、御渦は腰掛けた。

所在無く立っているわけにもいかず、私もその隣に座る。子供の付き添いなのだろうと思われる母親達は、ほぼ例外なく週刊誌を捲るか、他の母親との世間話に熱中しており、我々の黒い服装に訝しげな視線をよこす者はいなかった。

「さて、どうしようかな……」

足を組み、落ち着いた格好となった御渦であるが、その目だけは忙しなく動いている。

目の動きが止まったかと思った途端、弾けるような勢いで御渦は突然立ち上がる。私も反射的に御渦の後を追っていた。そして御渦は、若い看護婦の前に立ち塞がった。レントゲンの写真が入っているのだろうと思われる大きな封筒を何枚も抱えていた看護婦は、目を丸くし立ち止まる。

「どうかしました？」

「あの、神経内科は、どこにあるのでしょうか……」

蚊の鳴くような声で御渦は訊ねる。普段、自信に満ち溢れた、張りのある御渦の声しか聞いたことのない私には、一瞬別人が発した声に思われた。

「こいつがですね、その……、ほら、自分で言ってみるよ」

御渦が突如私に話を振ってくる。全く準備をしていなかった私の舌は痙攣したように動かない。

「ああ、うあ、あの……」

御渦と私の顔を交互にみつめると、若い看護婦の顔から驚きの表情が消え、優しい微笑が浮かんだ。

「ああ、こちらです、ご案内しましょう」

看護婦は踵を返し、我々を先導して歩きはじめる。

当然のことだが看護婦は、白いナースキャップに白衣、白いストッキングから伸びた足の先には白いナースシューズ。白い女に連れられて、黒い二人の男が歩く。

「おい、神経内科ってどんな病気を扱うところか知ってるんか？俺、聞いたことない」

私は小声で訊ねた。

「脳疾患、脊髄疾患、末梢神経疾患、筋疾患を扱う内科さ。具体的には脳梗塞や脳血管性痴呆、てんかんや脊髄炎、顔面神経麻痺。つまりは……」

「つまり？」

専門用語が御渦の口から滑り出る。私には殆ど理解できなかった。「つまり、頭痛やめまい、記憶や意識がはつきりしなかったり、舌を動かし難くなったなどの症状を感じた人が訪れるところ。精神科や心療内科と勘違いされがちだけど、取り扱う病は明確に区分されるようだ」

御渦の話聞いて分かったことが一つあった。前を歩く若い看護婦は、私のことを患者として見ているのだ。先ほどの優しい微笑みは、私を神経が病んだ者と見た哀れみなのであろう。

「精神科や心療内科が心の問題、つまり精神病やストレスを発端と

する種々の疾病、躁鬱病やノイローゼを治療するのに対して、神経内科は神経の病気、アルツハイマーやてんかんの患者を治療する。要は、心か神経か、ということかな。今言った病は、それぞれ関連しているのだろうけど、原因が何かということに対して、治療のプロセスは大きく異なってくるのだろうね。僕も専門家じゃないから、この程度の知識しかないよ」

こそそと耳打ち合う我々に、看護婦は一度だけ振り向いたが、見てはいけないもの見てしまったという顔で、一応平生を装っている。

実際私は、彼女に患者だと勘違いされてもおかしくはないだろう。浅野沙耶に出会ったことをきっかけに、神経は磨り減っている。いや、本当は彼女と再開する以前から、私は病んでいたのだろう。いつも死を願っている男が、健康体とは言い難い。

「あの、浅野先生という方をご存知でしょうか」

エレベーターの前で扉が開くのを待つ間、御渦が看護婦に聞いた。「ああ、はい、知ってますよ。私、去年まで神経内科にいましたから」

「噂を聞いたんです。この分野では、とても腕のいい先生だって」「そうですね。浅野先生は大変熱心な方です。だから安心してください」

看護婦は私を見て微笑んだ。唇が綺麗な逆三角形を描いている。

やはり、私は患者だと思われるようだ。

「ただ、変な噂も聞いたんです。なんでも他のお医者さんと、あまり仲が良くないって……」

ようやく開いたエレベーターに乗り込みながら、御渦は質問を続ける。幸い、他の患者が乗り込んでくることはなかった。

「ああ、そうですね。私の口から言うのもなんですけど、浅野先生は本当に熱心な人でして、治療方針なんかで、他の先生と口論することもあります。けど、良い先生だからこそ、喧嘩してまで患者さんのことを思っているのだということですよ」

「声を荒げることもしばしばあるとも聞くのですが……」

「はい。私もよく怒鳴られました。でも、患者さんに対して怒鳴るようなことはないので、安心してください。自分にも我々看護婦にも、とにかく厳しい人なんです」

看護婦はまた、念を押すように私を見て微笑む。

しかし、御渦という男はいつの間にか浅野邦夫についての情報を手に入れたのだろうか。昨日私と別れてから、今日の朝までの間か。それとも、あの喫茶『カンザス』で、我々が出会った後に調べ上げたのだろうか。とにかく、私は彼に驚かされてばかりだった。

三階に到着し、エレベーターの扉がゆっくりと開く。案内してくれた看護婦は開いた扉を押さえたまま、我々を箱から出す。

「神経内科の受付は、あそこに見える窓口でお願いします。それじゃあお大事に」

エレベーターの扉は閉まり、看護婦はそのまま一階へと降りていった。

三階の景色は、先程のものとは変している。先ず子供がいない。廊下の長椅子に腰掛けているのは老人だらけだ。会話を楽しんでいる者はなく、皆一様に俯き、苦悩の表情を浮かべている。

「おい、どないするんや？ ホンマに診察を受けるんか？」

「診てもらいたいさ。君、顔色悪いから、ばれることはないぜ」
真剣な顔で御渦がこたえる。その後すぐに御渦の顔が崩れ、笑顔になってくれていなければ、私は本当に受付へと向かっていたことだろう。

「もう二三人の話を聞かなきゃならない。君はしばらくここで待っていてくれないか。ここでは、独りの方が動きやすい」

そう言い残すと、私を待合室の長椅子に座らせ、御渦はさっさとどこかへ歩き去った。

神経内科の待合室には、全くというほど音が無かった。受付の事務員が紙を捲る音と、時折患者が放つ咳払い、そして低く響いてくる唸り声だけである。

私は突然の孤独感におそわれた。ふと、幼稚園に通っていた時分、百貨店で母親とはぐれて、広い婦人服売り場を彷徨った記憶が甦る。母だと思ひ飛びついたスカートの持ち主は全くの他人であり、女は汚いものを見る目で私を睨みつける。背丈の低い私にとって、ブラウスやジャケットが吊られたハンガーの列は壁に等しく、まさに迷路であつた。泣きながら母を捜し、ついに疲れきつてぺたりと地面に座り込む。床の冷たさが尻に伝わり、私は泣くのを止めた。これからはもう、一人で生きてゆかねばならないのだと考えた。

あのと時の孤独感に似ている。

自分の目に、少しだが涙が浮かんでいることに気づき、あまりの馬鹿馬鹿しさについて笑ってしまった。鼻から抜ける笑い声を不快に感じたのか、隣に座る老人が私をちらちらと盗み見る。

本当に馬鹿みたいだ。私は、それほどあの男に依存してはいない。自分一人でも、やれないことはないのだ。

ただ、御渦がいつも先に行動してしまっているだけだ。そう自分に言い聞かせた。

病院に似つかわしくない下品な笑い声が廊下に響き、私は心の内に向かつていた目を外に向ける。げらげらと笑う声には覚えがあつた。御渦宗茂のものである。

御渦の前には、体を折り曲げている若い看護婦が見えた。彼女は苦しそうな顔をしていたが、どうやら笑っているようだった。御渦が耳元に口を寄せ二言三言囁くと、爆発したように看護婦は笑う。

通りかかった黒ぶちメガネの医師が睨んだため、ようやく看護婦の笑いは止んだが、その目には余韻としての涙が浮かんでいる。その後看護婦は、名残惜しそうに御渦に手を振って仕事へと戻って行った。

一仕事終えた満足げな顔で、御渦が帰ってきた。

「君を待たせた甲斐があつたよ。良い話が聞けた」
硬いソファーに身を投げて、御渦は足を組む。

「なんやねん。ねた仕入れたなら、俺にも話してや」

「今は止めておこう。それより、本来の目的の人と合うために、約束を取らなきゃならんね」

そうして、私たちは二十分ほど所在無くその待合室で時を過ごす。いや、所在無く過ごしたのは私だけで、隣に座る御渦は斜め上を凝視した姿勢で、何か思案にふけっているように見えた。いったい何を考えていたのか、私には想像もできなかった。

御渦がその姿勢を解き、すくりと立ち上がったときには、もう待合室には私たち二人しかない状況だった。

「あの、浅野先生はいらっしゃいますか？ 本日は勤務されていると聞いたのですが」

受付窓口に立って、御渦は中の女性事務員に向かい問う。

「はい、いらっしゃいますよ。あれ？ まだ受付を済まされていませんね」

窓口に座る丸々と太った事務員は、笑顔を保ったまま慌てて帳面を捲る。

「治療にきたものではありません。浅野先生と、少しお話をさせていただければと思い参上しました」

途端、事務員の表情に懐疑の色が浮かび上がる。

「マスコミの、方ですか？」

声が冷たかった。彼女は、浅野邦夫の妹が起こしたとされる事件を知っているのだらう。この二三日中、数々の記者から質問を浴びせられたことがあったのかもしれない。また、病院経営者側からの緘口令が発せられている可能性も充分考えられる。

「違います。浅野さんの妹の友達です。是非、先生に話しておきたいことがあるのです。いいですか、これはとても大切なことなんです」

一言々に力を込めて、御渦はゆっくりと話す。事務員は威圧されたのか、しばらくきよるきよると目を泳がせていたが、重い尻を上げ診察室に向かってくれた。

「なあ、話しておきたいことってなんや」

「会えたら、そのとき考えるよ」

先ほど思案していたことはなんなのだろう。慎重なようで行き当たりばつたりな御渦の行動に、私は心底呆れてしまった。

事務員が消えた診察室は、クリーム色のカーテンで遮られている。そのカーテンが揺れた。空気の動きによるものではない。明らかに、人の手が動かしている。カーテンを薄く開き、人の目が覗いた。はつきりとはないが、私には男の目が見えた。

「どうやら、会うことができるらしいぜ」

御渦が呟くと、カーテンの揺れが治まった。

動きが止まったかと思つた途端、豪快にカーテンを開けて事務員が戻ってくる。太つた顔はもう笑うことはなかった。厭な役を申し付かつたと顔に書いてある。

「あの、先生はまだ患者さんを診てらっしゃるので、今から一時間後に、裏の駐車場にきてくれとのことですよ」

呟く声で邦夫の言葉を伝えると、事務員はさっさと奥へと引つ込んだ。

私は御渦と一瞬だが視線を交わし、互いに微笑むことができた。

病院の従業員用駐車場は住宅に四方を囲まれている。病院自体の影になっていることもあり、その場に立つと暗鬱さと圧迫感が感じられた。

駐車場で待てということは、浅野邦夫は車で通勤しているということなのだろう。ただ、我々はどの車が邦夫のものか知り及んでいない。

「どうする？ 一時間、ここで待つかい？」

タバコを一本胸から抜き出しながら、御渦が聞く。まだ日が高いが、風は冷たい。だからといって、どこかの喫茶店などへ避難する気にはなれない。掴みかけたチャンスは、確実に手にしたかった。「自分、しんどかったら他所に行っていてかまわへんよ。俺はここで待ってる。邦夫さんがやってきたら知らせるから」

私は、少しでも役に立ちたかった。今のところ、私はいてもいなくても同じ存在であるのだ。患者のふりをしたただけだ。

私の言葉など聞こえないように、御渦は黙って駐車場を後にした。まるで、そうするのが当然である、といった顔をしていた。

自分で言い出したことであつたが、冷淡な御渦の対応には落胆した。私たちは友達ではなく、仲間とも言えない。強いて言葉を当てるならば『連れ』であろう。それでも、最低限の人間同士の付き合いというものがあるはずだ。

気落ちには体にも伝わる。立っていることが辛くなり、私は崩れるように近くに止まっていた黄色いワーゲンへもたれかかった。

建物に囲まれた圧迫感から解放されるため、私は空を見上げる。そこにしか逃げ場がない気がしたのだ。今にも落ちてきそうなほどの曇り空がそこにあつた。視点の置き場としてその空は心地良かつ

たため、しばらく顎を突き出した姿勢で見上げていた。

「面白いものでも見えるのかい？」

私の視界に、御渦が強引に侵入してきた。背の高い御渦には、空を見上げる私を上から覗き込むことが容易にできたようだ。

「なんや、近くに店がなかったんか」

すねた子供の口調で私は言う。

御渦はただ微笑んで、缶コーヒーをワーゲンの上に置いた。どうやら私にくれるものらしい。

無言のまま、御渦は自分の缶のプルリングを起こす。乾いた音は、静かな駐車場によく響いた。

私も口をつけ、ぐいと飲む。熱く、苦いコーヒーだった。偶然にも、私が常に好んで買う銘柄だ。

私たちは数分の間一緒にワーゲンに寄りかかり、黙って缶コーヒーをすすっていた。

「なあ、さつき看護婦と何話とつたんや」

沈黙に耐え切れなくなった私が、先に口を開く。

「知りたい？」

御渦はいたずらっぽく笑った。

「浅野邦夫の評判を聞いてきたんだ」

「コーヒーを飲むことで一息つき、一瞬和んだ空気が生まれていたが、私は殺人事件の真相を知るためにやってきたことを思いだした。それで」

と御渦と促すと、彼はタバコを啜えながら話しはじめる。

「そうだね、時間はたっぷりとあるから、今のうちに話しておこうか。僕は、計三人から話を聞いてきた。君が廊下で見た看護婦さんを含めて三人だ」

タバコに火を点けて、御渦は続ける。

「結論から言うと、浅野邦夫という人物の評判は賛否両論だ。真面目な医師だという人もいれば、短気で付き合い辛い、医師としては不適切な人格だという人がいる。支持する人と、批判する人にはっ

きりと分かれるんだ。これが、どうゆう意味を持つか分かるかい？」

「そりゃ、単に敵と味方がいるというだけの話とちゃうんかな」

「その通り。浅野邦夫には敵と味方がいるんだ。もつと言うと、彼には敵と味方しかない。僅か数人の話で判断することは危険だが、その可能性は高いと思われる」

一息付き、御渦は残っていたコーヒを啣る。

「そんな、敵と味方しかないで、おかしいやないか」

「そうさ、おかしいんだ。世の中、敵と味方だけじゃない。むしろ、どちらでもない存在の方が多いのが普通だ。例えば、君と僕は敵でも味方でもない」

私は、一瞬の間を置いて頷いた。

「つまり、浅野邦夫さんは、人格に問題があるということやな。敵が多いということは、そうゆうことやる」

「そうとも言い切れない。先も言ったけど、彼には彼を支持する人も多いんだ。邦夫を神様みたいに崇めている、若い研修医もいるよ。うだ。今時点の情報で、彼の人格に問題有りの烙印を押すのは早過ぎるだろうね」

「せやけどそれ、邦夫さんの性格に問題あるなしが、今回の事件となんか関係あるんか？」

私が言うつと、御渦は弾けたように反応し、カラカラと笑い出す。

「おい、忘れたのか？ 君は、浅野沙耶以外の誰かが犯人ならばそれで良いのだろう。関係者の一人に人格上の問題があるならば、浅野沙耶に有利に働くかもしれないんだぜ。それがたとえ、実の兄でもね」

私は言葉を失った。

とても、自分が罪深い存在に感じられる。まだ私は何もしていないのだが、他人の大切な場所に土足で踏み込んでいる、そんな気がする。

「邦夫のことは、彼がここにきて、僕らと話す時間をとってくれれば分かるんじゃないかな。まあ、とりあえず待とうか」

私と同じようにワーゲンに体重を乗せ、御渦はぶかぶかとタバコを吹かす。

私も残ったコーヒーを飲み干し、また空を見上げた。

そこから約一時間、我々は互いに一言も喋らなかつた。

人が近づいてくる気配を感じ、私はもたれかかっていた黄色いワ
ーゲンから体を起こす。

スーツ姿の痩せた男が、駐車場の端に立っていた。私がある存在
に気が付いてからは、男は動きを止め、じっと私たちをみつめてい
るようだ。その表情を読み取るには、距離が有り過ぎたし、鼻の上
にのっっている縁のない眼鏡も光っていた。

「やっとおいで下さったか」

私の隣で御渦も体を起こす。

「君が声をかけてみるよ」

突き放すような御渦の口調だった。私は二度咳払いしてから、震
える声を絞り出す。

「あの、浅野……邦夫さんでしょうか」

たたずむ男は、ゆっくりと頷いた。

「君たちは何者かね？」

浅野邦夫はようやく口を開く。高く、よく通る声だった。まだ我
々との距離は十数歩離れている。

「受付の方に言いませんでしたか。私たちは妹さん、沙耶さんの友
人に当たる者です」

こたえたのは御渦だ。どうやら私の役目はもう終わったようだ。

「沙耶とは、どうゆう関係？」

「彼をご存知ですか？ 中井厚司という者です。沙耶さんの、高校
時分のクラスメイトです」

妙な距離を置いて会話が始まった。

「妹のクラスメイトなど、いちいち憶えていないよ」

邦夫のこたえはもつともだ。

「ご存知なくても事実です。加えて、沙耶さんは先日、彼の家で警察に拘束されました」

自分が通報しておいて、よくもぬけぬけと言えたものだ。私は感心すらした。

邦夫はまた黙り、我々を凝視する。

「その、なんで君の家に、沙耶がいつていたのかな」

邦夫の虚ろな目が私に向けられた。当然私が質問にこたえねばならない。しかし、私の喉と舌は縛り付けられたように動かなかつた。

「沙耶さんが、彼を頼って訪れたんですよ」

今回も、御渦が代わりに説明してくれる。

「その、つまり、彼と沙耶は、親密な関係にあったのかい」

邦夫も私との会話に期待することを止め、相手を御渦のみに集中した。

「その辺は、お兄さんのご想像にお任せします」

御渦のこたえを聞いた瞬間から、邦夫の視線が私に突き刺さる。

そして、私に視点を固定したまま、ゆっくりと近づきはじめた。彼との距離が縮まるにつれ、表情が読み取れるようになる。

氷のような目をしていた。

隙あらば、飛び掛ってきそうな勢いの目だ。

私は、生まれてはじめて『殺意』というものを身に受けているのだろう。手など触れていないのに、私は無意識のうちで二歩後づさっていた。

「で……、私に話したいことって、なんだね」

殺意を持続したまま、目の前にまで邦夫はやってきた。

やはり、沙耶の兄である。沙耶と同じように整った顔立ちをしていた。そして、御渦にこそ敵わないが、私から見たらすらりと伸びた、モデルのような長躯である。柔らかそうな髪の毛は控えめに脱色しており、緩いパーマがあてられていた。

そのとき、いつのまにか私の背後に回っていた御渦が、ドンと背中を押してきた。

「あの、沙耶さんは犯人ではありません。え、冤罪です」
背中を押された勢いで、私は自然に口を開いていた。

邦夫の表情から殺意が消え、代わって驚きの色が浮かび上がる。

「彼女、沙耶さんは、私の目の前で連行されました。そのとき、彼女は首を振ったんです」

邦夫の驚きの表情に困惑が混じる。

「彼女は無実です。冤罪です。私が、証明してみせます」

震える声であったが、はっきりと私は言い切った。

邦夫の顔は更に変化し、呆れ果てていた。

「おいおい、そんなことを言うためにやってきたのかい。君たち、よっぽど暇なのだね」

微笑むことなく、邦夫が言う。

「浅野さん。私たちはなにも、感情だけで動いているわけではありません。当然、ある根拠を元にこの事件を調査してるのです。申し遅れましたが、私、ジャーナリストの端くれでして、事件の関係者であるこの中井さんに協力してもらい、事件の真相を追っている次第です」

私と邦夫の間に割り込んできた御渦が、仰々しく名刺を差し出した。

邦夫は片手でその名刺を受け取ると、訝しげにみつめる。

「それで、『ある根拠』とはなんなのだね」

「それは言えません」

気後れすることなく、堂々と御渦はこたえた。そのとき、邦夫はようやく空気が抜けるような笑い声をあげたのだった。

「まあいいさ。そんなことはどうでもいい。話を進めてくれ、何で君たちは、私に、会いにきたのか、これを説明しなさい」

医者という職業がそうさせているのか、有無を言わさぬ邦夫の命令だった。

「二つ三つ、質問にこたえていただきたいのです」

御渦が言うと、邦夫は腕組みし我々を睨みつける。

「時間がかかるかね」

「三十分で終わらせませす」

「その質問に私がこたえることで、何がどうなるんだい」

「真犯人を捕まえることができます」

御渦が断言すると、邦夫の唇が左右に伸びたように見えた。そして中指で、眼鏡の中央を押し上げる。

「面白い人たちだな。いいよ、質問を受けようじゃないか。大切な妹が帰ってくるのなら、私も労を厭わない。だけど、ここじゃあ場所が悪い。私の家にいこう。その辺の喫茶店でできる話でもないだろうしね」

邦夫が車の鍵を取り出すと、私と御渦がもたれていたワーゲンの隣に止めてあるアウディの施錠が解かれる音が響いた。

「君たち、ここまでは電車かね？」

私は「電車です」とこたえたつもりだったが、実際に声は出ていなかった。ただ頷いただけの格好となっていた。

「なら乗りなさい。家までは車で、ここから二十分の距離だ」

御渦の動きは早く、邦夫とほぼ同時に助手席のドアを開けていた。邦夫は左側の運転席へ滑り込む。私も慌てて、御渦の後ろに転がり込んだ。

シルバーのアウディは重低音を放つエンジンを目覚めさせ、タイヤを鳴らして走り出す。車はかなり改造されているようだ。特にマフラーから吐き出される排気音は酷い音だ。周囲の目が非難している。私だってこんな車が傍を走り抜けるときは眉をひそめるだろう。

邦夫の荒い運転で、車は北大路から加茂川に沿って南下して行く。私は、行き先を知っていた。京都市伏見区阿波橋町、その番地まで私は記憶している。そこが、浅野沙耶の家がある場所だ。

住所は知っていたが、この場に立ったことはない。浅野沙耶の家。床面積百五十平米はあると思われる大きな家だ。比較的密集した住宅街にあるが、邦夫は構う事無くエンジンを吹かしながら、スムーズに車庫に入る。

大学生になつて免許を取得してから、父の車を借りて二三度、この家の前を通つたことがある。その都度、無意識の内にアクセルを緩めてしまい、後続車両があつたときはクラクションを鳴らされた。私はいつも、奇跡的な幸運に期待していたのだ。私が車で走りぬけるとき、彼女が家から出てくる。私が求める幸運とは、そのとき、一瞬であつても、沙耶の顔を見ること、ただそれだけだったのだ。勿論、彼女が東京へ引越していたことは知っていた、その上での話しである。

「誰もいないから、遠慮せず入つてくれ」

現在の世帯主であろうと思われる浅野邦夫が、我々を招き入れる。外壁は全てレンガで覆われており、モダンな雰囲気漂わせる家だ。私は緊張しながら、玄関へと足を踏み入れた。

この家に入ることを、何度も夢に見た。私は沙耶に手を引かれ、家族に紹介される。そして、ぬいぐるみがたくさん並んだ、女の子らしい彼女の部屋へと通されるのだ。彼女は子供っぽい部屋を恥じて赤くなる。そして、沙耶の母親がケーキと紅茶を出してくれる。しかし現実には、私は得体の知れぬ男と行動を共にしており、沙耶は留置所の中にいる。大きな違いだ。

夢との違いは状況だけではない。思い描いていた景色とは色が違う。屋内に入つて先ず感じたものは、家具の少なさである。家具ばかりか、装飾品の類が全くといっていいほどない家であった。まる

で、モデルハウスである。モデルハウスならば見栄えを考え、観葉植物のひとつやふたつはあるものだが、そうした飾り気が一切ない空間である。

十坪はある広い居間へと通される。ソファークセットとダイニングテーブル、そして重厚な食器棚が一つ置かれただけの、やはりシンブルな家である。本棚もオーディオも、テレビすらない。生活臭というものが全く感じられなかった。

「ソファアーにでも腰掛けて待っていてくれ。私は上で着替えてくるから」

御渦と私を残し、邦夫は二階へと上がっていく。私は言われたとおり、おとなしくソファアーの一つに座った。黒い革張りのソファアーで高級感があったが、座り心地のよいものではなかった。一方御渦は座ることなく、居間の中を歩き回っている。長い体を折り曲げて、壁紙から床板まで、舐めるように眺めていた。

「すごいすごい。こんなおかしな家はじめてだ。君、見たことあるかいこんな部屋。何も無いじゃないか」

御渦の声が以上に響く。物のない部屋は、音が吸収されることなく反響するのだ。私は今のワンルームマンションに引っ越したばかりの頃を思い出していた。はじめての一人暮らしで、まだ家具をそろえていない時分は、今のように声がよく響いていた。

「なに失礼なこと言うてるんや。自分の部屋も似たようなもんやっただやないか」

何もない部屋ならば、御渦のアパートも負けてはいなかった。

「僕の部屋は、最低限の物に囲まれて暮らしたいという、僕の特殊な事情からだよ。僕以外の人間がこんな何も無い部屋に暮らしてるのは異常だね」

「勝手なことばかり言うてるな自分。これだけ大きな家に二人きりで住んでいたんや。実際の生活の場は二階にあつて、ここは殆ど使っていないせいやないかな」

私なりの解釈を披露するが、御渦は私を無視して、フローリング

の床を丹念に調べていた。

「三年前にこの父親が亡くなるまでは、親子四人が暮らしていたんだろ。見てみるよ、家具が置かれていた跡がいたるところに残っているよ」

凡そ一畳分のスペースが、日焼けしたように変色していた。実際は、それ以外の部分が長い年月によって変色したものなのだろう。

「使う人がいなくなったから処分した。そのどこがおかしい？」

「ならば君は、親が死んだからといって、その親が使っていた家具や家電を処分するかい？ そりゃ、多少は捨てるだろうけど、その痕跡が全くみえなくなるほど、徹底して片付けるかね。見てごらん。ここには何も無いんだよ。まるで、最初からなかったみたいだね」

御渦に言われ、私は改めて部屋の中を見渡した。よく見ると、カーテンすらかけられていない。食器棚の中身も、空いたスペースが目立っている。どうやら本当に二人分の食器しか揃えられていないようだ。この家は本当に、邦夫と沙耶だけの、二人だけの空間なのだ。

漠然とした気味悪さを感じつつ部屋を見回しているうちに、視界の中に黒い人型のシルエットが入った。私がビクリと体を痙攣させて立ち上がると、人型はゆっくりとこちらへ進んできた。カーテンのない窓からの直射日光を受けて、浅野邦夫の姿が浮かび上がる。

「お待たせした」

スーツから紺のポロとジーンズに着替えた邦夫が、私の隣にどさりと座った。

「疲れているんだ。すまないが、さっさと質問とやらをはじめられないか。ああ、先に言っておくが、もちろんこたえられない内容もあるよ」

御渦をみつめ、邦夫は言う。交渉相手は御渦のみであり、私はその付属品であると認識しているようだった。そしてそれは正しい判断だ。

「では、さっそく聞かせてください。あなたにとって、妹の沙耶さ

んはなんですか」

唐突に質問をはじめた御渦の言葉に、部屋の空気が淀んでいくのが感じられた。

「なんですかって、どういう意味？」

邦夫が問い返す。

「あまりに漠然とした問いかけでしたね。言い方を変えましょう。

沙耶さんはどのような女性なのでしょう。この中井という男は彼女をよく知っているようですが、私は一度しかお話ししたことがないので。できればお兄さんから、沙耶さんという人物を教えてくださいのです」

「それを君に語ることで、事件は解決するのかな」

「おそらく……は」

曖昧な御渦のこたえであったが、その口調は自信に満ちている。

代わりに私が同じ言葉でこたえていれば、すぐにでも我々はこの家から追い返されていることだろう。

しばしの間天を見上げてから長いため息を吐き、邦夫は話しはじめる。

「あいつは、一言で言えば『子供』だ。いい年をして職にも就かず、私の扶養家族になっている。家事手伝いが肩書きとして通用したのはうん十年前の話なのにね。今の言葉で言えば、ニートというやつだな。ただ単に社会的に自立できていないだけじゃない。沙耶は、本当に子供なんだ。わがままでいい加減。駄々をこねれば誰かがなんとかしてくれると考えている。概ね、その役目は私が負っていたのだがね。半年くらい前にこんなことがあった。私の車で沙耶がドライブへ行くと言い出した。あいつはペーパードライバーでね、私は反対したんだ。でもあいつは私が寝ている間に、勝手に鍵を持ち出して、車に乗ってでかけてしまった。まあ、玄関に鍵を置きっぱなしにしていた私にも責任があるのだからね。案の定、五キロ走った程度で事故を起こしたよ。他の車との軽い接触事故だったけど、沙耶は全てを相手の車のせいしようとした。警察が下した責任分

担は八対二、当然こちらが八だ。実際沙耶が、無謀な割り込みを行ったようだよ。私の自動車保険から慰謝料も払った。そのくせあいつは、私に詫びの一つもしていない。信じられるかい？」

私が思い描いていた沙耶とは、全く異なつた人物が邦夫の口から語られた。

一度口を開くと、邦夫は饒舌だつた。一気に語り終え、ソファーに深く座り直す。そして、次はなんださつさとしろ、といわんばかりに、掌を上にした右手を御渦へ伸ばした。掌が白くなるほど、邦夫の手には指の先まで力が入っている。

「そんな具合では、沙耶さんが結婚をしようとしていたのは、お兄さんとしてはさぞご心配だつたのではないですか」

「勿論さ。家にいたつて家事なんて全然していなかつた女が、結婚なんて信じられんよ」

「お兄さんは、結婚には反対してらしたのですか？」

「まあ、当初はね。だけど結局は、あの二人に押し切られる形で認めたさ。結婚式の費用も、誠一君が全部出すと言ってくれたしね。

そこまで言われたら、私にはどうしようもない。厄介者が一人片付くと思えば、それもいいかと思つたよ。誠一君には気の毒だけどね」

邦夫は自虐的な笑いをみせる。見ていて不快になる、頬が引き攣つた笑い顔だ。

「気の毒？ 愛し合っている二人が結ばれるのに、気の毒なんですか？」

問いを続ける御渦の顔色は全く変わらない。私には、カウンセラーと相談者のような様子に見えた。勿論、御渦がカウンセラーの役である。

「そつだ。気の毒だね。二三ヶ月はいいだろう。でもね、沙耶は家事をするような女じゃない。料理だけは多少うちの母に仕込まれていたが、それ以外は全く駄目だ。一度あいつの部屋をみせてやりたんだよ。散らかつているなんて言葉じゃ生易しいね。それに……」

「それに……？」

早口でまくし立てていた邦夫のトーンが急に落ちる。

「君たちは、沙耶の無実を証明しようとしてくれていたんだね。なら、こんなことは言わない方がいいかな……」

「教えて下さい。プライベートは守りますよ」

御渦が促すと、邦夫は長く息を吐いてから口を開く。

「あいつは、アルコール依存症だったんだ」

兄の声は空虚なりビングに冷たく響いた。

「ほんの一週間だが、入院したこともあるくらいの重症だよ。医者である私が傍にいながら、まったく恥ずかしいかぎりだけどね」

そう言つて、邦夫は再び引きつった、自虐的な微笑みを浮かべた。アルコール依存症。沙耶と過ごした時間は短かったが、これが思い当たる節は多々ある。彼女の手には常に酒があつたような気がする。しかし、入院しなければならぬ程進んだアルコール依存症とは、思いもよらない重症だ。あの明るく輝いた存在である沙耶が、酒を切らすと手を震わせ、ベッドに縛り付けられてしまうのか。そんな姿が、どうしても私には想像ができない。

「それは、完治していたのですか？」

喫茶店で出会ったとき、御渦は彼女がビールをぐいぐい飲んでいて姿を見ている。彼は、こたえを知っていながら質問しているのだろう。

「いやいや、全然さ。何より本人に治す意欲がない。私が酒をどこに隠しても、いつの間にかみつげ出して飲んでいるんだ。完治には長い時間が必要だ」

まるで他人事のように、淡々と邦夫は語った。

この兄と妹は、いったいどのような関係なのだろうか。世には様々な兄弟・姉妹があるが、邦夫と沙耶はどの種のものか、今の段階では判断できなかった。

「その話、篠沢さんはご存知だったのですか？」

「誠一君は知っていたよ。あの母親はどうか知らないがね。多分誠

「君は話していなかったんだろう。知っていたら、もつと強固に反対していたはずだよ」

「母親の伸子さん。彼女はあなたに対して好意的だったようですね」「ああ、私に対しては猫なで声で接してくれたよ。あんなタイプの女性は苦手なんだがね、あいつのためにずいぶん我慢したよ。それが、こんな結果になってしまつて」

「こんな結果とは、つまり」

「それを、私の口から言わせたいのか？」

「噛み付きそうな勢いで、邦夫は私たちを睨み付けた。」

「膝の上で組んだ手を、邦夫は落ち着きなく動かしてはじめる。」

「話を变えましょう。沙耶さんの経歴を教えてくださいませんか。大学を出てこの家に帰ってくるまで、今ひとつ不透明なんですよね」

邦夫の手の動きが止まつた。

「大学は無事に卒業できたんだ。だが、就職はできなかった。私はすぐに帰つてこいと言っただけで、あいつは横浜か東京に住みたがった。あのまま放つておいたならば、風俗で働きかねなかつた。」

だから私は、半ば強制的に、この京都へ連れ帰つたんだ」

「学生時代から、沙耶さんはアルコールに溺れていたんですか」

「いや、その頃はたんに、酒が好きただけだつた。明確に中毒症状になつたのは、こちらに帰つてきてからかな」

「あなたは、妹さんがアル中になつた原因はなんだと思います？」

「医者としてではなく、兄としての立場でお聞かせください」

邦夫は天井を見上げ、言葉を選んでるようだつた。

「やはり、就職に失敗したことが一番の原因なんだろうな。あいつは人一倍自尊心の強い女だから、周りの友人が次々に社会人として自立して行く中、自分が取り残されたと感じたんだろう」

私からみれば、一点の曇りもない完全な存在であつた沙耶が、劣等感にさいなまれたとは、にわかには信じられなかつた。

「今度は医者の立場としてこたえてくれますか？ アルコール依存症が殺人事件のきっかけとなる可能性は高いのでしょうか」

「おいおい、君たちは沙耶の無実を証明しようとしてるんじゃないかな？ たのか？ まあいいけど。可能性は皆無じゃあない。でも、あいつの場合には考えられないかな。先ず女の力じゃ、暴れても押さえつけることができる。沙耶は飲んで暴れるようなことはなかったが、そうならないとも言い切れない。でも、例え大暴れしたとしても、人を殺めるほどの力がだせたとは思えない。あの誠一君は毎朝のジョギングを欠かさないようなスポーツマンだ。沙耶が殺すことができたとは考え難いね」

「そうだ、一番大事な質問を忘れていました。邦夫さんは、妹の沙耶さんが無実だと信じていますか？」

突然に声のトーンを上げ、御渦は聞く。目を丸くし、邦夫はまっすぐに御渦を捕らえる。

「正直に言っと、信じてないよ。今私には、肉親と呼べる存在は沙耶だけなんだ。その肉親を信じてやらねばとは思っているが、状況から判断してそれは難しい。沙耶は、内側から施錠された部屋の中に、誠一君の死体と一緒にいたのだからね。あいつがアル中だということも警察はとくに知っている。まあ、私が話したんだけどね」

私は、再び邦夫の重ねあつた指が動き出すのを見逃さなかった。「私なりに、色々なシチュエーションを考えてもみたさ。強盗が押し入ってきた。誠一君を何者かが恨んでいた。女関係でもいい。遊ばれて捨てられた、とかね。でも、誠一君が死んだ後の数時間を同じ部屋で過ごし、発覚した途端に逃げ出してしまった沙耶は、自らの犯行だと訴えているのと同じじゃないか。こうして君たちの相手をしているが、実は私はもう、とくに諦めているよ。あとはよい弁護士をつけてやり、少しでも刑を軽くしてやることしかできないね」

「ならば、沙耶さんが犯人だとすると、どのような動機が考えられます？ 警察が掴んでいる情報では、沙耶さんと篠沢誠一さんの仲は良好だったようです。先ほど伺った話からも、母親の伸子さんの問題があったことは分かりましたが、沙耶さんが抱く殺意の理由

が全くみえてこない」

「そんなこと、私に聞かれても分からないよ。それこそ、本人に聞いてくれ。いくら血の繋がった兄妹だといっても、結局は他人なんだからね。あいつが何を考えていたかなんて知らないさ」

いい加減うんざりしてきたのだろうか、邦夫の口調には投げやりな匂いがした。

ここまでの印象として、この邦夫という沙耶の兄は、妹を救いたという気持ちがないように思われる。それどころか、厄介者がいなくなり清々しているという態度だ。次第に、私の精神は黒く塗りつぶされてゆく。

あの美しい沙耶が、冤罪で拘束されているというのに、実の兄であるこの男が、何故にこのように落ち着き払い、我々の問いに面倒くさげにこたえているのか。

一言意見してやろうと腹に力を入れた途端、横から御渦がまた喋りはじめる。私は文句を言うタイミングを失った。

「ところで、あなたは犯行時刻、十日から十一日にかけての時間帯、どこにいらしたのでしょうか？」

一瞬で、邦夫の顔に影が射す。

「まさか、私を疑うのか？ 不愉快だね」

と言いつつも、邦夫は私たちを家から追い出すような気配をみせなかった。大人ぶっているのか、それとも後ろめたいことでもあるのだろうか。私は後者に期待する。

「警察にも聞かれたよ。質問はしきたりみたいなものだと言われたが、私に寄せる関心は高いものだったよ。いいさ。同じことをこたえてやろう」

顔は険しいままだったが、何かしらの余裕が伺える表情だった。

邦夫は目を閉じ、記憶の整理をはじめた。

「篠沢さんの家を出たのが、夕方の五時三十分前後だったと思う。家に帰ったとき、テレビで六時のニュースが始まっていたから、多分そのくらいだろう。そのニュースの中身も、警察に話したよ。君

「たちにも話そうか？」

「6チャンネルのニュースでしょ。開始六分三十五秒、女性キャスターが読む原稿を間違えて、画面に出ている映像と一致しなかったシーンが印象的でした」

と、御渦が合いの手を入れる。

「ああ、その話を警察にしたよ」

微笑を浮かべて、邦夫は続けた。御渦の細かすぎる記憶は、聞き流したようだ。

「それからは、ずっと家にいたよ。自分で夕食を用意し、一人で食べた。六時のニュース以外はテレビもみず、音楽を聴いていた。それから風呂に入り、あの日は早めに寝たんだ。十二時にはベッドに入っていた。刑事さんが言っていたが、私が音楽を九時過ぎまで聴いていたということは、隣の人が証言してくれている。勿論、そこに私自身がいたかいないかまでは、立証してくれないけどね」

「あなたが寝るまで、誰とも会っていないのですね」

「ああ、誰とも会ってはいないが、電話はかかってきたよ。十一時を過ぎたあたりかな。母からだった。知ってるかな、私たちの母は再婚して、別の姓を名乗り別の家で暮らしてるんだ。たまに思い出したように、電話してくるんだよ。携帯電話ではなく、家にある固定電話にかけてきたんだ。そのときの通話記録は、警察が調べてくれたみたいだよ」

邦夫の自信に満ちた言動は、どこからきているのだろうか。今聴いた話の内容では、邦夫は犯行時刻における自らの所在証明が全くできていない。彼は二十三時あたりに家にいた。ただそれだけが立証されたに過ぎない。この家から岩倉にある篠沢の家まではほぼ京都市を縦断する距離があるが、彼のアウディを使えばなんの問題もない。時間帯も考慮すれば、三十分もあれば確実にたどり着ける。邦夫の荒っぽい運転を考えれば、二十分、否十五分も可能だ。

つまり、電話を切ってから家を出ても、午前零時前の犯行時刻に間に合う時間は余るほどにあったのだ。

「電話では、どんな話をされたんですか。その、お母さんと御渦が聞いた。」

「違う。そんなことはどうでもいいことだ。彼に言うんだ。電話は全くアリバイ立証に役立たないと。」

「そうだな、確か金の無心だったよ。新しい母の男は、大きな会社の役員で金も持つてるんだが、とにかくケチらしい。母は自由にできる小遣いが少なく、足りなくなると私に訴えてくるんだよ。全く困った女だよ。この家にはろくな女がいない」

「何分くらい話していたんですか？」

「五分も話してないよ。いつもの口座に入金してやるよと言って、さっさと切ってやった。疲れていたからね」

「ほらみる。一時間も話し込んでいたなら別だが、たったの五分だ。私は邦夫が電話を切るとすぐに黒い皮手袋をはめ、あのアウデイのタイヤを鳴らして走り出す姿が頭に浮かんだ。そのときの彼の表情は虚ろで、自分がこれから何をしようとしているのか分かっていない。」

「お母さんとの会話は、いつもそんな感じなんでしょうか」

「まあ、そんな感じだね」

「最後にお母さんと会ったのは、いつごろです？」

「母と？ そんなこと事件に関係あるのかい？ ま、いいけどさ。半年は会ってないかな。もう、会う必要もないだろうし。なんだろう、別の家庭に行ってしまうと、他人のような気がするね。昔から頼りにならない母親だったよ。父に頼りきり、父が死んでからは私に頼りきりだ。その日の晩御飯のメニューすら、自分で決められない人なんだ。沙耶があんなふうアルコールに逃げ出したのも、母親の影響なのかもしれないね。まあ、私がお母さんだけしっかりしなければとも思うがね」

彼の母親の話など、どうでもいいことだ。御渦は何を気にしているのだろうか。何も考えていないのではないのか。私の忍耐は限界に近づいていた。

「その後は、誰かから電話があつたり、直接会って話をしたりしていませんか？」

「そうだ、母の電話の後、間違い電話が一件あつたけど、別に話はしていないね。無言で切れた。あの日は、そのまま寝たよ」

「ア、アリバイは証明されていませんよ」

ついに私は口を開いた。広い居間の空間に、私の声はよく響く。自分の声の木霊に促されるように、私は持論を披露する。

「さ、先程あなたは、十一時過ぎに電話を受けたとおっしゃいました。しかし、死亡解剖の結果推定された犯行時刻は、十一時三十分から十二時の間です。つまり、五分で電話を切ったあなたは、犯行現場の篠沢さん宅へすぐに出発すれば、十分辿り着ける計算になります。よって、あなたにはアリバイがないんだ」

出だしこそ声が震えたが、最後には自分の声に酔っていた。まるで、サスペンスドラマの名刑事にでもなった気分だ。私の指摘を受けた邦夫は、青白い顔でうつむく。アリバイが証明できないことに気付かなかつた御渦は、驚きと羨望の眼差しで私をみつめる。そうなる筈だった。しかし、御渦と邦夫は、同じような表情を私に向いている。一言で表すと『呆然』である。

「走つて、かい？ どちらかといえば足は速い方だと思うけど、とてもじゃないが無理だよ。多分、ここから十キロ近くあるんじゃないかな。篠沢さんの家までは」

邦夫は声を出して笑い出した。

「しかし……」と反論しかけた私を御渦が遮る。彼の表情は呆然から哀れみに変わっていた。

「浅野さんが乗っていた車を思い出してみるよ。夜中に出発したら、近所の人が気づかないわけないだろ」

私はアウディの排気音を思い出した。あの重低音は、脳の奥に手を突っ込み揺さ振られるようなものだった。あんな車が隣の家で、夜十一時過ぎにエンジンを吹かせば、多少耳が遠くなった年寄りでも目を覚ますだろう。まして、この辺りは住宅が密集している。気

づかないわけがないのだ。当日は大雨だったということだが、邦夫のエンジン音は、台風がきていても、隣近所には十分聞こえる音量を吐き出す。

私は耳まで赤くして黙り込む。家を忍び出てからタクシーを拾うという手もあるが、人を殺すためにタクシーを拾うのはどうかという、昨日の御渦のアパートでの会話を思い出した。走るなり、自転車を漕ぐなりしても、不可能な時間ではないが、そんな時間に必死で駆ける人物は、人の目に留まりやすいだろう。殺人者としてはあまりに危険な手段でのアリバイづくりとなる。

私は、もう口は出すまいとソファアの上で小さくなった。

「彼が言いたいことは、ともかく邦夫さん、あなたには明確なアリバイがない、ということですよ。たとえ自分の車が使えなくても、協力者が一人いれば済むことです。だが、僕はアリバイなんてものに興味はない。そんなことは無意味だからです。アリバイがあろうがなかろうが、篠沢誠さんを殺害することができたのは、ただ独り、あなたの妹さんだけだからです」

御渦の言葉に対して、私は山ほど言いたいことがあったが、沈黙を守った。

「沙耶が犯人だと分かっているなら、なんで君たちはこの事件を引っ掻き回すんだい？ 単なる面白半分で首を突っ込んでいるなら、こちらとしてもそれなりの対応をさせてもらうよ」

邦夫は医者だ。法曹界に知人の一人や二人はいるのだろう。もう潮時だ。私は縋る思いで御渦の顔を窺った。

「僕が知りたいのは、沙耶さんの気持ちです。どうして婚約者を殺さなければならなかったのか。どうして殺した後、あの部屋で死体と共に時を過ごしたのか。どうして朝になって逃げ出したのか」

「おかしいな。君は先に、私が君たちの質問にこたえることで、真犯人を捕まえる、とか言っただけじゃなかったか？」

「確かに言いました。しかし、あなたが何一つ隠さずに、私たちの質問にこたえてくれた場合の話です。あなたは語っていない。私が

はじめにした質問を憶えていますか？ あなたにとって、沙耶さんはなんですか、という質問ですよ」

邦夫の顔色が、見る見る変わってゆく。

「もういい。いい加減にしてくれ。付き合った私が馬鹿だった。もう帰ってくれ。遊びに付き合うのはこれまでだ。でなければ、警察を呼ぶよ」

私の勇み足を笑い飛ばしてくれた邦夫は、もうそこにはいなかった。顔は真っ赤に茹で上がり、頭からは煙が出そうだった。

御渦が先ず立ち上がり、すぐに私も続く。追われるように廊下を進んだ。

靴を履き表に出た途端、私の後ろで扉が乱暴に閉められた。そして、施錠する音が響く。二度と来るな、と怒鳴られるほうがましだろう。無言で追い出された私は、やり場のない寂しさを感じていた。一方御渦はそんな仕打ちにも動じることなく、先に立ってすたすたと歩きはじめた。

彼の記憶の地図には、この辺りの情報も記されているのだろう。私もこの区域には明るく、駅に向かってまっすぐ向かっていることは分かっていた。

私が不用意な発言をしたせいで、御渦が考えていた質問事項を省く結果になってしまったのでは、と不安になる。歩く速度を速め御渦に並び、彼の顔を覗き込む。そこには、満面の笑顔があった。まるで、こうして家を追い出されることが、全て予定通りであったかのような、満足した顔である。

私は先程話した限りでは、浅野邦夫という人物が理解できなかった。実の妹が殺人事件の容疑者として逮捕されたからなのだろうか。情緒は不安定で、掴み所がない感じだった。何より、肉親の無実を信じてやれない兄、というものが理解できない。

「あの人、おかしいと思わんか？」

「どこが？」

御渦は振り返りもせずにとたえた。

「どこがで、普通、実の兄妹やったら、妹の無実を信じてやるもんやろ。なのにあの人は、人事みたいにしとった」

「兄妹だと、何で無実を信じてやらなければならんだい？」

「何でて、そんな当たり前やろ」

不思議そうな顔で、御渦は私の顔を覗いていた。

私たちは十五分ほど歩いて、京阪伏見桃山駅に到着した。

時刻は既に十六時半を回っている。

「コーヒーでも飲もうか」

喉がカラカラだった私は、御渦の提案に素直に従った。駅前に店を構えるレトロな喫茶店に入ると、私たちは先ず出されたお冷を一気に飲み干す。

「アイスコーヒー二つ」

御渦は私の意見を聞かずに注文したが、これについても文句はなかった。

「邦夫は、お茶の一杯も出してくれなかったねえ」

黒い上着を脱ぎつつ、御渦はさっそくタバコを取り出して火を点ける。私もダブルの上着を隣の椅子に脱ぎ捨て、ハンカチで額の汗をぬぐった。喪服の襟袖には、汗の痕が白くゆがんだ線を描いている。

とても長い一日だった。もう家に帰り、ベッドに沈みたい。

思えば私たちは、行く先行く先で相手を怒らせ、家から追い出されている。否、私たちではなく、御渦宗茂がであった。私自身は、いてもいなくても、結果に左右しない存在なのだ。

「浅野邦夫から得られた情報は大きいね」

運ばれてきたアイスコーヒーをストロー無しでこくりと飲んで、御渦が話しはじめる。

「さっきの話で、いったい何が分かるんや。俺には分からん。ホンマに俺ら、何か役に立つ情報を得られとるんか？」

「もちろんさ。パズルを埋めるパーツはそろいつつあるよ。それを、どうやってはめ込むか、が難しいだけさ」

「分かったことがあるなら、少し教えてくれや」

御渦の真似をしていると思われたくないがために、私はストロークでアイスコーヒースをすする。ひどく温く、元からガムシロップが入った甘いコーヒードった。

「今の段階ではつきりしていることは、伊藤がわざと浅野沙耶を逃がしたということ。そして、さつき会ってきた兄浅野邦夫は情緒不安定。病院の関係者に聞いた話と総合して判断すると、何らかの人格障害者である可能性が高いね」

指にタバコを挟んだまま私を指差して、御渦は語った。

「人格障害？ それは、精神病みたいなもんなんか？」

「少し違う。違っていているようで当たっている。学者によって分類も様々で、僕も説明し辛いな。一言で言えば、性格の病気、かな」

「性格が悪いつてゆうことか？」

「その定義付けが曖昧なんだよ。まあ、簡単な線引きとして、周囲の人間に迷惑を及ぼすような行動を取りはじめた段階から、人格障害と言つて良いんじゃないかな。シュナイダーという学者によると、人格障害は十に区分できるらしい。爆発タイプ、軽薄タイプ、自己顕示タイプなどなどだ。簡単に言うと、極端な人かな。突然怒り出して、周囲の静止を全く受け付けなかったり、限らないお調子者だったり、極めて見栄っ張りであったり、という具合だよ」

「そんなん十もあつたら、誰もが、何らかの人格障害になつてしまふんちがうか？」

「そう、誰もが軽度の人格障害であるともいうことができるね。それが個性というやつかもしれない。だけど、それが顕著に現れる症例に対して、この人格障害という言葉は適用されるんだ。彼、浅野邦夫は周囲とのトラブルを繰り返している。さつき言つた爆発タイプと何かの障害を併発してると思われるね」

どこから沸いた自信なのか不明だが、御渦の口調は断定的だった。私には得心できない。そもそも、心理学というものの自体を私は疑っている。人格というものは千差万別。どんな偉い学者だろうと、人

格を線引きすることなんてできないはずだ。そして、してはならないとも思っている。

「これからどうする?」

残りのアイスコーヒを一気におおり、御渦が言った。

「これからって、まだどっか行く気か?」

私は疲れていた。これ以上、この男に連れまわされたら、倒れてしまっただろう。

「もう遅いからね。残りは明日にしようか」

私は胸を撫で下ろす。やっと家に帰れるのだ。しかし、一つの言葉が私の目を覚ます。

「明日で、明日もここへくるんか?」

「いや、京都じゃない。明日は天津だ。浅野沙耶と邦夫の母親に会いに行こう。今から行ってもかまわないんだが、遅くになって警戒されては、引き出せる情報が制限されてしまいかねないからね」

「そんなん違う。自分と違い、俺はサラリーマンなんや。二日も休みはもらえへんよ」

いくら私の会社が有給休暇を取りやすい環境にあるといっても、二日連続は困難だ。その辺りを、この自由人であるところの御渦宗茂は理解していないようだった。

しかし御渦は、理解していないどころではなく、目を大きく見開いて驚いている。それは、怒りに近い驚きの表情だ。

「おいおい、いったい誰の為に、こうして動き回っていると思ってるんだい」

金槌で頭を殴られた気分だった。御渦の言葉により、私はこの調査の目的を思い出す。疲労により、忘れかけていた目的。沙耶を救い出すということ。

「すまん」

小さな声で、私は謝罪した。この御渦という男も、自分の記事を書くためとはいえ、私に協力してくれているのだ。目的は異なるが、真相をさぐるという過程は一緒だ。

私がこうしてへばっている間、沙耶は冷たい牢屋の中で過ごしているのだ。拘置所という所がどんな世界なのか知らないが、居心地の良いものではないことは容易に想像できる。彼女はただ拘置されているだけではない。いかつい刑事により、厳しい取調べが行われているのだろう。一日でも、否、一時間、一分、一秒でも早く開放してやらねばならない。私は、彼女を救い出すナイトなのだ。

胸中の声であったが、余りに陳腐なフレーズが発せられたことで、私は顔を赤くしていた。

御渦はただ、タバコを吹かしている。

私はこのとき、沙耶のことを思い頭がいっぱいだったから気付かなかった。御渦の言葉を、私は全く曲解していたのだ。そして、彼の本当の目的も理解できていなかった。

コーヒーを飲み干すと、私たちは無言で駅へと向かった。

四月十六日水曜日は、雲ひとつない晴天だった。

私は朝、会社に電話をかけ、二日連続の有給休暇を貰った。風邪を引いたと嘘をついた。上司の声は予想どおり、昨日とは違って不機嫌なものに変わっていた。当然だろう。新入社員だった昨年の私は、一日たりとも会社を休まなかった。三十九度の熱が出たときも出社したし、本来会社の規定で必ず取らねばならない有給休暇も、私は書面上休んだことにして仕事をこなしていたのだ。

そんな私が二日連続で休んだことを、上司は訝しんでいることだろう。それとも、警察から全てを聞いており、同情してくれているのだろうか。どちらにせよ、私は会社での立場を悪化させている。しかし、そんなことは些細なことだ。極端な話、職は変えられる。でも沙耶の代わりはいないのだ。

今日も御渦と、朝から行動を共にする。昨日のように服装の指示がなかったため、ジーンズに白シャツで、ブレザーを羽織ってきた。カジュアルではあるが、人と会っても失礼に当たらない範疇と、自分なりに気を使った結果の選択だ。

例の喫茶店『カンザス』で朝九時に待ち合わせる。約束の時刻十分前に店に入っていた私は、トーストが付いたモーニングセットを注文し、各社の朝刊に目を通した。沙耶の事件について新しい情報はなく、引き続き容疑者の取調べが進められているという小さな記事しかみあたらなかった。

ふと気付くと、周りにいたはずのサラリーマンの姿が消えていた。皆、それぞれの仕事に向かったのだ。店内には、私と初老の男が残っている。初老の男は定年退職し、自由な時間を謳歌しているのだらうが、私は場違いな空気を感じていた。世の中の時間は動き出し

ているというのに、私の周りは止まっている感じがしてならない。取り残されているというよりも、傍観者の視点であろうか。おそらく御渦宗茂という男は、常にこのような視点に立っているのだろうと思われた。

戸が開き、鈍い鐘の音が店内に広がる。長身の御渦が勢い良く入店した。私の姿をさがすのだろうと思われたが、彼ははじめからまっすぐに 私がその席にすることが、予め分かっていたように向かってくる。そう、彼には『迷い』というものが一切ないのだった。

「何事も、慎重な男だね」

店の柱にかかっている時計を指差し、御渦が言った。時計の針はちょうど九時を指し示している。私が時間より早く、待ち合わせ場所にやってきていることに対して言っているのだろう。普通に解釈すれば褒め言葉なのだろうが、私は素直に受け取ることができなかった。

「自分こそ、時間通りにきとるやないか」

私の声には棘があった。自由に生きているように見える御渦から言われたことが、厭味に聞こえたのだ。たった一日二日の休みも、気軽に取ることができない身分が、その切欠だったのかもしれない。「何を怒っているのか知らないが、仲良くしようじゃないか。多分、今日一日我慢すれば、僕たちの目的は達成されるからさ」

事も無げに言った御渦の言葉が、私を再び混乱させる。私は未だ、この事件について何一つ分かっていない。それでも彼は言うのだ、今日解決すると。事件の真相を解明することが私の目的であるわけであるが、実際にその目的が目の前に迫っているといわれても、何も実感が持てない。実感が持てないにも関わらず、恐怖心だけは明確に生まれている。もしその結果が、私の目指すものでなかったとき、私はどうなってしまうのだろうか。私は全てを失う気がする。元々私は、何も持っていなかった。何も持っていなかったからこそ、手にしたものを失う恐怖がなかった。ただ単に、空虚な自分の人生

を終わらせたいと考えていれば良かったのだ。しかし今の私は、僅かな時間ではあったが彼女を手にした。手にしたという表現は適切ではないのだろう。たった数日の間同じ部屋で過ごし、一度だけ体を合わせただけだ。たとえその数値が百倍になっても、彼女を手にするなどできないのかもしれない。しかし、幻想であるうと、私は彼女を一度は手にしたと信じている。そして、もう一度彼女を手にするのだ。

御渦は私と同じモーニングセットを注文した。そして、私と御渦の注文の品がテーブルに並べられたのはほぼ同時であった。御渦はジャムをたっぷり塗ったトーストにかぶりつきながら、私が持ってきた新聞を読みはじめた。否、読んでいるという表現は間違っていた。彼は眺めていただけだ。パラパラと紙面をめくり、次の新聞に手を伸ばす。二つの目玉がグルグル回り、一紙を二十秒も見えていない。

「それで、分かるんか？　ちゃんと読めとるん？」

「コーヒーを浮かせながら、私は聞いた。」

「いいや、読んでないよ。ページを記憶しているだけさ。内容は、後でゆっくり読むんだ」

意味が分からない。好意的に解釈すると、彼は紙面を絵として記憶し、後からその絵に書いてある文字を読み取る、ということだろうか。しかし、そのような芸当が本当にできるとは到底信じられない。

彼の話を言葉通りに受け止めていては、まともな会話が成り立たない。私は彼の記憶自慢を受け流し、御渦の格好に注目した。

グレイのスーツに、胸が広く開いた純白のシャツ。襟がやけに大きく、胸元に金のチェーンが光っている。昨日は結ってまとまっていた髪を自由にしており、彼がトーストに食いつく度、揺れる髪の毛も一緒に食べてしまうのではと、見ていてヒヤヒヤさせられる。

一見すると、梅田界限にみられるホストのようであった。彼の黒髪を茶色に染め上げれば、このままホストクラブで違和感なく働け

るだろう。

御渦は私の視線を払いのけるかのように、トーストのカスがついた手をスーツの裾で払い落とす。

御渦から視線を外した私は、沙耶の事を思い描いた。こうして私たちがのんびりとコーヒートをすすっている間にも、彼女は苦しんでいるのだろう。不安と恐怖に震えているはずだ。一度考えはじめると、腰の辺りがむず痒くなり、すぐにでも彼女の下へ駆けつけてやりたい衝動にかられた。

沙耶の長いまつげが、涙で濡れる。白い頬は更に血の気を失い、人生に絶望している目には力が無い。唇の色も薄く、肌も荒れて、光沢のあった髪も乱れている。そんな彼女の姿が思い描かれる。それでも、彼女は美しかった。

「それで、今日の予定なんだが、良いかな？」

珍しく遠慮気味に御渦が声をかけてきた。まるで、私の夢を見透かしていたようだ。

私は返事の代わりに、御渦の涼しげな瞳をしっかりとみかえず。「昨日も話したが、今日は浅野沙耶と邦夫の母親、戸田夏子に会いに行く。知っているとは思うけど、彼女は再婚して今の戸田姓を名乗っている。二人の子供は新しい父親の籍に入ること拒否して、亡き実父の姓を名乗ったわけだ。その戸田夏子は、現在滋賀県の大津市に住んでいる。住所はある筋から聞いているから、今回も迷うことはないと思ってくれて良い」

ある筋とは、どの筋なのだろうか。私には想像もできなかったが、彼の広い人脈からもたらされたものなのだろう。

彼の人脈という言葉で、私は一人の大きな男を思い起こした。私を警察へと連れて行った、あの山根という刑事である。

「なんだい君、まるで、愛する女性が無実の罪で警察に拘束されているかのような顔をしてるぜ」

彼流の冗談なのだろうが、私はクスリとも笑うことができない。私が睨みつけると、御渦はヘラヘラとした笑みを消した。

「あの、山根いう刑事から、なんか聞いてへんのか？ その、浅野さんのこと」

「ああ、そのことね」

昨日の晩に見た、再放送ドラマの内容を語るような御渦の口ぶりである。腹が立ったが、私は耐えて続く彼の言葉を待った。

「聞いているよ。元気だそうだ」

「それだけか？」

つい声が大きくなり、店内に私の声が響いたが、私たち以外で唯一の客である初老の男は、スポーツ新聞から目を離す様子はみられない。

「もつとこう、なんか、具体的な様子は聞いてへんのかい」

御渦はタバコを一本抜き取り火を付けると、急に真面目な顔に豹変した。

「彼女は、何一つ供述していないらしいよ。彼女が口にする言葉、それは『憶えていない』だそうだ」

勢い良く煙を吐き出すと、冷めかけたコーヒーをすすり、御渦は話を続ける。

「兄である邦夫が自分をあの家に送り届け、十七時過ぎに帰って行ったことまでは憶えているという。しかしその後、犯行時刻を含む約十二時間、翌朝伊藤と篠沢伸子に発見されるまでの間、一切何も憶えていないと言っている。警察はこの供述を、虚言だと見ているがね」

「そんな、彼女はなんらかのショックを受けたんや。そやから、記憶が飛んでるんやないかな。虚言やなんて、あんまりや」

「しかし、考えてごらん。いくらショックを受けたと言っても、その大切な時間を都合良く失っているなんてことあるのかね。僕としてはあまりにも、彼女に都合が良いような気がするんだけどね」

沙耶は現在留置所に拘束されているのだ。どこが都合が良いものだろうか。私には理解できない。彼女が記憶を完全に持っているのなら、今頃は自由の身になっているはずなのだ。

そう考えた途端、私の灰色の脳みそに一筋の光が射した。そうだ。そうなんだ。

「そうや。分かった。浅野さんは、誰かをかばってるん違うか？だから、何も憶えていないなんて嘘を付くんや。彼女にとって、大切な人が不利になるから……」

「さつき君は、『虚言ヤナンテアンマリヤ』と言っていたじゃないか」

御渦は私の口真似が上手かった。

彼の指摘はもつともだったが、私は構わず話を進める。

「自分こそ言うたやないか。『時間を都合よく失っているのはおかしい』って。彼女が誰かを庇っているとしたら、全ての筋が通る。

事件の後すぐに逃げださなかったのも、その庇いたい人物の罪を自分が被るつもりだったんや。でも直前になって、彼女は怖くなってしまう。だから逃げ出した。どうや。そして、その庇いたい人物こそ……」

「止める！」

先に私が出した驚きの声に数倍する、御渦の怒声であった。今度はさすがに初老の男も顔を上げ、私たちの様子を窺っている。

私は蛇に睨まれた蛙となり、吐きかけた言葉を飲み込むしかなかった。

「君の推測には何一つ根拠がない。それは推理ではなくて憶測だよ。自分の都合が良いように事象を構築してはならない。ましてこの事件は殺人事件だ。その犯人は重い罪を架せられることとなる。安易に人を疑うべきじゃない」

御渦の気迫に一瞬圧倒された私であったが、彼の言葉には納得できない。彼や警察は、安易に沙耶を疑っているのではないだろうか。たんなる状況証拠で、彼女を貶めようとしているのではないだろうか。加えて、憶測と言われた私の説は、それほどおかしなものではないだろう。そうだ、あいつが真犯人なのだ。確たる証拠はないが、いずれみつけてみせる。

「そんな嘘でつくられた幸せは、どうせ長続きしないさ。結論を出すのはもう少し先で良いはずだ」

何故か悲しそうな顔で、御渦は私を諭す。しかし私は、彼の言葉の意味が理解できなかった。ただ私は、自分ではじめて描いた事件の道筋に酔っていた。

大阪市内の地下鉄を乗り継ぎ、JRの新快速で大津市へ向かう。

車内で、私はただ流れる景色を眺めていた。朝に分類される時間帯に、大阪から離れる方向の電車は空いている。それでも、殺人事件の話を声高にするのをためらわせる程度の乗客はいた。

窓から視線を外し隣に座る御渦に目を向ける。彼は寝ているように見えた。しかし、ただ目を閉じているだけで、彼の表情は覚醒しているものと同じであった。時々乾いた唇を、赤い舌が濡らしている。しばらくその顔を見てみると、おもむろに御渦は笑い出した。思い出し笑いだろうか、鼻を鳴らすような、小さな笑いだ。私の視線を感じたのだろうか、御渦は薄目を開けて私を見る。

「おかしな事件があるものだね。包丁を持って郵便局に強盗に入って、切手を数枚、額にして七百円相当を奪って逃げた、だってさ。その上、一時間後に自首したとはね。この犯人、何を考えているのか分からん」

話を聞いている私が、分からなかった。唐突に話をはじめた御渦を、私は目を見開いてみつめる。

「ああ、スマン。今日の朝刊を読んでいたんだ。三面記事にくだらない事件があったから、つい吹き出してしまった」

朝刊を読んでいると言っているが、彼の手には新聞がない。それどころか、彼は目を閉じていたのだ。

まだ記憶の自慢なのか、それとも単に私を馬鹿にしているだけなのだろうか。私は悩むことが無駄に思え、彼の言葉を無視して狸寝入りをすることに決めた。

山科で新快速から乗り換え、湖西線を北上する。湖西線とは読んで字のごとく、琵琶湖の西側を南北に走る路線である。私は生まれ

てはじめて乗った。

私は京都で生まれ育ったにも関わらず、隣の滋賀県という土地には数えるほどしか足を踏み入れたことがない。元来が出不精であることに加え、特にこれといった用事がなかったのだ。小学校時分に彦根城を見学したことがあるが、思い出と呼べるような立派な記憶は残っていない。観光や工場地帯、そして最近では京都・大阪で勤める人のベッドタウンとして栄えているという琵琶湖の南東部に比べ、西側は山肌が迫っているせいか、閑散としている印象が強い。車内にも客は少なく、老人が多かったのは、時間帯のせいばかりではないだろう。

ゆっくりと走る電車からの風景も、高い建物などはみえず、穏やかな町並みを思い描くことができる。

歓楽街として有名な雄琴温泉を抜け、私たちが乗る電車は堅田に着く。

駅の周りには全国展開しているファーストフードの店舗も見ることができたが、基本的に人の数が少なかった。

案の定、御渦は駅の中にある周辺地図を見ることなく歩きはじめた。

「バスに乗った方が楽だが、あいにく丁度良い時間帯のものがない。歩いて行けない距離でもないから、このまま行こう」

古錆びたバス停を右手に見逃しながら御渦が話し、そして先を歩く。その後を三四歩後れて、私は続いた。

私は今、自分がどこにいるのか、全く分かっていない。日の傾き具合から、東に向かって歩いているということだけが、辛うじて判断できただけだった。

四月にしては容赦のない日の光が、私の額を焦がしている。五分も歩かないうちに、一筋の汗が耳の後ろに流れた。私はブレザーを脱ぎ、二本の指で肩にかけた。

人は少なくせに、車の数だけが多い。特に大型のトラックが頻繁に走っている。車が吐き出す排ガスの細かな粒子が、汗で濡れる

顔に張り付くのが分かった。このあたりの人間は、おそらく車で移動することが当然なのだろう。歩いて移動する私たちは、奇特的な存在であった。

「まだ、しばらくかかんのか？」

先を歩く御渦に聞いてみる。彼は振り返らずにこたえた。

「これだね、これ。知っていることと、体験することは別ものなんだ。地図上では僅か三キロ弱の距離も、実際に歩くとそれ以上に長く感じる。加えてこの天気。天気予報では滋賀県は曇り、降水確率三十パーセント。湿度は七十。過ごしやすい日になるはずだったんだ」

「何が言いたいんや」

「世の中、思惑どおりに事は進まない、ってことさ」

御渦の言葉はさっぱり分からなかった。暑さと疲労、そして排気ガスのせいで頭がくらくらしてきたため、私は考えることを止めた。どのくらい歩いただろうか。呆然と腕時計を見ると、駅に着いた時点からたった二十分しか経っていない。自分の感覚では、一時間は歩いた気になっていた。

突然私の目の前に、壁が現れた。足を止める間がなく、私はそれにぶつかかった。御渦が立ち止まっていたのだ。

「なんや、迷ったんか？」

「いや、琵琶湖が見えるよ」

御渦の視線の先を追うと、景観は急に開けていた。太陽を浴びた静かな水面が無数に輝いている。

私は、くしゃくしゃに縮まっていた心が広げられたような、そんな爽快感を味わっていた。湖面から流れてくる冷えた風が、汗をかいた体を急速に冷やしていく。

琵琶湖がこれほど広く、そして青いものとは思わなかった。

ここ数日、沙耶と再会して以来の私は、驚き、喜び、嘆き、苦しんだ。以前の私は何に対しても無感動であり、例え世界自然遺産を目の前にしても、木があつて、水がある、としか見る事ができな

かっただろう。しかし今の私は、過敏なほど心が反応する。凝り固まった感覚が、氷解したのだろうか。

「違うよ」

並立して琵琶湖を眺めていた御渦が言った。

「何が、違うねんな」

「彼女と会ったからじゃない。こうして僕と、一緒に見ているから感動するのだよ」

「言ってる意味がわからへん」

気丈に私は言い返したが、内心はうろたえている。御渦は、私の心の中が覗けるようだ。しかし、彼の言動が不可解であったことは事実である。

「何で自分と一緒に琵琶湖見たら感動すんねん。誰と見たって、一人で見たって、見える景色は同じやて」

「違うよ。感情を分かち合う人物がいるからこそ、感動が二倍三倍になったりするんだ。君がこの景色を見て心を震わせているのは、全く僕のおかげというわけだ」

私は呆れ返り、気持ちの高ぶりも急速に萎んだ。結局彼が言いたいことが分からない。自分を売り込んでいるのか、感謝をされたがつているのか、若しくは、私と友達になりたいのか。なんにしても彼は失敗しているのだ。私は、御渦に対して不快感しか抱いていないからだ。まさか、それが目的ではないだろうかと考えたが、あまりに馬鹿らしく、私は苦しそうに笑った。

「さぞかし、綺麗な景色なのだろうね。どんな色が見えるんだ？」

他人事のような御渦の感想に、私は即座に反応する。

「どんな色って、自分も見てるやないか。これ見て、綺麗や思わんの？」

「僕は、色が分からないんだ」

突然の御渦の告白に面食らった。色が分からないということは、色弱だということだろうか。しかし、色弱とは、色の違いを判断し辛い症状であって、色が見えないというものではなかったと私は認

識していた。

「言葉どおりにとらえてもらってかまわないよ。僕は、一切の色を見ることができない。全て白黒だ。生まれつきでね、正直皆が言う『色』という概念が理解できない。ものは濃いか薄いかの違いしか僕にはみえないんだ」

明るい口調のまま、御渦は語った。こんなとき、普通の大人はどのように対応するのだろうか。励ますのか、ただ受け止めるのか。そもそも、そんな症状が有り得るのか、私は知らない。単にかつがれているだけという可能性の方が高い気がした。それでも、からかうような発言を許さない気を、御渦は発していた。

結局、何も言わないことにする。何も聞こえなかつたそぶりです、私は琵琶湖の景色を見つめ続けた。

「ここからは琵琶湖に沿って歩くんだ。戸田夏子の家は、湖が一望できる一等地にあるはずだ。羨ましい限りだね。この景色を毎日堪能できるのだからね。ただ僕は完全な景色を記憶できるから、彼らと同様にいつでも何度でも味わえるのだけれどね。白黒だけだ」

私は黙って御渦の後を歩く。彼の言動をまともに受けるのは、ただ疲れるだけだということを、この数日で私は学んでいたのだ。それでも御渦は一人で喋り続けていた。内容は彼がこれまでに見た美しい景色の話である。白馬の高原、富士山、釧路湿原、那智の滝と、彼なりの解説を交えて語った。色など見えなくとも、景色のすばらしさは理解できると豪語している。しかし、全てが水墨画では飽きるだろうなどと、私は感じていた。容姿、知識、欠点がないように見えた御渦にも、弱点があるものなのだ。私は少しだけ彼に同情していた。

ここで私は、会社のパソコンで営業提案書をプリントアウトしているときの状況を思い出していた。文字だらけの白黒印刷はすんなりと用紙を吐き出すプリンターだったが、グラフを盛り込んだカラー印刷のときは三倍近くの時間を要していた。つまり、色を加えることで、処理速度が大きく減退する。それだけ多くのデータ容量を

必要とするのだ。御渦の場合もそうなのではないだろうか。抜群の記憶力を持ったが故、彼の脳はその色彩を捨てたのではなかるうか。そう考えれば、彼のいつていた記憶を失わないという異常能力は現実味を感じさせた。一度は自ら否定していたが、私は再び信じる、否、疑いはじめていた。しかし、その答えを求める問いを発する勇氣はもてなかった。

そうしてしばらく歩いていると、御渦が一軒の家を指差して言った。

「あれだ。戸田夏子の家」

私たちの前に、黒光りする瓦屋根の屋敷が現れた。白壁の塀は高く、近づく者を威嚇しているようにも見える。私は根拠のない不安感を覚えた。

「さて、どうしたものかな」

目的の家を前にして、御渦はそんな気の抜ける言葉を漏らす。

「何も、考えてへんのか？」

「全くの無策だ」

御渦は何故か偉そうにこたえた。

「戸田夏子は、十中八九、一人で家にいるはずだ。彼女の新しい夫は儉約家だという話は、君も昨日聞いただろうが、これは僕が仕入れた情報とも合致する。夫は買い物などに必要な最低限の金しか妻に与えないのだそうだよ。勿論、お手伝いさんなんて雇っていない。この家も見た目は綺麗だが、夫がその両親から受け継いだもので、ペンキを塗り替えただけの築三十五年の年代物なんだ」

琵琶湖に沿って並んでいる柵の一つに腰かけ、御渦はタバコを啜える。それに火を点ける間だけを空けて、言葉が続けた。

「だから夏子は、遊びに行くだとか、習い事に行くだとか、外へ出かける機会が極めて少ないのだそうだ」

「いったいどの誰から、いつの間に聞いた話なのだろうか。それを問い質す前に、御渦が自ら語りだす。

「戸田夏子の夫、戸田正義という人は、この県内にある木下冷蔵機械という会社の取締役をしている。一般的に木下冷蔵機械という会社名には馴染みがないだろうが、大手家電メーカーに対して冷凍機器製品をOEM供給している会社でね、上場こそしていないが県内屈指の規模を誇るメーカーだよ。業績も上向きだ。僕は偶然その常務と懇意にしているね。昨日電話で話を聞いておいたのさ。戸田正義は僕の知っている常務と敵対する派閥に属しているらしくて、細かな情報を仕入れることができたよ。あの世界は、相手の弱点を

さがすことに躍起になっているからね」

御渦はまた、その顔の広さを使ったようだった。しかし、刑事の一人と知り合いだというのはまだ現実的であるが、一流企業の常務と懇意にしているというのはどうなのだろう。私と同年代ということと考えると、とても信じられるようなことではない。それから、敵対しているという話であるが、同じ会社の役員の個人情報、ペラペラと外部の人間に電話で喋ることがあるのだろうか。

「信じる信じないは、君の自由だけどさ。僕は何一つ間違った情報は伝えていないよ」

私の訝しんでいる顔を見て、御渦は言った。

「問題は、どうやって戸田夏子に話を聞くか、だ。君、何か考えはあるかい？」

急に聞かれても、私には何も思いつかない。私は馬鹿みたいに、首を振るだけだった。

「こんなときは、ストレートに行くのが一番かな」

根元まで灰にしたタバコを袋形の携帯灰皿で揉み消し、御渦は戸田家の門へ大またで歩きはじめる。私は慌ててその後を追った。

立派な門であった。白壁の柱に、黒く変色した表札が見える。『戸田』と力強く太い文字が書かれた表札の下には、インターホンが設置されていた。その更に下には、よくテレビCMでみかけるホームセキュリティの、赤い派手なステッカーが貼ってあり、私は意味もなくうるたえた。まだ法に触れるような悪事は、何もしていない。しかし、隣に立つ御渦が、これまで訪れた先の相手を尽く腹立たせているという実績を考えると、どうしても不安になってしまうのだ。そんな私の逡巡を全く無視して、御渦はインターホンのボタンを躊躇いなく押した。呼び鈴代わりのメロディが流れる。

一分間ほど待ったが、反応は全く無かった。御渦はもう一度ボタンを押す。

更に一分待った後、ようやく動きがあった。

「どなた様？」

低くこもった中年女の声が、インターホンを通して聞こえた。家政婦などいないという御渦の話しを信じるならば、おそらくその声が、沙耶と邦夫の実の母親、夏子なのだろう。

「あなたの娘さん。浅野沙耶さんが殺人事件の被疑者として逮捕された件で伺いました。少しお話を聞かせてもらえませんかでしょうか」
ストリートに行くとは言っていたが、あまりに直球過ぎる御渦の言い回しだ。

加えて、御渦の声は大きかった。インターホンなど通さずとも、家の中にいる夏子に聞こえるのでは思われるほどだ。それは勿論、周囲の家にも響き渡っていることを意味する。これはもう脅迫だった。

「ちよつと、なんなんです唐突に。警察の方ではないんですか？」
「違います。一民間人ですが、京都で起こった殺人事件について、話を聞かせて欲しいだけです」

夏子がうるたえていることは、その声の震えで十分分かった。御渦は、更に大声で追い討ちをかけている。

「あなたの実の娘さんである浅野沙耶さん、彼女が殺人事件の犯人であるといわれていますが、僕の知人がそれは違うと言つのですよ。事件の真相をさぐるために、ご協力してください。話を伺えるのなら、こうしてインターホン越しでかまいませんので」

「ちよつと、ちよつと困ります。すぐに参りますので」

乱暴にインターホンは切れ、代わりにドタバタと家の中で走る音が響いてきた。門の向こう側に見える日本庭園の奥にある玄関の戸が開き、ジーンズにトレーナーという、ラフな格好をした戸田夏子が現れた。彼女はサンダルを履き、我々がいる門の前まで駆け寄った。

「ほんま堪忍してください。近所の目ゆうもんがありまっしゃる。早う入って下さい」

先ず御渦が、そして私が、夏子に引つ張り込まれるように門の中へ入る。そして夏子と共に走り、玄関へ滑り込んだ。五十を過ぎた

女を必死になつて走らせてしまふほど、御渦は彼女を追い詰めたというわけだ。私は罪悪感を抱いた。

「あれほど刑事さんに言うといたのに、マスコミには話さないでくれつて。なんの為の約束なんだか」

玄関に入ると、私たちに聞こえるように夏子は一人呟く。そして私たちと向き合い、毅然とした態度で言った。

「あんたらどこの新聞記者や。それともテレビか？ 私はな、刑事さんと約束したんやで。あの子らのこと何でも話す代わりに、私のことは一切あんたらに流さないつてな。あの子らとはもう名字も違つてる他人やし、何をしようと私には関係ないことや。あんたらが大声出すさかい、仕方なく家に入れましたけど、今からすぐに裏口から帰つてや。まだ表で騒ぐようなら、刑事さんにきてもらいますから。もうこうなつたら世間体も糞もないわ。あんたらのところの会社訴えて、慰謝料がつぱり払つてもらいますわ」

あの浅野沙耶の実母、それは美しく、そして知的な女性であるのだろうと、私は何の疑いなく思い描いていた。しかし、今私の目の前で機関銃のように言葉を発した女は、下品でヒステリックであった。沙耶のように関東のアクセントで話すこともなく、典型的な関西のオバチャンの様を呈している。

「あんた、名刺よこし！」

私の目の前に手のひらを突き付け、夏子は怒鳴る。あいにく、否、幸運にも、私は自分の名刺を持ってきていなかった。もし持っていたら、私は素直に名刺を差し出していたのだろう。それは、新たなトラブルの種でしかない。私の会社と今回の事件は、微塵も関係はないのだから。

「奥さん、我々はマスコミの人間ではありません。沙耶さんの友達です。その、高校のときの同級生です。な？」

突然に同意を求められた私は、機械仕掛けのように首を縦に何度も振った。彼の言葉は、私のことと限定していいことを除けば、正しい。

「ほんまか？」

私は夏子に睨まれる。その勢いに押されながらも、私は出身高校の名と、ついでに担任の名前も話す。それでも、学校や担任の名前は今の時代調べようと思えば調べられると疑う夏子に対して、彼女の親友の名を三人挙げることで、ようやく認めてもらえる格好となった。

「しかし、なんであんたが、首を突っ込んでるんかね。あんた、沙耶と付き合ってた人かい？」

いいえ、と脅えながらこたえかけた私の言葉を遮って、御渦が割り込んできた。

「彼女が警察に逮捕される直前、私たちは沙耶さんと一緒にいたのです。高校時代に親しくしていたこの中井を頼って、彼女は助けを求めてきていたわけです。彼女は私たちに訴えました。自分は何もしていないと。しかしそのときの私たちに、警察の逮捕を阻むだけの力はなかった。無実を訴える彼女を、見送るしかできなかったのです。しかし私たちは、こうして事件の関係者を廻り、彼女の無実を証明できる情報を集めている、というわけです。」

自分が警察に通報したという事実を忘れたかのような御渦の説明であった。つい私は御渦の顔を覗き込んでみたが、彼はなんと涼しげな表情をしていた。

一方夏子は、御渦と私を交互にみつめながら、しばらく逡巡しているようだったが、最後にこう言った。

「とりあえず、上がってちょうだい」

戸田家は外観と同様に、内装も純和風の造りになっている。

私と御渦は客間に通され、濃く熱い緑茶が出された。喉がカラカラに渴いていたが、熱い緑茶は飲み難い。私は口を尖らせて、必死な形相ですすっていた。

夏子は着替えてくると言い残し、二階へと上がったきりになっている。

御渦と二人残されているが、彼と世間話をして時間を潰す気にも

なれない。また、事件の話をする状況でもない。所在無く私は部屋を眺めるのだが、本当に何も無い空間であった。八畳の和室で、私たちが並んで座るその後ろには床の間があるが、壺も掛け軸もない。仕方なく私は、熱い緑茶に息を吹きかけて冷まし、そしてするという作業を繰り返した。一方御湯は、かなりの高温であったにも関わらず、既に茶を一气飲みで呷っている。

「えらいお待たせしました」

戸田夏子が障子をゆっくりと開けて入ってきた。先ほどのラフな格好から、白いブラウスとクリーム色のスカートという、落ち着いたスタイルに変わっていた。

「先ほどはお見苦しい姿をみせまして、えろうすんませんでした。こんな事件が身近で起きて、私も混乱しておりますな。それで、私に聞きたいことって何でっしゃろ」

私たちを出迎えた女と、今日の前に座っている女は別人なのではなからうかと、私は疑っていた。着替えてきたから様相が異なるのは当たり前なのだが、喋る言葉も、表情すらも変わっている。女とは、いくつ歳を重ねても化けるのだと感じた。

「ただもう、あんたら素人さんがどうこうできる状況ではないと思いますかね」

遠い眼をしながら、夏子は言った。

「そんなことはありません。沙耶さんは警察に逮捕されましたが、まだ起訴はされていないのです。お分かりになりますか。逮捕と起訴は違うのです。逮捕して、しばらくの間尋問による自供や承認・証拠集めを経て、検事が十分だと判断した後、ようやく被疑者は起訴されて裁判にかけられるわけです。起訴されるまでの期間は、逮捕されてから通常十日、更に延長が可能でもう十日間、計二十日間という時間がありますが、今回の事件は検事も容易だと考えているようなので、明日起訴されてもおかしくない。そして、この国で起訴されれば、ほぼ百パーセント有罪となってしまうシステムになっています。それは、裁判官が検事の証拠に絶大な信頼を寄せているか

らなんです。検事が有罪と判断すれば、これ即ち裁判官も有罪と判断するのです。これが陪審員制を採っているアメリカならば、裁くのは一般市民でありますから、刑事ドラマのような逆転裁判、つまり起訴された被疑者が無罪を勝ち取るケースが多々あるわけです」

もう一度「つまり」と言つて一度口を止め、御渦は夏子の顔を観察する。彼女が話しについてきているのか確認したようだった。夏子の以前に、私自身がちゃんと理解できているのか疑わしい。

「つまり、私たちは沙耶さんが起訴される前に、真犯人若しくは、沙耶さんが犯人ではないと確信できる情報を仕入れねばならないわけです。今となつてはそれ以外、彼女を捕縛から解き放つ手段はないと言えます」

御渦は沙耶の母親である夏子に向かつて話しているのだが、私は自分に向けられた言葉だと解釈した。正直、刑事事件の司法手順など、私は全く理解していない。単に私は、裁判の場面で、彼女の無実を証明する証言を行うものだと思つて想像していた。しかしそれでは間に合わないという。

「いったい、私にはどれほどの時間が残されているのだろう。」

「時間がありません。さつそくお話を聞かせてください」

唐突に大きな声を出した御渦によつて、私と夏子は同時に驚かされた。二人とも座布団から尻が二センチほど浮いた。

「先ずお聞きしたい。先ほど貴女は、『あの子らのこと、刑事に話した』とおっしゃいましたよね。『あの子ら』の『ら』とは複数形ですよ。貴女は警察に対して、沙耶さんのみではなく、兄の邦夫さんについても質問されたわけですか？」

何気ない一言であり、私は聞き逃していた。これも御渦の記憶力のたまもののだろうか。

「あの、私、そんなこと言つたやろか」

夏子とはばけてみせたが、真摯な御渦の目に射られ、すぐに観念したようだった。

「はいそうです。邦夫のこともようけ聞かれました。事件の日のこ

とだけやなくて、あの子らの生い立ちから、性格、最後には虐待が無かったかなんて、失礼なことかれましたんや」

一度口火を切ると、夏子の舌は滑らかに動きはじめた。

「警察に言った通り教えてあげましょか。先ず邦夫ですわ。あの子は、ほんまに良い子でした。私の言うことに滅多に逆らわず、従順でしたわ。我侬も言わず、勉強も言われる前にしてありましたし、私の手伝いもようけしてくれました。ほんまに、ほんまに良い子。自慢の子ですわ。高校も大学も良い所行ってくれて、近所親戚にも大きい顔させてもらいました。んで、結局お医者様になってくれて、もう言うことありませんわ。小遣いもくれますしね、ほんま、私にはできすぎた息子です」

うつとりした眼差しで、まるで遠く離れた恋人を思うような夏子の言葉であった。

私の目から見るとあの浅野邦夫という男は、どうにも理解に苦しむ人物に映ったのだが、実の母親からすると、可愛くてしかたがないのだろう。確かに邦夫は医者であり、一部の人間からは支持もされている。私のような普通のサラリーマンをやっている人間からすると、明確に人の役に立っていると見て取れる医者という職業には羨望を憶える。

「いたずらをして、叱り付けるなんてこともなかったんですか？」

御渦が質問を重ねると、夏子は少女のように赤面してこたえた。

「そりゃ、小さいときには邦夫もいたずらしましたよ。男の子ですもんね。でも、そんなことすると橋の下に捨てるよ、って叱ると、直ぐに従順になる子でした」

この時点では、夏子の言葉に対して、私は殆ど疑問を抱いてはいなかった。しかし、彼女の続く言葉には、愕然とさせられた。

「んで、次にあの子、沙耶ですわ」

声のトーンが急激に落ちた。同じ母親の口から出た言葉とは、にわか信じられなかった。夏子の顔はあからさまに曇っている。目が細められ、小鼻が膨らんだ。喋ることが苦痛という顔を我々に向

けた。

「あの子には、ほんま、苦労させられましたわ。ちいちゃい頃から我侂放題。あれを買って、これを買って。食べもんでも好き嫌いばっかり。やれ人参が嫌い、ブロッコリーは食べない。勉強なんて何度言ってもせえへんし、家の手伝いも全然したことおまへん。ほんま、あの邦夫の妹かと、いいえ、この私の娘かと、それこそなんべんも疑いましたわ。私ではなくて、夫に似たんでしょうな。もう亡くなってもた人を悪く言うのは気が引けますが、はっきりせえへん、気の弱い、どうしょもない男でしたわ。そんな男に、あの子は似てしまうたのでしょね」

この中年の女は、本当に沙耶のことを話しているのか、私には実感が持てなかつた。私が知っている浅野沙耶と、全く異なつた人物像が語られている。

そして、続く言葉は、更に信じられぬものであつた。

「せやから、あの子があんな恐ろしい事件を起こしても、私はそれほどびつくりしまへんでしたわ」

呆れた。事件の真相は別としても、自分の娘が殺人事件の容疑者として逮捕されたにもかかわらず、それを驚かず、そして疑わない母親がこの世にいてもよいのだろうか。私は怒りを通り越して、ただ呆れた。

「そりや、そりやね、私も何かの間違いであつて欲しいですよ。実の娘ですから、ねえ」

取り繕つたように、慌てて夏子は言葉を続ける。どうやら私は、不快な感情を顔に出してしまつていたようだった。

「ですから、あんさんらが沙耶の無実を証明してらばるなら、願つたり叶つたりではあるんですよ」

妙な間が空いてしまった。夏子自身も、自分の言葉に行き過ぎた表現があつたことに気が付いたようだった。しかし、それは彼女の本心であると思われる。彼女は沙耶を愛してはいないようだ。

「それでは次に、邦夫さんと沙耶さんのお父さんである、亡くなつ

た浅野雅夫さんについて教えてくれませんか？」

「あの人のこと？ そんなん、今回の事件と関係ありますん？」

「ええ、様々な事象が関連していると考えています」

「かまいまへんよ。沙耶が助かるんならねえ」

わざとらしい言い回しであった。常識という台本に書いてあった、白々しい台詞に聞こえる。

「あの子らの父親、雅夫は三年前の夏に亡くなりましたんや。享年、たしか五十三やったかな。ええ、死因でつか？ ほんま、しょうもないですよ。あの人、家の中で、階段踏み外しよったんです。ほんま、運動神経のない人でしたわ。会社休みの日で頭ボーとしてたんでしような。上から下まで転げ落ちて、そりゃ大きい音がしましたよ。それで頭打って、私はすぐに救急車呼んだんですけど、打ち所悪くて、意識失のうたまま、その三日後にあっさり死んでしまいましたんや」

隣に住む他人の話のように、夏子は淡々と亡夫の話をした。

「働き盛りのときでしょ。私は悔しゅうてね。子供の手も離れ、ようやく楽できるゆうときに、コロナと先に死なれてしもうて。幸い邦夫がもう病院で働きはじめてくれていたんで、家計はなんとかやりくりできましたよ。沙耶？ あのとときの沙耶はまだ学生で、遊び呆けている頃で、あの人亡うなった日も、海外旅行へ行つてましてな、連絡とれんで、通夜も葬式も出んかったんですよ。ほんま、親不孝な娘ですわ」

「その、雅夫さんが階段を転げ落ちたとき、邦夫さんは家にいたのでしょうか？」

「それ、どうゆう意味ですよ」

「いや、息子さんを疑っているのではなく、邦夫さんはお医者さんなので、応急手当などできなかつたのだからかと思ひまして」

「邦夫はいましたよ。でもあの子の専門は神経内科なんでね、事故のときはなんもできしまへんでした。でも、あの子はあの子なりに父親を気遣ってましたんよ」

年甲斐もなく、夏子は頬を膨らませてこたえた。

「あの、先ほどから気になっていたんですが、夏子さんはこちらの言葉を話されるんですね。しかし、沙耶さんと邦夫さんは、関東の言葉を話されていたようなんですが、その辺の事情を教えてくださいませんか」

「ああ、ちよつと複雑なんですね。私はこつちで生まれそ育ったんですが、若い頃東京に働きに出てたんです。そんで向こうで、雅夫と知りおつて、結婚することになるんですが、私の実家が、京都で古い和菓子屋やってましてね。私一人娘でしたさかい、三男坊だった雅夫が婿にきてくれるゆうことで話がまとまったんです。一旦二人でこちらにきて、雅夫は和菓子職人の修行をはじめたんですが、あの人手先が不器用でね、私の父親に四六時中叱られてたんです。そんで、どうにも我慢できないということになって、あの人家出したんですわ。ちよつどその頃私のお腹の中に邦夫が生まれてね。父親のない子にしくなかつたんで、私は雅夫について家を出たんです。ほいで結局、あの人の実家がある横浜で雅夫は電材卸の会社に再就職しまして、邦夫が生まれ、沙耶が生まれたんです。それからしばらくは、平凡な暮らしを続けてました。けど因果なもんで、あの人八年前に京都へ転勤になりましたね、また家族でこちらへ戻ってきたというわけなんです。その頃には夫と仲の悪かった私の両親も他界してましたよ。で、私も向こうでは関東の言葉喋ってましたけど、こちらに戻ってからはすぐに地の言葉が戻ったんです。夫と子供たちは横浜で過ごした時間の方が長いせいか、こつちの言葉は喋らんのですわ」

何故にこの夏子だけが関西の言葉を話すのか、納得がいった。しかし、それが今回の事件に関わりがあるのだろうか。私には御渦の質問の意図が測れない。

「話を戻しましょうか。夫雅夫さんが亡くなったが、邦夫さんが家計を支えてくれたので、苦勞はなかった、ここまでお聞きしましたよね。それ以前の話をお聞かせてもらえませんか。貴女と雅夫さん、

そして邦夫さん、沙耶さん、家族が全て揃って暮らしていた頃の話です。雅夫さんが亡くなるまでの、平和なときの話を……」

御渦が問うた時期とは、私と沙耶が同じ学び舎で同じ時間を過ごした頃のことであろう。私たちの誰もが、自分の夢を叶えられると信じて疑わなかった、光り輝いていた時代である。その中で、沙耶の輝きは一段と強いものであった。

「家族が皆、揃っていた頃、ですか？」

訝しげな顔で夏子がこたえる。御渦の問いも不可解ではあるが、こたえるのに顔をしかめるような問題でもないだろう。

「ええ、ええ、やっぱり幸せな頃ですわ、ね」

夏子の言葉は、滑らかには出てこなかった。

「そうですね。でも、その頃の話言ってもねえ、何を話してええのか、わかりませんわ」

「例えば、家族揃って旅行に行った話だとか、何か事件があったり、もめごとがあったり、何でもかまいません」

そうですねー、と言ったきり、夏子は固まってしまった。確かにこたえにくい、漠然とした質問であろう。私が同じ質問を受けたとしても、すらすらと事柄を挙げることは難しい。何しろ四年以上前の話である。私は、修学旅行の内容すらはつきりと思いつけない。

「そうですね。家族旅行なんてしたことありまへんでしたけど、邦夫が大学に合格したとき、盛大にお祝いしたのはよう憶えています。毎晩遅うまで勉強してましたからね。それから、あの子、医大に入つてすぐ、バイクで事故を起こしましたんや。そのときはもう、心臓止まるかと思うほど心配しましたわ。幸い、大きな怪我をするともなかったんですが、もうバイクは禁止させました。それから、大学二年の頃ですかね。邦夫に付きまとう変な女が現れましてね。同じ大学の娘ですわ。今で言うたら、ストーカー言いますんか。家の方にも押しかけてきて、私はノイローゼになりかけてましたわ。あの子は全然興味ないのに、しつこく付きまとうんです。最終的には警察にも相談したんですよ。結局警察はなんもしてくれしません

ので、私が直接言っちゃったんです。私、大学まで行ってきて、食でその娘みつけまして、他にも学生がいっぱいいる中、大きい声で言っちゃったんです。うちの子あんなのことなんとも思っておりません。もう近づかんといってくれますか、って。あの娘目丸くして驚いてましたわ。あれはホンマ、爽快でしたな」

大きな口を開けて、夏子は高らかに笑った。

「邦夫さんは、女性に人気があつたんじゃないですか。そのストーカーまがいの人以外には、恋人などいなかったのですか？」

「いえいえ、あの子は、勉強ばかりしていましたからね。女気はなくて、このまま結婚もしないんじゃないかと、心配してますんや」
本気で危惧しているとは思えない、明るい顔で夏子は言う。

「ありがとうございます。なんだかプライベートな質問ばかりしてしましまして、失礼いたしました。最後に一つだけよろしいでしょうか。貴女の再婚に対して、邦夫さんや沙耶さんは、反対しませんでしたか？」

「ええ、邦夫も、それから沙耶も、特に反対はしませんでしたよ。もう二人とも大人でしたから、私には好きなようにせえ、とのことでしたわ」

再び、夏子は笑う。低く響く、下品な笑い声だった。私は唐突に、吐き気がするほどの不快感を覚えた。彼女の笑い声がそうさせたのか、他の理由があつたのか、この家にいる時点では気が付かなかった。

「それでは、貴女が家を出るに際しても、浅野家では大きな変化がなかったわけですね」

「そうです。寂しいくらいでしたね。特に邦夫なんて、私にべつたりでしたから、もっと悲しんでくれそうなものでしたけど、あっさりしてましたわ」

「沙耶さんはどうです？ やっぱり、反対しませんでしたか？」

「あの子は、私に対して無関心でしたからね。なんとも思わなかったんところがいますか」

「確認します。貴女が再婚なさるとき、沙耶さんはもう京都に帰ってきていたのですか？」

「ええ、帰ってきていましたよ。その、沙耶の友達なら知っているのでしょうか、あの子、お酒に溺れている時期でしたから、邦夫が強引に連れて帰ったんです。ホンマ、妹にも優しい良い子ですわ」

「沙耶さんが家に帰ってくるのと、貴女の結婚話が決まったのは、どちらが早かったんでしょう？」

「そないなこと、細かく憶えていませんけど、私の結婚話の方が早かったと思いますよ。なにしろ、求婚されてから入籍まで、ゆうに一年はかかっていますからねえ」

「分かりました。今日は本当にありがとうございます。沙耶さんのことは、我々にお任せください」

「そうですか。そりゃ、よろしゅうたのんます」

まるで他人事のように、戸田夏子は深々と、社交辞令として頭を下げた。

戸田夏子の家を辞し、私たちは来たときと同じ道を辿って堅田の駅まで戻ってきた。日差しは弱まることなく、私は更に体力を消耗することになった。御渦も表情は平生を保っているが、そのシャツの背中が、汗で濡れている。

「ええ時間やし、飯にしよか」

珍しく私が口火を切り、店をさがすことになった。しかし、お昼時という時間帯のせいで、目ぼしい定食屋やラーメン屋は客で埋まっていた。唯一、駅前のファーストフード店はテイクアウトの客が多いからか、席に余裕がみられた。

食欲はなかったが、喉は渴いていた。私はLサイズのコーラと期間限定のバーガーを注文し、先にテーブルに座る。御渦はなにやら時間のかかる品物を要求しており、カウンターの中年女性を困らせていた。大阪市内で同じチェーン店に入ったら、どこも若く綺麗な女性が働いているが、この店は高校生以上の子供がいるであろうと思われる年代の女性しかいなかった。どんな年齢であっても同じカラフルな制服を着なければならぬというのは、ある意味残酷に感じられる。店長とみられる若く痩せた男性は、そうした年配の女性たちにあごで使われているようにみられた。

巨大なカップに注がれたコーラを半分ほど飲んだ頃、ようやく御渦がトレーを持って私の前に座った。

「冗談じゃないよ。僕が愛していたジュシーえびたまバーガーがもう取り扱っていないなんて言うんだよ。だからこうしたファーストフードは嫌いだ。気に入ったメニューがすぐになくなっちゃう」

嫌いだと言いながら、御渦はバーガーの包を二つ、他にフライドポテトとナゲットをトレーに山々と載せていた。ドリンクは私と同

様、Lサイズで注文している。その中身はうかがい知れないが、御渦はストローを使わず、カップから直接ぐいぐいと飲みはじめた。そして、氷を口に含みバリバリと噛み砕く。

「戸田夏子の印象は、どうだった？」

「続いてバーガーをほお張りながら、御渦は急に本題に入った。

「どうって、言われてもね」

「私も包みを破り、湿ったパンにかぶりつく。

私の思考は混乱していた。沙耶の実母がイメージと乖離していたこと、そして浅野一家の経緯。今回の事件とこれらの情報は、どのように繋がるのだろうか。一本の筋が通りそうに通らない、霧がかかった状態だ。

「僕の印象を話そうか。彼女は、息子の邦夫が好きで仕方のない人だね。そしてその反面、娘である沙耶には、関心を持っていない。

親の形として、これは異常なことなのだろうかね。僕の知識の範囲では、これほど子供を対極として扱う例は、極めて稀だよ」

「そんなこと、改めて言われなくても分かっている。

「実を言うとな、僕はもう、事件の全貌が見えたよ」

「バーガーとフライドポテトを同時にほおばりながら、唐突に御渦が口にした台詞は、私を硬直させる。彼はついに、真犯人へと辿り着いたのか。先ほどの戸田夏子との面会を経て、その確信を得たというのか。

「浅野邦夫、彼はおそらく境界例だ」

「キョウカイレイ？」

「そう、人口に対して二パーセントほどの比率で発生する人格障害だ。ポーターラインとも呼ばれている。情緒不安定で、リストカットを繰り返したり、アルコールや麻薬に溺れることが多々ある。ともかく、人間関係が不安定になりがちで、二者関係に執着することが特長だ。リストカットや麻薬であれば周囲に分かりやすいが、表面上は正常で、自分自身でもこの人格障害であると気付いていない例も多い。邦夫はこの境界例の中でも、依存強化型に分類できるだ

ろ。弱者に対して献身的な姿勢をとおすが、実はその反面、自分が頼られることで相手に依存しているというやつだ。邦夫はアル中の妹の面倒を見ているようでいて、実は自分が見捨てられることを回避しているんだ。アルコールから回復させようと口では言っているが、実際には家にウイスキーなどを置いて、彼女が自然とそれを口にするように仕向けている。妹がいつまでも自立しなければ、それだけ兄としては頼られる。頼られているうちは、決して自分から離れては、つまり捨てられることはないからね」

「その境界例というやつは、生まれつきの病気なんか？」

「いいや。成長過程において、母親との関係が適切に構築されなかった場合に発生すると言われている。母親が子供の自立を喜ばなかったり、自立を妨げたり、または見捨てるといふ脅しを子供に頻繁に強いることで発症するようだ。戸田夏子は、明らかに邦夫の自立を妨げており、見捨てるといふ恐怖心を弄んだ教育を行ってきた」

「そ、そんで、事件の全貌で、どないやねん。その境界例というやつが、関係しとんのか？」

私は期待した。邦夫が精神を病んでいるが故に、今回の事件の真犯人であるということに。しかし御渦の口からは、私を突き放す言葉が吐き出された。

「なんだい、僕に教えて欲しいのかい？ 厭だね。僕は決してそれを語らない。これは僕の事件ではないんだよ。君の事件さ。君が解決しなければならぬ。僕はあくまで、君の手伝いをするだけだよ。事件の真相は、君が自分の手で解明するんだ」

なんとという意地悪な男だろう。真相が分かったのならば、話してくれてもいいだろうに。御渦はそれつきり食事に夢中となり、無駄口一つ、厭味一つも話そうとしなかった。

私には、青臭い十代のような反骨精神が宿っているようだ。御渦に冷たく突き放されることで、妙なやる気が起こった。

私は食べかけのバーガーを持ったまま、この事件の全体像を思い

描く。

はじめに、何があったのだろう。私と沙耶が再会したことが始まりだったか。そうではない。事件はそのとき既に終了している。私は、エピソードでようやく登場する端役なのだ。

事件は、私が沙耶と再会した前日に起きている。しかし、その原因をさぐるには、更に時間を遡らねばならない。数日、数ヶ月、いや数年だ。

御渦がヒントをくれている。彼が関係者に問いただした内容を思い出せ。私は彼のような完璧な記憶力を備えているわけではないが、ここ数日間の会話を想起することぐらいは可能だ。

先ずは誰からだ。最も古い話を語った人物。そう、ほんの数十分前に会ってきた、戸田夏子である。

彼女の話をもとめると、次のようになる。

- 一・邦夫は聞き分けの良い子供だった。
- 二・沙耶は言うことの聞かない悪い子供。親の目から見て、殺人事件を起こしても不思議ではない子供。
- 三・邦夫と沙耶の父親は、三年前に他界。死因は家の中で階段から転げ落ちたこと。
- 四・父親亡き後、邦夫が家計を支える。夏子の記憶には邦夫しかない。
- 五・邦夫には恋人がいない。(夏子が邪魔をした?)
- 六・一年前に夏子は再婚。その際、二人の子供は反対しなかった。
- 七・夏子が再婚を決めた時点では、沙耶は京都へ帰っている。

これらは無論、夏子の視点からでの話としてである。

これに、事件直前までの情報を加える。私が沙耶から直接聞いた話と、御渦が警察関係者から仕入れてきた情報、そして昨日出会った人々の話を集約したものとなっている。

- 一・沙耶は無職であり、邦夫に養ってもらっている。
- 二・沙耶には婚約者があり、その母親からは疎まれていた。
- 三・沙耶はアルコール依存症である。
- 四・邦夫は沙耶の結婚に概ね協力的であった。

これらの情報をまとめると、浅野邦夫という男の存在がはっきりとしない。御渦は彼が境界例という人格障害であると決め付けているが、聞いた限りでは邦夫は妹の結婚に協力的であったのだ。沙耶を篠沢の家まで送迎していたという事実がある限り、単純に境界例として沙耶に依存していたと結論付けてよいものか。

ともかく、事件に至るまでの、浅野家の背景は以上で語ることができる。

次に、被害者である篠沢誠一の周辺状況をまとめてみよう。

- 一・被害者である篠沢誠一は凡庸なサラリーマンであり、その周辺にトラブルはなし。
- 二・その母伸子は、女手一つで息子を育て上げ、息子を誇りに思っていた。
- 三・伸子は息子の婚約者である沙耶に好意を持っていない。しかし、その兄邦夫に対しては、医者という肩書きが気に入っていた。
- 四・母伸子も再婚の話があった。再婚相手である伊藤重信と誠一の関係も良好である。

以上が、事件関係者それぞれの背景である。

次に、事件当日、犯行時刻の、それぞれの動きを見てみよう。

四月十日事件当日。

十七時頃、沙耶は兄邦夫が運転する車により、篠沢家へ到着する。尚、邦夫の車は大変にやかましいものだ。母伸子対策として同行していた邦夫であるが、伸子の不在を知ると早々に立ち去っている。

その時刻は十七時三十分前後。

そして、篠沢誠一が殺害される午前零時を迎えることとなる。

犯行時刻の前後一時間ほど、近隣住民の話によれば、誰も篠沢家を訪れていないし、出て行ってもいない。ただ、私としてはこの情報を信用していない。例えば隣に住んでいたとしても、その住民が入りすることを逐一確認し記憶することは、今の時代では考え難い。加えて、当日は大雨が降っている。これは単に、派手な出入りが無かったということなのだと推測できる。つまり、ひっそりであれば、否、派手ではなければ、人の出入りは可能だと思われる。

では、誠一殺害時前後における、関係者の動きを見てみよう。

先ず、篠沢誠一の母伸子、彼女は自らが経営するスナック『故郷』にて、客の相手をしていた。それは客と従業員が証言しているのだという。数分間ならば店を抜け出すことは可能だろうが、片道十五分を必要とする自宅までを往復する猶予はない。

次に、伸子の恋人伊藤重信。ラーメン屋を経営。営業時間は二十四時までで、習慣としてその後清掃と翌日の仕込みで一時間を費やす。伊藤は午前一時に店を出て、篠沢伸子の店へ向かう。その日も伊藤は一時過ぎに『故郷』へ現れた。本人談によれば、閉店間際の二十四時近くまで客がいたとのことであるが、それを証明する人物は出てきていない。つまり、犯行時刻の午前零時前後のアリバイは無い。ただ、彼が篠沢家を訪れるためには車が必要になるのだが、伊藤は運転免許も車も持っていない。必然的に協力者の存在が求められることになる。協力者がいれば伊藤の犯行は十分可能であるが、知る限り、彼には篠沢誠一を殺害しなければならぬ動機がない。

浅野邦夫の行動はどうだろう。彼は妹の沙耶を送り届け、その後帰宅して外出はしていないと主張している。邦夫のアリバイは、二十三時を回ってからかかってきた電話で、一応成立しているようにも見える。電話の主は彼の実母戸田夏子だった。そして五分で電話は切られる。彼の荒い運転であれば、数十分で浅野家までの距離を往復することは可能である。しかし、騒々しい彼のオーディオを使っ

たことは考えられない。あの車は目立ちすぎる。邦夫の家と浅野の家、双方比較的住宅地にあるのだ。誰一人気付かないわけがない。彼の場合でも犯行に及ぶためには、協力者の存在が必要になるよう思われる。

そして、問題の沙耶である。彼女は兄に浅野の家に送り届けてもらった後、翌朝、篠沢伸子に発見されるまで、行動が全く不明である。彼女自身の証言によると「憶えていない」のだそうだ。そんな都合のよい証言を、警察がまともに取り扱うわけもなく、彼女は今も被疑者として留置されている。彼女にもまた、篠沢邦夫を殺害しようという動機はない。何しろ二人は、これから結婚しようとしている間柄なのだ。篠沢誠一が死ぬことで、最もダメージを受けてよい人物の一人である。ただ、彼女は死体と同じ部屋に居るところを発見された後、その場から逃亡している。御渦によると、彼女は伊藤重信により、半ば強引に逃亡させられたのだという。伊藤の意図は未だ不明だが、このことから、沙耶の無実を私は信じる。

ともかく、事件の全貌を知る立場であるはずの沙耶が、全ての時間を浅野家で過ごしている沙耶が、何も憶えていないと主張しているせいで、誰も真相を知ることができずにいる。唯一御渦という男が、事件の全貌を理解したと主張しているが、どこまで当たっているのかは疑わしいものだ。

「事象を複雑にすることはしない。全てのピースはもう揃っている。後は素直に、それを当てはめるだけさ。先入観を取り払うことが大切だ」

二つ目のバーガーを平らげ、御渦は油まみれの手と口を紙ナプキンで拭いながら喋る。

本当なのか。本当に、もう事件を構成する情報はないのだろうか。これが限界なのか。私は、全てを集め尽くしたのだろうか。これで本当に、彼女を救い出すことができるのだろうか。

「まだ、時間はあるよ。そうだね、後四日は猶予があるだろうか。その間、ゆっくり考えれば良い」

御渦は食後の一服に火を点す。そのタバコの先で軽快に叩かれたアルミ製の灰皿が、ゆっくりと半回転して止まった。

「そうだ、一つだけヒントを加えてやろう。この事件のキーワードは『記憶』だ。浅野沙耶が唯一証言している言葉を思い出せ。あの言葉が、事件を解決させる鍵になる」

一方的に語った後、御渦は完全に沈黙した。もう、タバコと景色しか楽しんでいない。私の存在など忘れてしまったかのように、窓の外へ視線を向けたままになっている。

例えヒントをもらっても、今の私にこのパズルが解けるとは思えなかった。色々な情報が、噛み合うようで噛み合わない。

私の苦悩など無視するように、御渦はただ立ち上がった。そして、挨拶もなしで、一人店を出て行った。

その後一時間私は一人店に残り、事件の解明を試みたが、結局こたえを出すことができなかった。御渦が言うとおり、まだ時間的な猶予がある。私は思考の焦点を、明日も休みをもらう理由へと切り替えていた。

時が過ぎる感覚が麻痺していた。気が付くと、カーテンが輝きはじめており、私は夜が明けてしまったことを知った。結局、昨日から一睡もせずに事件の真相を考え続けたが、何一つまともなこたえは出せなかった。否、こたえは出るのだが、それは私が求めるものではなかった。つまり、私が愛する人が犯行に及んだ、というものだ。これが、最も辻褃が合ってしまう。当然だろう。彼女は他殺体と共に密室の中で発見されたのだから。

普段起床する時間を迎え、ベッドの脇に置いた目覚まし時計がけたたましい電子音を発した。私は乱暴にそれを掴み、壁に向かって投げつける。電池の蓋が外れ、目覚まし時計は停止した。

静かになった部屋に、空気が抜けるような音が響く。何かと思えば、何度目か数え切れない己のため息だった。

カーテンを引くと、朝日がこぼれ、目の奥を殴りつけられたかのような痛みを感じた。痛みに耐えながら狭いベランダへ出て、しばし呆然と外の景色を眺める。視界に駅へと急ぐ紺色スーツの群れが映り、今私が最低限しなければならぬことを思い出させた。

緩慢な動作で受話器を手にし、会社の番号をプッシュする。案の定、上司は既に出社しており、私の電話に不機嫌な声で応答した。私は一方的に休暇願いを申し立て、電話を切る。三日連続の休暇願は、上司の怒りよりも呆れを買ったようだった。

インスタントコーヒーと湿気たビスケットで簡単な朝食を済ませ、ジーンズとトレーナーという楽な服装で私は家を出る。目的地だけは決まっていた。西長堀にある大阪市立中央図書館だ。書物などからこたえが得られるとは考えていないが、一人で堂々巡りをしていくより少しはましだろう。

地下鉄を乗り継いで到着した図書館で、先ず私は各階に設置されている端末により蔵書の検索を開始した。元より、目当ての書物などない。パソコンを前にして、私はしばし呆然とたたずんだ。立つたままの姿が滑稽だったのか、それとも貧相な服装のせいか、隣の端末を操作していた大学生風の青年が、私を見てうつすらと笑った。いくら笑われようと、私は一向に気にしなかった。私は立ったまま、この数日間目にした物、耳にした言葉を思い出していた。

赤いスニーカー、彼女が好んだ酒とタバコ、彼女が着替えたキヤミソール姿、寂れたビリヤード場、暗い部屋に溶け込む沙耶、翌朝の日の光、大阪城公園の散歩、御渦と出会った喫茶店、警察の車、取調室の臭い。

被害者の葬儀風景、伊藤の戸惑い、邦夫の評判と豹変。

戸田夏子の半生と、子供たちに対する感情。

様々な風景を思い浮かべ、最後に一つの単語が心に残る。

『記憶』

御渦が言っていた、ヒントとなるキーワード。

使い古され少し黄ばんだキーボードへ向かい、私はその短い言葉を入力する。

検索された書物の数は四百を超えた。限られた時間において、それら全てを読むことは不可能だろう。しかし私は充血した二つの目を更に酷使し、情報の取捨を開始した。できる限り、記憶に関する本を読んでやろうと決めた。

記憶、損傷、時間、エピソード、手続、意味、海馬、シナプス、グルタミン酸、喪失、興奮、衝撃、増進、錯誤、減退、全生活史、一過性。

いったいどのくらいの時間を、その図書館で過ごしたのだろう。

何日にも思えるし、たった数分のようにも感じられる。実際には十時間弱であった。私はその間、水を飲むこともなかった。これほどの集中力を保てたのは、人生ではじめてのことだろう。途中、司書が必死の形相でいる私に対し、記憶に関しての本を数冊推薦してくれたことを除けば、私は全神経を活字を追うことに集中させた。この時間に比べれば、大学の受験勉強などはテレビをみながらラジオを聴いているような、中途半端なものであった。

私は、目の前に積まれた本の山に目を向ける。その山の中の一つが、私にこたえを教えてくれた。確か、この司書が推薦してくれた本の一冊だった。ここにきたことは正解だった。目的は果たせた。立ち上がると目眩を起こし、私は膝をついてその場に座り込む。すぐに館内を巡回している警備員が声をかけてきた。どうやらそれ以前から、鬼気迫る表情の私を意識していたようである。大丈夫かどうか聞かれたような気がするが、私はそれを無視する形で図書館を出てしまった。机の上の本を片付けることも忘れていた。

まるで、砂漠を三日間放浪した後のような勢いで、私は自販機から買ったスポーツドリンクを喉へと流し込んだ。改札の隣にある売店の女が、不審な顔を向けている。私はその女を睨み返す。普段の私は決してそのような行動はとらない。このときの私は、明らかに興奮状態にあったのだ。女は途端に、陳列された雑誌の整理をはじめた。

空き缶を乱暴に屑かごへ投げ込み、私はホームに向かう。

白線に沿って立ち、電車が入ってくるのを待った。

こうして電車を待つときはいつも、私は自分の死を思い描いていた。自分の将来に、何一つ希望を見い出せなかったからだ。

しかし今、私は喜びに満ち溢れていた。普通ではなかったが、思う人と再会した。彼女には婚約者がいたが、その人も今は亡き人だ。そして何より、私は彼女が抱える、おそらく彼女の人生において最大の問題であろうこの事件を、解決する糸口をみつけたのだ。

肺の奥底より、笑いが湧き上がってきた。必死でそれを噛み殺そ

うとしたが、堰を切って飛び出した。

幸い、電車がホームに入る瞬間と同時に起きた哄笑である。下品な私の泣き笑いは、ホームに満ちたアナウンスによりかき消されていた。

彼との出会いの場であり、私にとって事件の始まりの場所である喫茶店『カンザス』に向かっていた。

私が出した結論、この事件のこたえを誰かに話さなければならぬ。その相手を思い描いたとき、私の脳裏には一人の人物しか現れてこなかった。警察に駆け込むことも考えてみたが、相手にされないことは目に見えていた。結局私は、あの男に頼るしかないのだらう。

しかし私は、彼との連絡手段を持っていない。電話番号も聞いていない。これまではいずれも、その前日に約束した時間に待ち合わせるという手法で合流していたのだ。彼の部屋に行ったこともあるが、あの何もない部屋にいつもいるとは考えられなかった。

彼を捕まえる唯一のあてが、この喫茶店であった。

時間は夜の七時に迫ろうとしている。夕飯時に、この店のようないろいろな物販を売りにする昔ながらの喫茶店には客がいない。それは、曇りガラス越しに外から見ても分かっていた。

派手なベルの音を奏でて戸を空ける。やはり店内は閑散としており、大半のテーブルには客がいない。私は店の奥へと目を向ける。そこに、大きな影をみつけることができた。紛れもない、御渦であった。

御渦はハードカバーの本を眺めていた。そして彼はゆっくりと顔を上げ、私と視線を合わせた。驚いた表情は窺えない。彼は、早く座れと言つかのように、自分の前の空いている椅子を指差す。そしてこう言ったのだ。

「わりと早かったじゃないか」

私は確かに、彼がこの店にいることを期待してやってきていたが、

全てを見透かされたような気がして不快だった。

「ここで、何しとんや」

「何しとんや、とはご挨拶だな。君を待っていたんだよ。それ以外にないだろ？」

「ここへきてあがいても仕方がない。私は御渦の前に荒々しく座った。

「いつから、待ってたんや？」

「一時から」

じつに六時間以上、彼はここで待っていた計算になる。私がここへやってくることは見抜いていたが、そのために長い時間を無駄にさせたことを思うと、後ろめたさと同時に密かな喜びを感じていた。「話を聞く前に、何か食べたまえ。どうせ、朝から何も食べちゃいないのだから」

その辺りも見透かされている。厨房の方から、ベーコンを炒めた香ばしい香りが漂ってきた。途端空腹を覚え、軽いめまいを感じる。私も何か注文しようと、テーブルの隅に立ってかけられているメニューを手に取るうとしたとき、我々のテーブルに湯気の立つベーコンサンドが運ばれてきた。

「こちらでよろしかったですか？」

マスターは御渦の顔を窺いながら、私の目の前にその料理を置く。「そろそろくる頃だろうと思っただけ、先に注文しておいたんだ」

ふっくらとした白いパンに、カリカリに焼かれた厚切りベーコンがたっぷり入ったレタスと一緒に挟まれている。バターとケチャップが溢れ出すほど塗りこまれており、私は唾を飲んだ。

「食べるよ、と言うかのように御渦は料理を指さした。

結局、この男には敵わない。

私は諦めに似た感情で、そのサンドイッチにかぶりついた。

食事が終わる頃には、ご丁寧な熱いコーヒーが運ばれてきた。私が最後の一切れを口に入れるのを見計らってから、御渦はタバコに火を点ける。

そんな悪習には興味がなかったが、上手そうに煙を吐き出す御渦の姿を見ていると、その有害物質がとても魅力的なものにみえてしまう。サンドイッチで腹が膨れたせいだろうかと思われる。

御渦は目聡く私の心情を察知し、箱を振り一本のタバコをこちらへ向けた。

一瞬躊躇したが、私はそのタバコを箱から抜き取る。恐る恐る啜えたときには、もう御渦がマッチを擦って火をかざしていた。吸い込みながら火を点けるということを知らない私は、タバコの先端を大いに焦がした。そして、案の定盛大にむせこんだ。

笑うことなく、御渦は優しい目で私をみつめている。

「こんなときは勢いが大事だ。酒も飲むかい？」

私は、涙を浮かべながら首を振った。咳き込みはなかなか止まらない。やはりタバコは体に合わないようだ。私はまだ十分長いタバコをガラスの灰皿で揉み消した。コーヒーを流し込んでみたが、喉の奥に残ったタール味はなかなか消えそうになかった。

「それで、今まで考えてこたえは出たのか？ その清々しい表情から察するに、今回の事件が、ようやく解明できたようだけど」

完全に上から見たものの言い方で、御渦が聞いてくる。そんな御渦の態度を笑顔で受け返す余裕が、このときの私にはあった。もう劣等感はない。私は既に、彼と同じ段階に登っていたからだ。

「ああ、分かったよ」

心の余裕がそうさせたのか、こたえた私の口元は自然と微笑んでいた。

御渦の表情が途端に曇るのを、私は見た。

彼としては意外だったのだろうか。自分だけがみえていた景色を、他の人間がみつけることができたということ。

「君、本当に分かったのか？」

念を押すように、御渦が聞いてくる。

「ああ、分かったって。分かってしまえば、簡単な事件やな」

「そうさ。事件は、とてもシンプルだ」

そこで、私たちは互いに少し笑った。私は心から笑ったつもりだったが、御渦の顔は違っていた。昨日までの自信に溢れた目の光は失われ、今は不安と悲しみが窺える。事件の謎を解いたものが、自分以外に出現したことが、それほど不思議で、悔しいことなのだろうか。

「そこで、あなたに頼みがあるんやけど、ええかな」

「頼み？」

時間と共に、御渦の目に浮かんだ悲しみの色は、濃くなるばかりであった。今にも泣き出しそうな、そんな弱々しさが感じられる。

「今回の事件の関係者を、一堂に集めて欲しいんや。篠沢誠一が殺害された時間前後に関わった人間を全てだ。勿論、浅野沙耶さんも含めて」

「ちよつと待て、君、関係者を集めて、何をする気なんだ？」

この男もつろたえることがあるのだなと、私は驚いていた。

「関係者を集めて、この事件を解明するんやないか。皆の前で、アイツがしたことを、アイツが誤魔化そうとしたことを、話してやるんや」

御渦は長い間私の目をじつとみつめ、深く考え込んでいる。

「なんのために、そんなことをするんだ？」

考え込んでから、ようやく御渦の口から発せられた言葉は、空虚な問いかけであった。

そして、唐突に私は疑問を感じた。御渦という男、何もかも知ったような素振りを今までみせていたが、実は何一つ分かっていないのではないだろうか。

彼の記憶力は確かに驚くべき能力かもしれないが、記憶の容量と論理的な思考能力は、比例するものではないのだろう。

彼は知らないのだ。

事件の断片的な情報はこと細かく持っていたが、それを組み合わせることができていないのだ。

私はようやく彼と同じ景色を見ることができたと思っていたが、

実はその先の景色まで見ていたのだった。

「関係者を集めるの、無理なんか？」

私の態度は、自然と高圧的なものに変化していた。自分は知っている、相手は知らないという状況。それがこれほどの優越感を与えるものだ、改めて知った。

「無理じゃあないさ。その場所は制限されるだろうけど、なんとかなると思う。ただ、その前に聞かせてくれないか。君は本当に、今回の事件を理解しているのか？」

やっぱりだ。御渦は分かっている。分かっているとしてみても、それは彼が理解したと思っ込んでいる範疇での理解であろう。

「分かっているよ、心配するなて」

「じゃあ、今この場で、僕に説明してみてくれ」

懇願に近い、御渦の口調であった。

今まで劣等感を感じ続けてきた反動か、私は素直に彼に説明する気にはなれなくなっていた。

「お互い理解しあっていることを、改めて言い合っつてのは、なんだか馬鹿らしくないか？ こたえ合わせなら、皆の前でやったらええ。もし仮に、俺の考えが間違っていたなら、その場で自分が訂正してくれたらええやかないか」

突き放した言い方をしても、御渦は更に、すぐるように言葉を重ねる。

「君が言いたくないのなら、僕の方から言っつてやろう。結論から言えば、篠沢誠一を殺した犯人は……」

「止める！ 何をそんなに急ぐんや。俺たちがここで、たった二人きりで事件を解決しても、それは単なる自己満足にしかならへん。俺たちは、推理ごっこをしてるわけやない。一人の人生が、これで決ってしまうような問題に立ち会っつとるんや。やっぱり、それを語るに相応しい場所があると思う」

御渦は私の勢いに押し切られ、それ以上は事件の説明を求めようとしなかった。彼は新しいタバコに火を点し、テーブルの木目を数

えるように俯いてしまった。

そのままの姿勢で、御渦は黙々と指に挟んだタバコを、吸わずに消費した。タバコは自然に燃え続け白い灰となり、自らの重みにより折れてテーブルの上を汚す。

「おい。しつかりしろや」

短くなったタバコが御渦の指を焦がすのではと心配した私は、ついに声をかけた。

御渦は今眠りから覚めたというような、虚ろな目を私に向ける。

「わかった。土曜日に関係者を集めよう。平日よりも集まりやすいだろうからね。君も、もう三日も会社を休んでいるのだから、明日は日常の生活をおくったほうがいいだろう。君は浅野沙耶と出会ってから今日まで、非日常を体験し続けてきたんだ。一度、自分の生活に戻って、考えてみたほうがいいだろう」

意味ありげな御渦の言い回しであったが、私は聞き流した。

「時間と場所が決まり次第、電話するよ。連絡先を教えてくれ」

普段どおりの御渦が戻ってきた。まだ不安げな目の色が残っているものの、次々と自分のペースで話を進めた。

「ああ、連絡先、何かメモするもんある？」

ボールペンは尻のポケットに挟まっていたが、メモ帳の類は持っていないかった。御渦に持っているかと尋ねたが、すぐにその質問が意味をなさないことを思い出した。

「そうか、あんたは、何でも憶えられるんやったな」

私は携帯電話の番号を口頭で伝えた。確認のため一回だけ御渦が復唱し、それで終わった。

必要な話は全て終わった。

「コーヒーを、もう一杯どうだい？」

御渦が聞いてきたが、それ以上この席に座っていると立ち去る機会を永遠に失いそうな杞憂を抱いた私は、首を振ってその申し出を断った。

「それじゃあ、これだけは読んでおいてくれないか。先日僕が言っ

た、人格障害についてまとめたものだ。きっと、君の推理の補強になると思う」

御渦は十枚ほどの束となったレポート用紙を、私に押し付けるように渡してきた。

レポート用紙は細かな手書きの文字で埋まっていた。おそらく、御渦自身が書いたものだろう。この時の私は、こんなものは不用だと考えていたが、そんな手間のかかることをされては、無下に断ることもできなかった。そして結局、このレポートは役に立ったのだ。「じゃあ、疲れたから帰るわ」

二人分の伝票を掴んで出ようかとも考えたが、昼一時から店に居座っている御渦の会計がいくらになっているのが気になってしまい、私は千円札を一枚テーブルに置いて立ち上がった。

「もう一日ある。じっくり考えてみる」

私の背中に向かい、御渦が声をかけてきた。

そのときの私にとって御渦の声は、単なる負け惜しみにしか聞こえていなかった。

三日ぶりに出社したオフィスでは、私に対して誰もがどこかよそよそしく見えた。

自分のデスクに座る前に、上司に呼ばれる。小言を頂戴することを覚悟したが、課長は私の体を心配したのみであった。元気ですとこたえると、課長は馬鹿みたいに笑って私の背中をバシバシ叩いた。何がそんなに面白いのか理解できない。

私は自分でも驚くほどの集中力をもって、次々と仕事を片付けた。午前中に溜まっていた取引先からの問い合わせメール七件と先週の伝票を処理し、午後には課長と共に代理店を訪問し、第2四半期における販売目標数値を決定させた。

私は、心身ともに充実していた。はじめて仕事を楽しいと感じ、達成感も覚えた。

明日に対する期待が、私の心を軽くしていたのだろうか。

自分の将来に広がる景色が、これほど明るく見えたことはない。被害者には申し訳ないが、この事件が私の人生における最大の転機となった気がする。

軽やかな気持ちのまま、私は夜の十時まで事務処理をこなし、会社近くのラーメン屋で軽い夕食を済ませて家路に着いた。

私が地下鉄の駅から地上に上がってきたことを見計らったように、胸のポケットに納まっていた携帯電話が鳴り出した。発信先は公衆電話と表示されている。通話ボタンを押すと、こちらが名乗る前に聞き覚えのある無感情な声が聞こえた。

「明日、午後二時に、篠沢家に関係者を集める」

駐車場のチケットを吐き出す機械のごとく、御渦は必要最小限な情報だけを伝えてきた。

「分かった」

私も負けずに、一言で応じる。

電話越しに、私たちの間に奇妙な間が生じ、その後向こう側から受話器を置く気配が感じられ、電子音が響いた。

電話が切れる瞬間、御渦が発するため息が聞こえた気がするが、何かの雑音なのだろう。

御渦と短い電話を終えても、気分の高揚は持続していた。私としては珍しく、手近なコンビニで酒を買って帰った。酔わなければ眠れない気がしたからだ。

錆付いたマンションのドアを開け、自分の部屋に帰ってきた。当たり前なことだが、一人暮らしの私の部屋は真っ暗だ。仕方なしに自分で黄ばんだ蛍光灯を灯す。上着を脱ぎ、ネクタイを解いてベッドに座る。

缶ビールのプルリングを引いた音を聞き、私はつい先日、この部屋で沙耶と過ごしていたことを思い出していた。沙耶が買った僅かばかりの買い物は、殆ど警察が持ち去ってしまったが、その香りだけはまだ微かにこの部屋に残されている。ビールと、タバコの匂いである。タバコを吸う人間を、これまでの私は心底軽蔑していたが、沙耶が吸っていると思うと喫煙者を卑下する気持ちも薄らいでいた。

彼女の気持ちをしりでも理解したいと思い、私は空けたビールに口を付ける前に、靴を履き直して再びコンビニへと向かう。そして店頭でタバコを買うおうとしたのだが、銘柄が分からなかった。レジの後ろには客が並んでおり、私は軽いパニックに襲われながらも、必死で沙耶が吸っていたタバコの柄を思い出し、それを指差した。

「セーラムでよろしいですね？」

念を押されても知らないものは仕方がない。私は「はあ」という間の抜けた言葉を返す。

レジの店員は心配そうにそのタバコを渡してくれた。

部屋に帰りいざ火を付けようとしたのだが、私の部屋にはライター

―がなかった。沙耶が持っていたものは警察が持ち去っていた。

仕方なく、ガスレンジの炎で代用することにする。強すぎる炎の前に、眉毛を焦がしそうになりながらも、何とか火を点ける事ができた。そして、予想どおりむせた。

旨くもなんともない。私にとつて煙は単なる煙に過ぎなかった。しかし、その匂いだけは、沙耶が漂わせていた同じものを、部屋の中に充滿させることができた。その瞬間、まるで沙耶がこの部屋に戻ってきてくれたような錯覚に陥った。そして同時に、彼女と過ごした三日間の思い出が、鮮明に甦ってくる。

彼女が語った最後の言葉はなんだっただろう。そう、彼女が逮捕される日、私を仕事へ送り出してくれたときの言葉だ。

『いつてらっしやい』だったろうか。違う。

『ちゃんと待つてますから、しっかりと働いてらっしやい』だ。

そう言つて、私を仕事へと送り出してくれた。まるで同棲しているような幸せを、私に与えてくれた。しかし彼女は、私の帰りを迎えてはくれなかった。彼女は警察に連行されてしまったのだ。

物事には、原因があり結果がある。始まりがあつて終わりがある。見送つたら、出迎えてくれねばならないはずだ。

私はまだ出かけたまま、帰ることができずにいる。

これは、彼女が出迎えてくれなければ終わらない。

そんな自分勝手な思索にふけりながら、私は缶ビールを飲み干した。

彼女の香りを発するセーラムは、流し台の上に置いたままになっている。その火の下には、タールの黄色い染みが広がっていた。

残念ながら天候は下り坂だ。今にも落ちてきそうな灰色の雨雲が、近畿一円を覆っている。土曜の朝の見慣れぬ天気予報士が言うには、午後から雷を伴う荒れ模様になるのだそうだ。そんな暗雲漂う空の下、私は一人電車を乗り継ぎ、京都国際会館前の駅に降り立った。

貧弱な記憶力しか持たない私であっても、三四日程前の出来事は鮮明に憶えている。私は御渦と共にこの地を訪れ、被害者である篠沢邦夫の葬儀に出席した。そして伊藤重信と出会い、事件現場である篠沢家に案内された。私たちの調査として、まずはじめに訪れた場所である。

今さらではあるが、私たちは調査と呼べるような活動をしていただろうか。事件現場を見て、関係者たちの話を聞いたただけ。指紋が具体的にどこにあったのかも知らなければ、事件現場の遺留品を見てもいない。また、DNA検査が行われたか否かも分からない。それでも、私は真実に辿り着くことができたと信じている。

要は、動機とアリバイである。

私は、このパズルを解くことができた。

後は、この真実を、本人の目の前に突きつけるのみである。

それで、全てが終わるはずだ。

昨日の御渦の電話によると、午後二時に篠沢家に集合とのこと。

生来の小心から余裕を持って家を出たところ、案の定早く着きすぎってしまった。時計を見ると、短針はまだ正午を越えていなかった。

仕方がなく私は、駅近くのファミリーストランに入ることにした。本来私は、一人では決してファミリーストランに足を踏み入れない。それでもその店を選んだのは、他に選択肢がなかったからだ。飲食店ではなくとも公園でもみつければ、迷わずそこを時間つ

ぶしの場と決めていただろう。

私はランチと飲み放題のドリンクバーを注文した。しかし、食事は一向に喉を通らず、私は終始薄いコーヒーを飲み続けていた。昨日まで、あれほど自信に満ちていたはずなのだが、本番を目前にした途端緊張感が目を覚まし、私の中で見る見るうちに勢力を拡大している。カップを持つ手が振るえ、琥珀色の海は大時化だった。

「早いじゃないか」

不意に後方から声をかけられるのと同時に、私の肩が叩かれた。

私は驚いて短い悲鳴を上げ、飲みかけのコーヒーをテーブルに撒いてしまった。奇妙な私の悲鳴が店内に響いたため、すぐさまウェイトレスが駆けつける。

「何をしてるんだい、馬鹿だなあ」

ウェイトレスから雑巾を取り上げ、御渦は代わりにテーブルを拭きはじめた。

「お怪我ございませんか？」

「大丈夫です。心配いりませんから」

私を危惧した店員に対して、御渦は勝手に返事をして、早々に席から追い払ってしまった。そして、私の了承を得ぬまま、目の前の席にどかんと座る。

「よかったな。服にはかかっていない。せつかくの晴れ舞台に、みともない染みがついた衣装で出るところだったじゃないか」

自分がその原因となったことを棚に上げて、御渦はからかい口調で続ける。

「そのコーヒー飲み放題なんだろ。空になってしまったんだから、さっそくもらってこいよ。まだ時間はたっぷりあるしね」

御渦は尻のポケットからクシャクシャのタバコを取り出したが、このテーブル上に灰皿がないことを発見した。体を伸ばし、誰もいない隣のテーブルからカラフルな灰皿を手に入れてから、満足げに火を点けた。

私は先ず、自分の服にコーヒーの染みが付いていないかを確認す

る。この日は白いポロを着ていたため、小さな染みでも目立ってしまふ。幸い御渦の言うとおり、茶色い跡はみあたらなかった。

美味そうに煙を吐き出す御渦を横目に、私は新しいコーヒーを注ぐために席を立った。

急に肩を叩かれ、確かに驚いたはずだったが、その相手が御渦と分かると、その驚きも急速に冷めていった。彼はいつでも突然現れる。そのことに私が慣れてしまったせいだろう。今日も篠沢家に到着する前に、御渦とどこかで出会うことを、私は頭の隅で予感していたと思う。

新しいコーヒーをカップに注ぎ、私は席に戻る。その頃には御渦はもう一本目のタバコを揉み消し、早速二本目のタバコに火を点しかけていた。

「それで、考えはまとまったのかい？ あれから再考、熟考したのかい？」

先日御渦にみられた憂いは、もうこのときには感じられなかった。いつもの御渦がそこにいるだけだった。彼は超然と、私を見下してタバコを吹かしている。

「ああ、心配せんでも、すぐに解決したるわ」

真正面で御渦の視線を受け止め、私はこたえた。そうこうしている間に、御渦がいつの間にも注文していたのか、焼肉定食が運ばれてきた。それから彼は黙って食事を摂り、私はちびちびと不味いコーヒーを飲んだ。

「僕が渡したレポートには眼をとおしたかい？」

私が黙って頷くと、御渦は満足そうな顔をして、食事を続けた。食事を終えると、御渦はテーブルに伏せて居眠りをはじめた。私は相変わらずコーヒーをすすり続けた。私は関係者を前にして、いかにして自分の推論を展開するかを頭の中で何度もシミュレートする。皆の驚く顔が目には浮かぶ。唯一の憂いは、私が説明下手であることだけだった。大切な所でパニックに陥りはしないだろうか。私の舌は上手く回るだろうか。またしても緊張感が首を持ち上げてき

だが、御渦の呑気な寝顔を見ると、それも自然と消えてしまった。

こうして、約束の時間が近づいてきた。

御渦は約束の時間十五分前になると、なんの合図もなしにむっくりと顔を上げる。

「じゃあ、そろそろ行こうか」

本当に寝ていたのか疑いたくなるほどの目覚めのよさだ。御渦は先に立ち、大またでスタスタと歩き出した。

出入り口付近で精算しているとき、私は見覚えのある中年女性を店の奥の席に見た気がする。そう、あれは篠沢伸子だったと思う。息子の葬儀の場で泣き崩れた顔しか見たことのなかった私には、平生の彼女の顔をその一瞬で見分けることができなかつたが、まず間違いないと思われる。しかし、それが平生の顔とは思えない。彼女の顔は怒りに満ちており、テーブルの上に置いた白いハンドバックを、ただじつと睨み続けていた。

鬼の形相であつた。

約束の時間五分前に、私と御渦は篠沢家に到着した。家の前には、京都府警のパトカーが一台、それに連なって邦夫のアウトデイが停められていた。既に、役者は揃っているのだろう。

御渦が先に立ち、呼び鈴を押す。すぐに戸は開けられ、四角い顔をした大柄な男が現れた。

「お待ちしていました御渦さん。それと、中井さんですね。もう、皆さんお集まりですよ」

短く刈上げられた頭に、よれた黒いスーツ。テレビドラマなどでよくみられる、典型的な体力自慢の若い刑事がそこにいた。刑事は自分の家のように、私たちを慇懃に導いてくれる。

この家を訪れたのは二回目だ。前回のときは部屋中が締め切ってあったせいで、全体的に暗いイメージを持ったが、今回はまた違った意味で空気が重い。

案内されるほど、この篠沢家は広くない。玄関の後、形ばかりの短い廊下を抜けると、すぐにリビングに出る。このリビングには、多くの人間がいる気配がしていた。

先ず視界に、山のような巨漢が入ってくる。見覚えてのある顔が、ゆっくりと私の方に向けられた。山根だった。沙耶が連行された現場にいた、御渦の知り合いだという刑事である。

山根は私たちがきたのを知ると、脂ぎった丸い顔を人懐っこくゆがめて笑った。

山根は確か、大阪府警の刑事であったはずである。この場にいる理由は分からなかったが、多少なりとも見知った人物がいることで、私の緊張は僅かに緩和された。

次に見えた男は全くの初見である。中学生のように小柄で針金のように痩せているが、肌のつやは若いものではない。銀縁の度の強

いメガネをかけており、表情は窺えなかった。

「山根さんとは面識があるよな。その隣の、宇宙人みたいな人がこの事件の担当検事、刈谷さんだよ。それから、案内してくれたこのゴリラは、京都府警の稲生刑事だ」

ゴリラと形容された稲生刑事が苦笑いでこたえたのに対し、検事だという刈谷は、眉一つ動かさない全くの無反応であった。それでも、宇宙人と言われて怒り出さないということは、やはり彼も御渦とそれなりに親しい間柄なのだろうと思われる。

稲生刑事は我々の案内というあまり意味のない役目を終えると、さっさと検事の隣に一步後退して立った。山根と稲生という巨漢二人の間に立つ検事は、より一層小柄にみえ、人間離れの風貌が際立つ。私はいつか見た、捕獲された宇宙人だといわれる写真を思い出した。

篠沢家のリビングにはアームチェア二脚、ラブチェア一脚の計四人が座れるソファークラセットが置かれているが、警察の関係者は誰一人その席に座ろうとしない。ラブチェアには、篠沢伸子の恋人である伊藤重信が一人で座っていた。

私たちに向かって置かれているアームチェアのひとつには、浅野邦夫が足を組んで座っている。リビングに現れた私たちを一瞥したが、すぐに視線を外し、この空間自体に関心がないように窓の外を見続けている。私としても会釈をする気分ではなかったので、好都合ではあった。

そしてもう一つのアームチェアには、私たちに背を向ける形で長い髪の女が座っていた。その頭はゆっくりと回り、私に向けられる。沙耶だった。

無論、期待していなかったといえば嘘になる。

私は関係者を集めてくれと御渦に頼んだのだ。沙耶は今回の事件における容疑者であり、これ以上の関係者はいないと言えるだろう。沙耶は髪の毛が乱れており、化粧もしていない。それでも彼女は十分に美しく、私の胸はちくりと痛んだ。

沙耶は私を見て、力なくではあるが優しく微笑んでくれた。

何を意図した微笑みなのだろう。私への謝罪なのか、現状への自虐なのか、或いは後悔なのか、それとも私がこの場にきたことへの安心か、喜びと見るのは自惚れだろうか。

とにかく、沙耶は笑ってくれた。それだけでも、私がこの家にやってきた価値はあった。

「現場検証という名目で、被疑者を連れてきてはいるが、こんなことは特別なんだよ。その辺をまず理解していただきたいね」

口を開いたのはちび検事だった。その外見に相応しい、甲高い声音だ。

「君にはいくつか借りがあから、こうしたサービスをしているのだよ。早く済ませてくれないか。私も、それに集まってくれたお二人も、暇じゃあないんだからさ」

検事が言う「お二人」とは、浅野邦夫と伊藤重信を指しているのだろう。邦夫はお構いなしに外の景色を眺め続けており、伊藤は警察関係者を前にして恐縮している様子だった。

早くしろと急かされて、私は軽いパニックに襲われる。

「あの、関係者は、これで全員でしょうか」

何の考えもなしに、私は口を開いた。何か言わなければならないという強迫観念から出た言葉だったが、聴いた者は勝手に都合よく解釈してくれたようだ。

「ああ、篠沢伸子さんなら、席を外してもらえます。遺族の目の前に被疑者連れてきたら、そりゃアンタ、えらい面倒なことになりまっせ」

こたえたのは山根だった。

私は忘れていた。この事件は殺人事件なのだ。人の命が失われているのだ。面白半分の推理ゲームではない。そう考えた途端、極度の緊張が私を襲う。もし間違っていたら「すみません」で済まされるのだろうか。相手は本物の警察だ。胃が急速に収縮していくのが分かった。

「なあなあ、早くしてくれって言ってんの」

黄色く尖った声が私の尻を叩く。検事は少し膨れた顔つきで、短い腕を胸の位置で組んでいた。

胃が更に収縮し、胃液が食道を湧き上がってくる。

「心配するな。僕は君の後ろにいる。不味いことになったら、いつでも代わってやるから」

えづく瞬間、御渦の低い声が耳元で囁かれた。その声に救われ、私はパニックに陥らず、深呼吸を一つ入れる余裕を持てた。

何故だろうか。この御渦の台詞は、いつかどこかで聞いたことのある言葉だと思った。遠い昔、私がまだ幼稚園に通っていた時分に聞いたような、そんな気がした。

落ち着きを取り戻した私は、先ほどファミリーレストランで何度もイメージした手順を思い出す。

「あの、私、中井と申します。事件の容疑者になっている、浅野沙耶さんの高校時代のクラスメイトってだけの男です。今日は無理を言って、皆さんに集まってもらいまして申し訳ありません。でも、今回の事件、どうしても納得がいけない点があるんです。その点を関係者の皆さんと話し合うことができましたらと思っております」

自分の声ではないようなしつかりとした滑舌で、私は語りだすことができた。

「無意味な前置きはいいから、言いたいことを言いなさい」

刺のある口調で検事が促す。私はペースを乱すことなく、話を続けた。

「では早速ですが、事件をはじめから見直してみてください。いくつか、不可思議な点が見つかるはずですよ」

私は不特定の人間に問いかける形で、いったん言葉を切った。しかし、誰も反応してこない。それも、当初の予定通りだ。部屋はいつの間にか完全に静まり返っていた。私は、自分の言葉に聞き耳をたてはじめた人々の顔を意識せぬよう心がける。

「あの日、四月十日木曜日、浅野沙耶さんは兄である邦夫さんに車

で送られてこの家を訪れました。その時間を教えてくませんか？」

私は浅野邦夫に向かって質問を発した。何度も警察にこたえている内容であろう。また、私と御渦は一度彼の口からそのこたえを聞いている。それでも手順通りにやらなければ、私はまた混乱しそうだった。

張りのある高音が部屋に響く。

「十七時半前後。浅野邦夫さんは彼女を送り届けるとすぐに帰宅した。自分の家に戻られた時間は十七時五十五分。これは隣家の証言も得ている。時間的矛盾点もなければ、犯行時刻には一切関わりなし！」

代わりにこたえたのは刈谷検事であった。彼の頭の中には、事件に関する全ての情報が時系列で整理されているのだろう。一分一秒の無駄を嫌い、且つ他人の意見を挟む余地を残さない、快活な回答であった。この質問に関しては誰がこたえようが構わなかったので、私はかまわずに言葉を続ける。

「邦夫さんが帰ってから、犯行時刻である十一日の午前零時前後まで、沙耶さんと被害者の二人きりで過ごしたということですが、間違いありませんか？」

「その通り。被疑者と被害者は二人きりでこの家にいた。これは、周辺住人の証言からも明らかなことだ。邦夫氏が出て行って、被害者の母親が帰宅するまで、この家に入入りした人間はいない」

「できれば、彼女にこたえて欲しいのですが」

刈谷検事の話の遮るように、私は言葉を重ねた。検事は何事か言い返そうとしたようだが、御渦が目配せをしたことにより、なんとか黙ってくれた。

「あの、私……」

皆に注目され、沙耶の口は重くなっている。

「浅野さん教えてくれ。十一日の朝を迎えるまで、君は篠沢誠一さんと二人つきりだったのかい？ それとも、誰か他の人間が尋ねてきたりはしなかった？ これは、とても重要なことなんだ」

「私……、ごめんなさい。何も覚えていないの……」

消えそうな沙耶の声だった。集中しなければ聞き取れない。不意に鳴り出した冷蔵庫のうなり音の方が、リビングに大きく響いていた。

「下らん。何を言い出すのかと思えば、第三者の登場かね。もつとマシンな新説を期待していたのだけどね。あの御渦宗茂がセツティングしたということまでこれまで我慢してきたが、ここまで下らない話を聞かされるとは思ってもみなかった」

吐き捨てるように、検事は続ける。

「この女は逮捕されてから今現在まで、一貫して黙秘を続けているんだよ。正確には『憶えていない』の一点張りだけどね。これは黙秘しているのと同義だよ。被害者との馴れ初めや、彼女自身の現在の境遇などは饒舌に語るが、こと事件に関しては完全な黙秘だ。邦夫氏に送られてこの家に来たことまでは憶えているが、それから次の日の朝、彼女が被害者の母伸子さんに発見されるまでの十二時間強、彼女は一切憶えていないと主張している。無論、我々としてはこのふざけた、極めてご都合主義的主張を鵜呑みにすることはできず、彼女の黙秘、証言拒否として認識している。つまり、彼女は自分の都合の悪い話は、こたえたくない、というわけだ」

いつ息継ぎをしているのか分からないほど、検事は早口にまくし立てる。しかし私にとって、検事のこたえは十分予測できる範囲のものであった。

「もう一度確認します。沙耶さんは、一切自供をしていないのですね」

「しつこいね君も、そう言ってるじゃないか。確かに彼女は、自供はしていない。だけどね、状況証拠のみでも、立件できる材料は十分そろっているんだよ。今回の事件に関しては、逆に自供してくれないほうがやりやすいくらいだ。犯人である浅野沙耶は、自分でも分からないほどの混乱の中、婚約者を絞殺したんだ。だから、そのときの自分のことを言葉にして説明することは難しい。まあ、弁護

士がこの点について、彼女の責任能力を争ってくる場合は、僕としても有罪を勝ち取ることに不安を覚えるけどね。それでも、彼女以外に犯人がいるなんて、馬鹿馬鹿しいにもほどがある。いいかい君、浅野沙耶は犯行の自供はしていないが、また否定もしていないんだ。彼女はただ、馬鹿みたいに『憶えていない』を繰り返しているだけなのさ。これはもう、私がやりましたってことじゃないのかい？」

検事はそう言うと、隣に立っている山根刑事と目配せして、無理に驚いた表情をみせた。検事の顔には、勝利の笑みが自然と零れ落ちている。

「浅野さん、もう一度だけでええ。本当に何も憶えていないのか？何でもええんよ。どんな些細なことでも、何でもええ。そのとき誠一さんと交わした会話だとか、見たテレビの内容だとか、本当に何でもええよ」

「ごめんなさい。本当に……本当に何も、何にも憶えていないの。何ひとつ思い出せないの……。ごめんね、ごめんね、中井君……」

震える声で彼女は謝罪し、終に顔を覆って嗚咽した。

私は沙耶を悲しませたくはなかった。できることなら、こんな質問を投げかけたくなかった。それでも、私は彼女を救い出すため、彼女を泣かせる必要があったのだ。

「もう止めようか。こんなことをしても、誰も喜ばないだろ。君も、不必要に人の傷をえぐるような真似は止めなさい」

刈谷検事は尖ったあごを使い、稻生刑事に撤収の合図を送った。

私は一際大きな声を出し、彼らの動きを制止する。

「待つて下さい。今のところが重要な点ですよ。気づきませんでしたか？」

「今のところって、何処？」

検事に指示され、帰る準備をはじめようとした直後だった。稻生刑事は半身を捻じ曲げた状況で私に尋ねた。

「もうしばらく、私の話に付き合ってください。話を進めましょう。疑問点についてです。浅野さんが仮に犯人だとするならば、動機は

いつたいなんでしよう。何故浅野さんが婚約者を殺さなければならぬのか。検事さんはその点、どうお考えなんでしょう?」

私は一方的に話を続けることで、刑事たちの注目を強引に得た。そして検事は何の抵抗もなく、私の問いにこたえてくれるのだった。生来、話好きな人物なのだろう。

「動機か。その点は僕も分からない。ただ、十分説得力のある推測は立てられるよ。被害者篠沢誠一さんは、婚約者である浅野沙耶に対して、別れ話でも持ちかけたのだろう。彼女はアルコール依存症という、人生のパートナーとしては選びたくない要素を持つ人間だ。それまでは高ぶっていた感情も、ふと先の長い人生を考えてみると、彼女と一緒にいるのは幸せになれない。そう誠一氏が思い至ったというのは、十分に考えられる。そして事件当夜、彼が被疑者に別れを告げると、被疑者はかっとなり、手近にあった貯金箱で被害者の頭部を殴打する。怒りの治まらない被疑者は、殴打されて半ば意識のない篠沢さんの首を締め上げ死に至らせた。その後彼女は、自分の犯した犯罪に驚愕し、呆然となり朝を迎える。この間、凶器についた指紋などを拭取ったのだろう。被害者の母親に問い詰められた瞬間、はじめて被疑者は恐ろしくなり、現場から逃走する。事件前日までの行動・状況を判断しても、計画的殺人ではなく、あくまで突発的なものと考えられる。我々としても、それほど酷な刑を要求するつもりはない。その点では譲歩するよ」

検事は、沙耶の有罪を信じて疑っていない。論理として脆い部分は、強引な推測で補強した持論を展開した。先ず、篠沢誠一が別れ話を持ち出したという点から非常に曖昧だ。素人の私でも、そう感じられた。

「分かる。君が言いたいことは十分分かる。私の推理には何一つ証拠というものが無いと言いたいのだろう。だが、状況証拠というやつだけで、裁判は人を有罪にできるのだよ。また、彼女が中から施錠された部屋の中に死体と共にいたという事実、これはもう既に、浅野沙耶が立派な犯罪者であるという証拠だとは思わないかい?」

まあ私の経験上、これだけの材料が揃っている裁判で、私が負けることはないだろうね」

上目遣いで私に視線を投げかけたところで、検事の話は一旦止んだ。実際の裁判では、彼の言った論理が通じてしまうのだろうか。裁判風景など、テレビドラマの中でしか見たことのない私にとって、法曹界などは文字通り異次元の話なのだ。検事という立場の男が言うならば、その通りなのだろう。しかし、彼がいったい誰と勝ち負けの争いをするのか、私には想像ができなかった。

「ならばお尋ねします。浅野沙耶さんが明確な殺意をもって、婚約者である篠沢誠一さんを絞殺した、という検事さんの主張ですが、そうなるか。何も憶えていない」と言い張っている沙耶さんの証言は、全くの嘘だということになりますが、そう捉えてよろしいですか？」

私は、『嘘』という言葉を強調して、検事に言った。

「勿論、嘘であると考えているよ。仮に彼女が何も憶えていないという主張が正しくても、それは彼女自身が思い出したくないと自分の記憶を閉ざしているだけであって、憶えていようが忘れていようが、彼女が犯した犯罪に変わりはないよ。事実上、現場という証拠が、しっかりと記憶しているのだからね」

自分の言葉が思わず名言になった、と検事は感じたようだ。口元が糸で引つ張られるように、左右へ伸びた。私はようやく、検事が予定していたキーワードを口にくれたことで、同じように静かに笑った。

「今のところ、もう一度おっしゃって下さい」

「いいとも、事実は現場という証拠が……」

「そこではなく、もう少し前のところですよ」

検事は下唇を出して、あからさまに不機嫌な顔をみせる。それでも言われるがまま、記憶を整理するために目を閉じた。

「ええと……、憶えていようが忘れて……」

「もう少し前ですよ」

私の語気は更に強まった。検事は私を睨みつけ、短い溜息の後話し出す。

「彼女自身が思い出したくないと、自分の記憶を閉ざしている。これかい？」

「それです！」

私は検事から向きを代え、沙耶の兄を見た。

「浅野邦夫さん。あなたは確か、神経内科の医師でしたよね。神経内科といえば、記憶に関する諸問題も扱うはずです。その専門家の意見として、検事さんが主張するような、沙耶さんが自ら記憶を閉ざしているような状況、記憶の封印のような状況は、考えられることでしょうか？」

それまで無関心に窓の外を眺めていた邦夫も、我々の話は聞いていたようだ。彼は躊躇することなく、私の問いにこたえてくれた。

「それは、十分有り得ることだ。心的外傷により、一時的、あるいは永久的に記憶を封印するというケースは多々みられる症例だね」
他人事の体を崩さぬまま、邦夫は淡々を述べる。

「ならば、更にお尋ねします。沙耶さんは、妹さんは、実際記憶を失っているとお思いですか、それとも、単なる虚言でしょうか？」

「沙耶の様相を見る限り、何らかの記憶障害を起こしている可能性が高いな。しかし、丸々一晩の記憶を失うつてのは、ずいぶん都合の良い記憶喪失だとは思うけどね」

「……それだけ、ですか？」

「それだけって、どいゆう意味かな」

「兄として、言うべきことはそれだけですか？」

私の語気は荒れていた。実の兄ならば、妹をかばうのが当たり前ではないのだろうか。私は最後の機会を彼に与えた。しかし、彼はこたえてくれはしなかった。

声の乱れを正すため吐息をはさみ、私は話を続ける。

「では、二つのパターンで考えてみましょう。先ず、浅野沙耶さんが嘘を付いている場合です。彼女が検事さんの言う通り、婚約者を

衝動的に殺害したとします。その後の彼女の行動はどうみえますか？
彼女は自分が殺した人間を前にして、部屋を施錠します。そしてその死体と共に一晩を過ごし、翌朝部屋をこじ開けられた後、現場から逃走するのです」

私は一度言葉を止め、集まっている全員顔を一通り眺めてから続ける。

「これは、とても不自然なことではないでしょうか。いくら混乱していたとしても、殺害したその瞬間に逃げ出すならともかく、彼女は間違いなく一晩を死体と同じ部屋で過ごしていて、その上部屋を内側から施錠しているのです」

「不自然と解釈するのは、君の偏った、被疑者に対しての好意的な見解によるものだよ。犯罪者というものは、ときとして理解の及ばない行動に出るものだよ。数百円分の切手を盗むため、郵便局に強盗に入る間抜けもいるのだよ。まあ、これは結果論だけだね。ともかく、浅野沙耶は衝動的に殺人を犯した後、怖くなったんだよ。彼女は先ず恐れたんだ、自分が犯した罪に対してね。そして彼女はとりあえずその場を隠そうとした。それが、部屋を施錠した理由だと私は見ている。これは、犯罪者によくみられる現象だよ。死体をバラバラにして押入れに隠してしまうのと同じ心理だ。短絡的に罪を犯す者は、こうした極めて幼稚な行動をとることが、多々あるんだよ」

私はわざとらしく深くため息をつき、検事に向かって言い放つ。
「理解の及ばない行動に出る、幼稚な行動をとることがある……」
検事さん、あなたの話は犯罪捜査に携わってきた経験の上に成り立った、それなりに説得力のあるものなのかもしれません。だけど私は、もう少し理路整然とした推理を行うことができます」

検事の顔が見る間に赤く染まってゆくのが分かった。低い位置から私を睨み、唇を震わせていた。

「なんでつかかなその、理路整然とした推理ってやつは。これは遊びやおまへんで」

怒り心頭で言葉が出なくなっている検事の代わりに、山根刑事が口を出す。無論私も、遊びでこの場に立っているわけではない。

「私の推理は、先に申し上げたパターンの二番目。つまり、浅野沙耶さんが全く嘘を言っていない状況で成り立つものとなります」

それまで顔を伏せていた沙耶だが、このときようやく私の方を向いてくれた。彼女は拘束されてから今まで、やっと自分の話を信じてくれる人間をみつけたのだろう。

「私は、沙耶さんが『憶えていない』と主張することが嘘ではないと確信しています。それは私が、彼女が逮捕される寸前まで生活を共にしていたからです。偶然出会ってからの四日間、彼女は事件について何一つ話してはくれませんでした。彼女が逮捕された直後は、私も彼女に利用されただけなのではと、多少疑ったりもしましたが、今にして思うと、彼女は何がなんだか分からぬまま、私の前に現れたのでしよう。記憶が混乱したままこの家を飛び出して、そして偶然出会った旧知の私に助けを求めた。しかし彼女自身、何から助かりたいのか、どのような危機に陥っているのかを正確に理解していなかった。だからこそ、私に対して何も言わなかったです。否、言えなかったというのが正しいのでしよう」

山根刑事は腕を組んだ姿勢で、黙って話を聞いていたが、困惑の色を顔に浮かべて口を開いた。

「しかし、中井さんも認めましたやん。被疑者はあんたさんと一緒におる間、テレビとか新聞をみせようとしなかった、て」

「ええ確かに、私は彼女と一緒にいる間、新聞やテレビのニュースには殆ど目を向けていませんでした。彼女が意図的に、そうした情報から私を遠ざけていた様子もありました。けどそれは、当然なことだと思います。あのときの彼女は、私しか頼れる人間がいなかった。私のマンションしか、彼女に居場所がなかったのです。彼女は何かあったか憶えてはいませんが、何かしらの事件が起きたことは逃げる際の雰囲気理解したのでしよう」

「憶えていないのに逃げるってことが、そもそも不自然と感じない

のかね」

ようやく怒りを静めた検事が言った。

「それも説明ができます。彼女は逃げたんじゃない。何者かによって逃がされたのです。逃げさせられたと言い換えてもいい」

「なんだいそりゃ。逃げさせられたって、無理やりに、逃げなきゃならん状況になった、ゆうことですか？」

今度は稲生刑事が、目を丸くして問い返す。

「その通り、彼女は逃げなければならぬと言われたのでしよう。

そうですよね、伊藤さん」

私の視線の先には、俯いたまま、死んだように動かない伊藤重信が座っていた。

この男しかいないのだ。一度、前にこの家を訪れたとき、既に御渦が問い詰めていた内容を私はなぞっているに過ぎないが、私も熟考した結果、あとき沙耶を逃がすことができた人物は、彼しかいないと判断した。そして、何者かが逃がさねば、彼女は絶対その場から逃亡するようなことはなかったのだ。

彼は、目を閉じたまま、深い瞑想に入っているようにも見受けられる。しばらくの間沈黙が続き、その場に集まった人間全員が、伊藤の反応を待っていた。

「……そうです。沙耶ちゃん逃がしたんは、私です」

呟くような小さな声だったが、あまりに部屋が静かになっていたせいか、私の耳には伊藤の言葉がはつきりと聞こえた。多分、皆が聞き取っただろう。その証拠に、刑事二人とその間に挟まれていた検事は、揃って目を見開いている。

「何を今更言い出すんですか。あなたは今まで、そんなことは何も言わなかったじゃないですか！」

検事が声を荒げた。しかし伊藤は、悪びれることなく証言をはじめめる。

「私が戸を破り、放心した沙耶ちゃんと、死体になっていた誠一君をみつめました。そのとき咄嗟に思ったんです『何かおかしい』っ

て。沙耶ちゃんの様子はただごとではなかったし、伸子も狼狽していた。伸子が警察、救急車と叫びながら二階から転げ落ちるように降りていってから、私は沙耶ちゃんに言うたんです。逃げなさいって。自分でもよう分かりませんが、あの状況から彼女が疑われるのは明確です。でも、私は沙耶ちゃんも誠一君もよく知っていましたので、彼女が誠一君を殺めるなんてことは、ありえないと思っただんです。だから咄嗟に、財布に入っていた二万円を彼女に握らせて、家から追い出すように逃がしたんです」

伊藤はゆっくり顔を上げ、驚いたことに私の目を凝視した。

「この人と同じですわ。私も、沙耶ちゃんが嘘を付いているとは思えなかった。何か別の、よう分かりませんが、何か別の理由があって、沙耶ちゃんは二階の部屋におったんだと思います。けして、彼女が誠一君を殺すような、そんな馬鹿な話はありません」

二階の部屋という言葉に反応し、私は所々にシミが浮かぶ古い天井を見上げてしまった。この視線の先において、人が殺された。そう思うと、改めて背筋に冷たいものを感じる。私は、殺された篠沢誠一の霊がまだ家にいて、私たちの会合を傍聴している様を想像した。

「よろしい。浅野沙耶がこの場所から逃亡した理由は、そうして逃がされた結果だと認めましょう」

検事の顔は弛緩していたが、すぐに鋭い視線を取り戻し、私を睨みつけた。

「しかしやはり、何もしていなければ、逃げると促されても彼女は逃げなかったでしょう。つまり、浅野沙耶は自らの後ろめたさに加えて、背中をちよっと押されたに過ぎない。彼女が逃げようが留まろうが、彼女が最も疑われる存在に変わりはないでしょう」

どうですか皆さん、といわんばかりに、検事は手を広げて集まった者たちに問いかけた。検事の言葉は正論だが、私はまだ核心を語ってはいなかった。

「確かに、後ろ暗い気持ちがあつたなら、逃げる機会を与えられ

ば逃げ出すでしょう。しかし、沙耶さんは逃げる時間はそれこそ十分あった。逃げようと思えば、いつでも逃げられる状況にあった。しかし彼女は留まっていた。否、留まることしかできなかったのです。なぜなら、彼女は今自分がどこにいるかも判断できない状態にあったからです」

御渦と、もう一人の男以外の顔が、一斉に困惑した。私の言葉の意味が全員には伝わっていないようだった。

「沙耶さんは、何も記憶できない状況に陥っていたのです。彼女が事件のことについて、何も憶えていないと証言しているのは、彼女がそのとき、何も記憶できていない状態にあったためです」

私の言葉が途切れると、しばし沈黙が訪れた。警察関係者は私の話を咀嚼しているようだが、誰も理解には至らないようだった。

「記憶できていない状態とは、どんな状態なんですか？ さっぱり分かりませんわ」

静寂を破ったのは山根刑事だ。

「言葉通りの意味ですよ。過去の記憶が無くなってしまうような記憶喪失ではなく、新しい情報を一切受け入れなくなっている記憶障害です。つまり、その状況に陥った者は、時間が停止したことに同じ現象が起きたと感ずるでしょう。我々がこうして話をしていることも、いわば記憶を積み重ねていることでもあります。私が少し前に言った言葉を、誰も記憶してくれていなければ、それは私が何も言っていないに等しい。そりゃ、どうでもいい話であれば、二三日で皆忘れてしまうような内容であっても、そのとき、その瞬間には記憶されているものです。そうでなければ、人間の世界に会話というものには存在しなかったことでしょう」

私はおもむろに尻のポケットから財布を取り出し、目線の高さまで持ち上げてから、床に落とした。静まり返っていた部屋の中に、パタンと乾いた音が響く。

「今私が落とした財布を、皆さんご覧になりましたね。私が財布から手を離す瞬間も見ていたはずですよ。よって、今床に落ちている財

布が、どうしてそこに転がっているのか、皆さんには理解できている」

「当然やないか。そない当たり前のこと、何でたいそうに説明してんねや」

多少苛々した顔をした山根が言った。

「そうです。当たり前のことです。しかし、記憶ができない状況に陥った者にとっては、これが当たり前ではなくなくなってしまふ。私が財布を落とした瞬間を見ている、それを記憶に留めておくことができないので、その後床に落ちていた財布を見ても、どうしてそれが床にあるのか分からないのです」

検事が短い手を挙げて、一端私の言葉を遮った。

「君が言いたいことは分かるよ。そりゃそうさ。記憶ができない状況に陥ったら、確かに時間が停まったように感じるのかもしれないね。君は、浅野沙耶がそんな状況になってしまったと言いたいのだろうか？ しかしね、いくら彼女が『憶えていない』と主張しているからといって、そんな都合のいい話はないだろう。それに、今の彼女は気落ちしているものの、至って健康に見受けられるがね」

刈谷検事はゆっくりと部屋の中を移動しつつ、話を続ける。

「そして君の推理とやらは、彼女が事件の現場に居合わせながらも、そして犯行後婚約者の死体を前にして一晩を過ごしたのも、彼女が記憶障害を起こし、目の前で起きた事が理解できなかったからだ、そういうことなのだろう」

「簡単に言えば、そういうことです」

私が認めると、検事は困ったような、それでいて笑っているような、複雑な顔を見せた。

「先ず、そんな都合の良い記憶障害があるのかね。記憶喪失なんて話は、君が好きな二時間ドラマでよくみかけるが、一時的に起こる障害なんてねえ……」

私は別に二時間ドラマが好きではないが、検事に対して説明を続ける。

「一時的な記憶障害、ありますよね。この場には幸いにも、その専門家がいらつしゃいます」

私の問いの先には、ソファーで足を組んでいた浅野邦夫がいた。邦夫はもう外の景色には興味を失っており、私の話をちゃんと聞いていたようだ。

「まあ、ありますよ」

神経内科は軽い口調でこたえた。その瞬間、検事の頬がピクリと痙攣するのを私は見逃さなかった。

「正式には『一過性全健忘』と言います。一時的な健忘、つまり記憶の喪失が起きるケースとして、交通事故やボクシングなどの激しいスポーツによる脳震とうによる記憶喪失と、今言った一過全健忘があります。一過性全健忘の特徴は、脳にダメージを負わずとも起きるというものです。専門家と紹介されたのに恐縮ですが、これが起きる要因はまだ研究途中にありまして、厳密には解明されていません。ビタミン不足、脳血管障害が理由とも言われていますが、決定的な原因を、今の医学会は提示できずにいるのです。一時的なものという、それほど深刻な症状でもないのに、研究する者が少ないというのも要因でしょうね。ただ、症例は多々あります。それほど珍しいものでもありません。普通は、三十歳以上の中高年世代に起きる症状で、数時間から半日程度、記憶が全くなされない状態に陥ります。ただ、これによる後遺症などはなく、概ね再発することも無いようです。一回睡眠をとると完全に回復しますが、症状を起した期間から、悪くすると数週間の記憶を失います」

抑揚のない口調で、邦夫は説明を行った。

「三十歳以上の中高年に起きる症状ということですが、二十歳代での症例はないのでしょうか」

「詳しくは資料をみなければ分からないけど、あったとは思っよ」
私に対して邦夫は、敬語を忘れるようだ。

「ならば、沙耶さんが事件当夜、その一過性全健忘となった可能性はあるというわけですね」

「可能性のあるなしで言うならば、今ここにいる人間が、いつ記憶障害を起こしても不思議じゃあない。先も話した通り、原因は分かっているのだからね」

パンと、唐突に手が一度叩かれ、狭いリビングに乾いた音が響く。手を叩いたのは刈谷検事だった。

「分かった分かった。よくもまあ、そんな珍しい病気を探し出してきたものだよ。感心した。でもね、それはやっぱり、都合の良い辻褃合わせに過ぎないね。君の推理だと、彼女は自分の恋人が殺されるのを目の前にしながらも、記憶障害を起こしていたため、それを理解・記憶することができなかったというわけだ。今邦夫さんがおっしゃった通り、確かにそうした病気があるのだろう。しかし彼女がそうした記憶障害を起こしたとしても、何故君の言う真犯人は、彼女をそのままにしておいたんだい？ 殺人現場をみられていたのだよ」

「検事さん、それは順序が違います。被害者の篠沢誠一さんは、沙耶さんが一過性全健忘となったが故に、殺される結果になったのです。つまり、犯人ははじめから、沙耶さんが記憶できない状況にあることを予め認識していたのです。沙耶さんが記憶障害を起こしたことで、犯行に至ったのです」

私が言いたいことは、検事には理解できたのだろう。刈谷検事は急に顔を強ばらせた。

「つまり……君が言う真犯人は……」

「はい、浅野沙耶さんの兄、浅野邦夫さんです」

私の声は僅かに震えていた。途端、高笑いする声が室内に響く。私に名指しされた当人、邦夫の笑い声だった。

「話の途中からさ、凡そ検討はついていたけどさ、まさかそんな直球で言われるとは、思っていなかったよ……」

邦夫はゲラゲラと笑っていた。笑いすぎて、目には涙を浮かべている。

「検討がついていたということは、自覚、つまり罪の意識があったということではありませんか？」

「馬鹿も休み休み言ってくれ。君ははじめから、記憶について執着していた。沙耶が何も憶えていないという言葉に拘り、これを起点として今回の事件を再構築しようとしていた。その結果辿り着いたこたえが『一過性全健忘』だ。そして、この比較的珍しい症例に詳しい私に対して白羽の矢を立てているわけだよ」

邦夫の高笑いは止んだが、その笑顔は維持されたままだった。

「まあ面白いから、最後まで話してみよ。その上で、私としての対応をさせてもらおう。勿論、法的手段も含めて、対応させてもらうよ。幸い検事さんもいることだ、大いに相談させてもらうよ」

私は脅しに怯まず、再び口を開いた。

「では話しましょう。沙耶さんが一過性全健忘になったことは、全くの偶然だと私は考えています。原因の分からない病気は、さすがに専門医である邦夫さんでも、意図的に起こすことはできないでしょうからね」

邦夫は笑みを浮かべたまま、黙って私の言葉に耳を傾けている。

「邦夫さん。事件当日、あなたは沙耶さんを送り届けてから、確かに一度帰宅している。そして今は苗字の変わった母親と二十三時過ぎに自宅の電話で話もしている。この点に疑いはありません。しかしあなたは、母親との会話の後も、電話を受けている。私があなたの家を訪れたときに聞きました。そのときあなたは、その電話が間違い電話だったと仰いましたが、果たしてそれは真実でしょうか」

「誰からの電話だと言っただい？」

邦夫の目は充血していた。

「電話は、篠沢誠一さんからだったのではありませんか？」

「馬鹿な。なんで彼が私に……」

既に邦夫から笑みは消えていた。

「被害者である篠沢さんは、沙耶さんが異常な状況に陥ったことを、兄であり医者であるあなたに知らせてきた。救急車を呼ぶよりも、

そのほうが適切な判断が仰げると思っただけでしょう。何しろ沙耶さんはアルコール依存症という状況下にある。以前にも似たような症状が出ていれば、邦夫さんが知らないはずはないと誠一さんが考えたというのは、容易に想像できます。電話で手短に沙耶さんの症状を聞いたあなたは、それが一過性全健忘であることを認識した。篠沢さんが語った内容はおそらく、『何度も同じことを質問する』『時間を何度も聞き返す』『今どこにいるのかを理解していない』、といった内容でしょう。そして、あなたはこう言った。『今車の調子が悪いから、迎えにきて欲しい』とね」

邦夫の表情は、憎悪に満ちたものに変わっていた。

「よくも、よくもまあ、そんなつくり話を考えたものだ」

「自分の車は目立ち過ぎる。なんとかして周囲に気づかれず、篠沢家に辿り着くため、あなたは邦夫さんに自分を送らせることを思いついたのです。多分、夜も遅いから、家から少し離れた場所で待っているようにと指示したのでしょう。篠沢さんの車はごく普通の国産セダンです。目立つことはない。そうしてあなたは、犯行時刻に十分間に合う時間にこの家に戻ってきた」

「いいかげんにしろ！」

邦夫はソファーから立ち上がり、私に飛びかかってきた。ついに、我慢の限界がきたのだらう。邦夫はテーブルに躓きながらも、私の顔を殴りつける寸前まで迫った。しかしその動きは、丸太のような太い腕に止められる。

「まあまあ、最後まで聞いてやりましょう」

片手で邦夫を押さえつけながら、山根が言った。山根は顔だけを向けて、小さくうなずいた。それは私に対してではなく、私の後ろに控えている御渦に対しての合図のように見えた。

「この家に到着し、沙耶さんの症状を自分の目で確認したあなたは、それが一過性全健忘であることを確信した。そして、予てより計画していた、否、希望していた妄想を実現できる機会であると判断した。あなたの妄想とは、あなたが与える罪と罰なのでしょう」

「黙らせる！ そいつを黙らせる！ そいつの方こそ妄想だ」

邦夫が咆えたが、体は山根が押さえつけている。万が一のことを考えてか、稲生刑事もすぐに動けるように身構えていた。

「自覚しているのかしていないのか、私には分かりませんが、邦夫さん、あなたは境界例ではありませんか？」

「キョウカイレイ？ また聞き慣れない言葉が出てきたな」

腰を低く保ったままの姿勢で、稲生が呟いた。

「君、犯罪捜査に関わる人間ならば、境界例ぐらい知っておかなければならんよ」

すかさず、検事は叱咤する。

「境界例とは一つの人格障害の名称です」

私は御渦が渡してくれたレポートを思い出しながら、説明を続ける。

「健常者と人格障害者の境界線は、簡単に線を引くことができませんが、アメリカ力でつくられた精神疾患の診断マニュアルにDSMと分類されています。これらのを見ると、人間は誰しも、何らかの人格障害を持っているようにもみられます。例えば、自己愛性人格障害というものは、芸能人の追っかけをやっている人は皆該当するような気がします。世の中には特別な人がいて、その特別な人に近づくことで、自分も特別な存在であると錯覚するというものです。私が思うに、健常者と人格障害者の線引きは、他人に迷惑をかけるか否かがあります。芸能人の追っかけにしても、自分の余裕がある範囲内でそれを行っている人は健常者で、親兄弟、果ては消費者金融に借金をしてまで追っかけをしている人は人格障害と呼んで言い過ぎではないと思います。人格障害のやっかいな点は、それを本人が自覚しているケースが極めて稀であること、そして、肉体的な疾病に比べて、必ずしも入院や治療が必要ではないということがあります。これはつまり、周りの人間が我慢するということにより、多くの場合問題や事件に発展しないからです」

私は説明をしながら、自分はどんな人格障害に分類されるのかを考えた。先日読んだ御渦のレポートには、『回避性人格障害』というものがあつた。何事からも逃げていた私は、これに分類される気がする。しかし、ここまできたら、私にもう逃げる道は残されていない。

「境界例とはそうした人格障害の一つとして区分されているものであります。簡潔にこの人格障害を説明すると、それは『他者への依存する度合いが異常である』ことです。勘違いをしないよう予め言っておきますが、これは愛情ではありません。この人格障害者は、とにかく、精神的に依存する相手に、見捨てられることを極度に恐れます。それを回避するために異常な努力をすることが特徴です」

私は頭の中で、何か見落としている点はないかを確認しながら話を進めた。矛盾点はないか、検討違いな発言をしてはいないか。私の言葉に耳を傾けている参列者の表情からは、何も伺い知ることはできなかった。皆、私の言葉を理解することで必死なようだった。ただ一人、怒りの形相をした浅野邦夫を除いては。

「境界例となるには、その人物の成長過程において原因があるといわれています。特に、母親との関係が重要だと言います。通常、人は生まれてから時を経るにつれ、親とは順次距離をとっていくものであります。乳飲み子のときは完全に母親に依存していますが、それが離乳食を食べ、オムツも外れ、幼稚園・学校へ通い、大学では家を出て下宿し、そして就職して経済的にも自立することとなる。

しかし境界例の場合、この親と子の距離をとる過程が上手くいきません。親が、子供が自立して行くことを邪魔する傾向にあるのです。境界例となる人物の母親は、子が自分で何かを成し遂げようとすると、横からその邪魔をする。母親がいなければ、何もできない子供につくり上げてしまうのです。これは、二十歳を過ぎても自分の着る服を親に選んでもらうといった、いわゆるマザコンも含まれるのでしょうか、私が今言っている境界例は、これが精神的に行われている状態を指します。母親は、言うことを聞かなければ捨ててしま

うよ、と子供に対して見捨てられる恐怖をあり、自分の支配下に置くのです。その子供は、見捨てられる恐怖を抱きながら成長し、終には、人に見捨てられることを極度に恐れる、境界例が出来上がるわけです。浅野邦夫さんの母親、夏子さんの話も聞いてきました。彼女には境界例の子供をつくる要素が多々みられました」

「私も専門医ではないが、お前のような素人に人格障害の講義を聞かされなくても、それがなんだかは知っている。もっと簡潔に結論を語ることはできないのか」

三度邦夫が吼えていた。邦夫のみならず、他の警察関係者一同も話の収束を望んでいるような顔をしていた。

「分かりました、結論から先に述べましょう。その後、その理由を話します。反論はそのときに聞くことにします」

そこで一呼吸の間を空けてから、私は続ける。

「この家に到着し、妹である沙耶さんの症状を確認し、彼女が一過性全健忘、つまり一時的に記憶を行えない状況に陥っていることを確認したあなたは、沙耶さんへの復讐を行うことを決意した」

「ちよっ、ちよっと待ってくれ。被害者は篠沢誠一やで。篠沢誠一への復讐ではないんかい」

山根刑事が目丸くして言った。

「そうです。これは、沙耶さんに対しての復讐です。被害者はあくまで、そのとぼっちりを受けたに過ぎません。浅野邦夫さんは、境界例という人格障害でありまして、彼は妹である沙耶さんに依存していた。そして、彼女に捨てられることを異常なまでに恐れている。それを回避するためには、気違いじみた行動をとるのです。繰り返しますが、これはいわゆる、近親相姦ではありません。邦夫さんは兄として妹である沙耶さんを愛しており、それは性的なものではない。しかし、依存しているのです。本来これは、母親である夏子さんに向けられたものでありましたが、それが妹の沙耶さんへ移っているのです。移ったというより、彼が移したのでしょうか」

邦夫の表情が一層険しくなっていた。

「話を結論へ進めましょう。細かな説明は後で行います。ともかく、邦夫さんは沙耶さんへの復讐を実行します。ただしこの復讐は、沙耶さんを傷つけるものではありません。これが話を複雑なものとしているのですが、邦夫さんは沙耶さんに依存しているわけであり、その依存対象を殺したり、肉体的に傷つけることは自分の首を絞めることと同義となるのです。要は、彼女が自分から離れる、彼からすれば自分を捨てようとしている彼女を許せなかった。しかし反面、彼女を必要としている。その結果の復讐でなければならぬ。そこで彼が考えた復讐は、沙耶さんを殺人事件の容疑者に仕立てることだったのです」

「よう分からんな。あんたの話では、この邦夫さんは、自分の元から離れようとしている妹を繋ぎ止めようとしたんやろ。殺人犯として逮捕されてもつては、結局自分の側から離れてしまっやないか。殺すのと一緒やないか」

「邦夫さんは、肉体的に沙耶さんへ依存しているわけではありません。あくまで精神的になのです。それは距離が離れていても関係ありません。肉体的な依存、つまり、性の対象として求めていたのなら、沙耶さんが刑務所の中に入ってしまったては元も子もありませんが、彼の場合は精神的に求められれば、それでよいのです。沙耶さんが頼る相手が、自分であればよいのです。おそらく、差し入れや手紙のやりとりだけで、彼は満足できるのでしょう」

「話を先へ」
検事が冷静な声で促した。私の話に興味を持ちはじめている様子だ。

「では、具体的に彼が何をしたのかを話しましょう。邦夫さんは、篠沢誠一さんの隙をついて、先ず頭部への一撃を加えます。これは、警察の方の実況見分の通り、部屋の中にあつた貯金箱を使ったのでしょう。そして、誠一さんのベルトを使って首を絞めた。邦夫さんが篠沢誠一さんを殺している間、傍には沙耶さんがいたのでしょう。その一部始終を彼女は目にしていたはず。しかし、彼女はその

光景を記憶することができなかつた」

このときには邦夫は咆えるのを止め、ただ、鋭い目つきで私の目を凝視していた。

「篠沢邦夫さんを殺害してから邦夫さんは、今回の事件の最大の謎であり、沙耶さんを事件の容疑者としている唯一とも言える理由、施錠された部屋、いわゆる密室の作成を行います。皆さん、殺害現場の部屋の鍵を思い出してください。部屋を施錠する内側からドアノブの中央のボタンをプッシュするだけの、いたってシンプルな構造でした。それでも、これを外から行うことは、何かしらのトリックでも使わなければ不可能のように思われます。今回の事件に関しては、例えば機械や糸を使ったような、推理小説に出てきそうなトリックはありません。もしそのような仕掛けがあったら、先ず警察が何らかの痕跡を発見するでしょうし、また、沙耶さんが一過性全健忘となったことで実行された殺人に対して、邦夫さんがそのようなトリックの準備をしていたというのも現実的ではない。では、どのように部屋を施錠できたのでしょうか」

私はその場にいる警察関係者を見渡した。山根刑事も稲生刑事も、私の視線を受けると気まずそうに目を背けた。しかし、検事だけはまっすぐに私の目を見据え、自信たっぷりにこたえた。

「彼女が施錠したのか」

検事は、親指で沙耶を指しながら言った。

「そうです。施錠したのは沙耶さんです。沙耶さんは自ら、自分を容疑者としてしまう状況をつくり出してしまったのです」

その言葉に最も驚いていたのは沙耶であった。目を見開き、瞳孔が広がっているようにも見えた。無理もない。彼女にはそのときの記憶が一切ないのだから。

「ちよつと待つて、この人は、記憶ができない一過性なんたらで、カカシみたいな状態やったんとちがうか？　いくら単純な構造やゆつても、カカシには何もできまへんで」

額に汗をかきながら、山根が言った。もう邦夫を押さえつけては

いなかった。邦夫は怒りが治まったようにはみえなかったが、私に飛び掛ってくる様子は既に無かった。

「カカシではありません。記憶が残せないというだけであり、その他は健康なんです。一過性全健忘となった代表的な例として、アメリカのある外科医が、胆のうの摘出手術中にこの症状を起こした、というものがあります。彼は手術中その助手に、ここはどこだ、今何時だ、胆のうは摘出したのか、と何度も何度も尋ねたそうです。そんな状況下にあっても、助手の手助けもあり、彼は無事にその手術をやり遂げました。記銘という、記憶を新たに入力する機能が働いていなくても、それまでに蓄積されていた記憶の想起、つまり、何かしらを思い出すという機能は働いていたのです。沙耶さんについても、同じことが言えると思います。彼女は目の前で起きた殺人事件は記憶に留めておくことができなくても、耳も聞こえていたし、ドアノブの中心を押して鍵を閉めるという行為も憶えていた。邦夫さんは現場の部屋を出て、外から沙耶さんに指示を出したのです。『鍵を閉める』とね」

各々が私の言葉を租借するために、沈黙がしばらく訪れる。私は全ての人間が理解するのを待った。いいや、私は彼らがそれぞれ、当時の現場を思い描くことを待っていたのだ。私の描いたシーンを、皆がそれぞれの頭の中で思い描いている。ドア越しに指示を出す兄邦夫に従い、うつろな目をした沙耶がドアノブのボタンを押す様をきくと、何度かは失敗しただろう。私は実際に、一過性全健忘となった人間を見たことはないが、おそらくカカシに近い状態なのだろうと思う。

静寂を破ったのは、荒々しく立ち上がった浅野邦夫であった。

「もうよろしいですかね。私は暇じゃあないんだ。そろそろ帰らせてもらいます」

大股で玄関に向かった邦夫の歩みを止めたのは、細い女の声。それまで、単に質問に対して脅えたこたえを続けていた沙耶は、ようやく自発的に言葉を発した。

「兄さん待つて。今の話、中井君の話は本当なの？」

兄はただ、妹を睨み付けた。私を含め、その場に居た者は皆、怒声か罵声か、または理路整然とした反論を邦夫が行うのだろうと予想していた。しかし、彼はただ黙って、妹を睨み返すのみであった。「兄さんこたえてよ。本当なの？ 今の話は、本当なの？」

終に沙耶は叫びだした。叫びと化した沙耶の問いかけに対しても、邦夫は黙ったままであった。

暗黙の了解という言葉を、私は連想した。私だけではない。警察関係者も含め、誰もが邦夫が真犯人であることを、そのとき確信しただろう。

妹を睨み続けていた邦夫の目から、ふっと力が抜ける瞬間を私は見た。

その目は怒りから、穏やかなものへと変貌した。

全くの別人が、瞬間的にその場に現れたような錯覚を起こすほど、その変化は大きなものだ。

私は自問する。彼の顔つきは、どのような心理を描写しているのだろうか。

諦めか、後悔か、失望なのか。

どれでもない。彼の目が語っているのは、妹への愛情。それも見返りを求めない、慈愛の目だった。

沈黙が続いた。

口を閉ざしてしまった浅野邦夫に対して、警察関係者も声をかけぬわけにはいかなかった。

私の推理には穴が沢山ある。先ず、なんら物的証拠を挙げる事ができていない。その点に関しては沙耶を犯人と決め付ける、否、決め付けていた刈谷検事の推論と何ら変わらないものである。

しかし、何故沙耶がその場に留まり続けたのかという問題。そして、部屋が施錠されていたという疑問に対して、私の推理はある種の回答を示しているものと自負している。

警察関係者は起訴一歩手前という容疑者を連れてきてまで、この場を準備していた。それは、御渦というわけの分からぬ人脈を持った人間による、警察としては予期せぬ事故のようなものかもしれない(無論私は、御渦がどのような手段を持ってこうした場をつくり出したのかを知りもしないが)。それでも、一度動いてしまったからには、警察側としても責任があるはずだ。私の一応は筋が通っている推理に対して、なんら反論を試みない浅野邦夫に対して、このままただ返すわけにはいかないだろう。何しろ邦夫も、立派な事件の関係者なのだから。

邦夫の乾いた唇が開き、その場にいた者の半数は、邦夫の抗議が始まることを期待した。残りの半数は、彼の告白が始まるものだと見込んでいた。

しかし、彼の口は再び閉ざされてしまった。

そしてその瞬間、彼の反論を期待していた半数、つまり警察関係者たちも、浅野邦夫が真犯人であったことを確信したことだろう。

推理ドラマのように、真犯人が素直に告白をはじめない

のだ。一瞬みせた邦夫の穏やかな顔は、やはり意識が諦めへと移り変わったことを意味していたのだろう。

床が軋み、何者かが歩み近づいている音がしたのは、まさにその瞬間。誰もが混乱し、困惑し、恐れ、戸惑っていたときだった。

「あんなの……」

家の奥から、脱力した女の声が聞こえた。

一步一步、床を踏みしめ、その人物は近づいてきた。

薄暗い廊下に、やつれた白い顔が浮かび上がる。

顔の筋肉は弛緩しているのだが、目だけは異ように広がり、強い意志の力を宿している。

この家の主にして、現在唯一の住人、篠沢伸子であった。

「本当に、あの子を殺したんは、あんなの……」

抑揚のない声が、狭いリビングに響いた。

その場にいた者たちは皆、金縛りにあつたごとく動けない。

何故篠沢伸子がこの場にいたのか、彼女を連れ出した本人である稲生刑事が、最も当惑したことだろう。

「あんなの……、あんなの……」

独り言のように伸子は呟き、繰り返す。そして、浅野邦夫はその問いかけにこたえようとはしなかった。ただ黙り、虚ろな伸子の視線を受け止めていた。

ほんの一瞬だが、邦夫の視線が妹を捕らえた。私が沙耶と同じ教室にいたときによくやった仕草に似ている気がした。

「誠一君は、うちの妹を娶る器じゃなかった。それは、感じていましたよ」

「なんよ、なんよ器つて。私の誠一が、あんたらに何をしたん？何で、殺されなあかんの？」

「知りませんよ。あなたも、もう死んでしまった者のことは忘れて、さっさと自分の幸せを成就させればいいじゃないですか。その人と、結婚するつもりなんでしょ」

「幸せ……幸せ……私の幸せは、誠一なんよ。誠一がいたから、女

手一つでも頑張つて、人から蔑まれても、一生懸命……」

伸子の声は、既に聞き取れないものになつていた。

泣きじゃくりながら、母親は歩く。

伸子の腰の辺りから、銀色に輝く光を私は見た。それが果物ナイフであるとすぐに見分けることができたが、私の口は動かなかった。滑るように私たちの目の間を通り、伸子は家を出かけている浅野邦夫に近づいた。

そして、体を覆うよう邦夫に倒れかかった。

邦夫は、倒れてきた伸子を支えるために手を伸ばしたが、その表情は苦痛にゆがむ。反射的に伸子を突き放す力は残っていたが、邦夫はその後、立ち続けることができなかった。膝から崩れ落ち、腹を庇うように体を折り曲げる。「ああ」と、力なく呟いた。

邦夫の腹にはナイフが深々と突き刺さり、白いセーターに黒い染みが広がった。

体から刃物が生えたような非現実的な光景を前にして、私は笑いを噴出しそうになる。これは、馬鹿々々しいコメディドラマじゃないのか、と。

ここで、私の聴覚は麻痺する。金属を削るような高音が響き、それ以外には何も聞こえない。

それが女の叫び声と分かるまで数秒の時間を要す程、私の頭は混乱していたのだろう。

叫び声を上げたのは沙耶だった。喉の深い部分から搾り出す、本物の悲鳴だ。目と口が、これ以上開かないほど開ききっていた。

「女を確保！ 救急車を手配、急げ！」

検事が声を張り上げる。沙耶の悲鳴に負けぬくらい、大きな叫び声だった。

女を確保と命じられ、若い稻生刑事は沙耶の腕を掴みかけたが、「そつちじゃない」と今度は山根刑事に怒鳴られる。現場は混乱していた。

結局、山根が篠沢伸子の身柄を取り押さえたが、彼が動くまでも

なく伸子は逃げようとする意図はなかったようだ。それよりも彼女は、もう生きようとする意志がなくなった廃人のように、私には見えなかった。

刈谷検事は救急車を呼ぶ為の電話をしながら、うるたえる若い稲生刑事に指示を出す。稲生は前に倒れこもつとする邦夫を支えた。

私は叫びながら卒倒した沙耶を介護する。彼女は文字通り白目をむけ、ソファーに倒れていた。

救急車と警察車両のサイレンが同時に遠くから聞こえてくるまで、喧騒は続いた。あちこちの機関に連絡をとる検事、伸子に駆け寄る伊藤と、それを制する稲生刑事、体の支えを失った邦夫が床に転がる。

誰もが動揺し、そして混乱していた。

しかしある男は、混沌としたこの家において姿勢を崩さず、ただ一人、皆の動きを傍観していた。

普段なら誰よりも動きが早く、そして誰よりもよく喋っていた男は、このときはただ静観していたのだ。

御渦宗茂。

彼は、緊張と困惑と怒声と悲しみが溢れるその空間において、ただ一人静かに腕組みしていた。右往左往する人々を、それがテレビ画面越しの出来事のように、彼は眺めていた。

私には、御渦は微笑んでいるように見えた。

事件は、週刊誌やテレビのワイドショーを二週間ほど騒がした。婚約者を殺害したという、ただでさえ世間の注目を浴びる事件であったものが、数倍の話題性を持つものに化したことを考慮すれば、この騒ぎは些細なものだったかもしれない。

篠沢伸子は現行犯で逮捕され、その罪は殺人未遂から殺人へと変わっていた。

浅野邦夫は結局、搬送された病院で命を失ったのだ。浅野邦夫は病院へと搬送される救急車の中で、今回の事件の犯行を認めた。私があのと話したとおりの内容であると認めた。それは、正式な調書とはならなかったようだが、彼は被疑者死亡のまま書類送検されることとなった。検事は何点かの不明点があるものの、死に際の自白というものを重視したのだろう。

また、邦夫が間違い電話だったと主張した二十三時過ぎの電話も、篠沢家から最も近い公衆電話からかけられたものと判明した。何故携帯電話や家の電話で連絡をとろうとしなかったのかは疑問だが、これは恋人が記憶を失うという異常事態において、篠沢誠一が慌てていたのだろうとも考えられる。はじめは家の電話でかけ、そのときはちよつと邦夫とその母親夏子と話中であつたとも推察できる。直接邦夫を呼びにゆこうと家を出る最中、慌てた為に携帯電話を持つことを忘れた。こんな流れは決して不自然ではない。

ともかく、沙耶は解放された。私の推理が、一人の人間の命を奪うことになつたという事実は、これからの私の一生につきまとい、背に科せられた罪の意識となることだろう。

しかし、そんな罪悪感よりも、私は沙耶を救い出したという達成感、充実感、満足感が勝っていた。被害者と加害者という、二人の

人生を終わらせたにもかかわらず、私の心は幸せに満ちていた。

沙耶はその後、簡単な事情聴取を終え、数日後には釈放されていた。事情聴取といっても、彼女は何も記憶していなかったのだから、回答はそれまでと同じものだった。そう、『憶えていない』だ。

彼女よりも私や御渦に対しての質問の方が、時間を長くとっていたような気がする。警察としては当然か。本来彼らがすべきことを、私と御渦が勝手に代行してしまったのだから。彼らはその面子にかけて、事件のあらましを把握しなければならぬはずだ。

だが、面倒なことは僕に任せると、御渦が殆どの事情聴取を引き受けてくれたおかげで、私は全くと言っていいほど実生活に支障をきたすことはなかった。

警察の他に、ワイドショーのレポーターがやってくることも危惧していたが、気配すら感じることはなかった。

仕事にも無事復帰し、上司や同僚に色眼鏡で見られるようなこともない。

何も変わることがなく、そして順調な日々を送っている。

そう、私と沙耶が一緒に暮らしはじめたということを除けば。

「おかえりなさい」

四隅が錆付いたドアを開けると、弾けるような沙耶の笑顔が私を迎えてくれる。髪の毛は一括りに後ろで束ねられ、化粧気もなく、女子高生のときと何一つ変わらない彼女がいた。部屋の中は基本的に変わっていないはずなのだが、彼女が帰ってきて以来、家具や壁紙、すべての色が明るく見える。

私はこの笑顔を見るために、御渦という面倒な男に振り回されつつも、事件解決に奔走したのだ。

「食事の準備ができてますよ」

私の鼻腔は、ビーフシチューの濃厚な香りで満たされる。

沙耶は警察に釈放されるとすぐ、私の部屋に転がり込んできた。

一人であるの広い家に暮らすことはできないのだという。兄との思

いでも詰まっております、気が狂いそうになるのだともいう。

沙耶の願いを、私は二つ返事で了承した。もちろん私にとっても願ってもないことなのだ。長年思い描いていた理想の生活がはじまった。

朝起きると、隣に静かな寝息をたてる沙耶が眠っている。私は彼女を起こさぬようにベッドから抜け出し、仕事へと向かう準備をする。そして仕事を終え帰宅すると、沙耶が得意の料理を準備している。

それは彼女がきて以来のこの一週間、変わらぬ習慣となっている。沙耶は掃除や洗濯も済ませてくれており、私は幸福と同時に楽もさせてもらっている。

幸せという言葉の意味を、私はようやく理解できたのだと思う。結婚という言葉は、まだ二人の間に話されたことはない。彼女は婚約者を亡くしたばかりなのだし、当面そのような感情にはならないだろう。

私は気長に待つことにする。それまで、この甘美な日々を過ごすことができれば、私に不満はない。

「いい香りだ。今日はビーフシチューやね。そんなに毎日気合を入れてつくらんでもええよ。残りモンとか、惣菜とかでも」

私はネクタイを解きながら言った。

「ううん。そんなことできないよ。中井君は恩人なんだから。中井君がいなかったら、私は今頃刑務所の中なんだよ。ちよつとでも恩返ししなくちゃね。こうみえて私、料理は得意なんだから。まだまだレパトリーはあるのよ。明日はロールキャベツね。今仕上げしてるところだから、ちよつとだけ待っててね」

沙耶は指揮者のタクトのように包丁を振るう。

「それから、ビール沢山買って来たから、飲んでてね」

沙耶の頬は僅かに赤く染まっていた。どうやらもう出来上がっているようだ。

よい香りを放つシチュー鍋の近くに、淡い琥珀色の液体が揺れて

いた。

終章

女はカートを押し、店内の食品を集めて廻る。

平日の昼過ぎは、客もまばらで動きやすい。できるかぎり人の目に触れぬように動くことが、最近自然と身についている。

その日に使う予定である肉と野菜は既にかごに入っていた。女は店の奥にある、アルコールのコーナーへとカートを推し進める。

ウイスキーのラベルを吟味して、結局いつも飲んでいるワイルドターキーを二本手に取ったときだった、女は背後から声をかけられた。

「悪い癖を直すつもりは毛頭なさそうだな」

声の主は男だ。それも、スーパーの陳列棚から頭が飛び出るほどの大きな男。

「その節は、どうも」

遠慮がちに女は挨拶をする。しかしその声には刺があり、女の表情も曇っていた。

「いやいや、僕はなにもししていない。全ては、中井君の手柄だよ」

「ええ勿論、彼には感謝しています。それでは」

女は逃げるように話を切り上げてカートを押した。しかしカートは派手な音を立てて止まった。男がその進路に足を出したのだった。近くの惣菜コーナーで商品を陳列していた店員が反応したほどの音であったが、警備員が駆け寄ってくるほどのものではなかった。

「なんなの？」

「もう少し、お話ししようよ」

女は観念したのか、手をカートから離しそのまま腕を組む。

「話って、何の？」

「勿論、先の事件についてです」

射すような視線を男へ向けてから、女は周囲を窺った。

「どこで？」

「場所はどこでもかまいませんよ。僕はね」

川とは呼ぶには抵抗がある、汚い水の流れが傍にあった。男と女はその流れに沿った狭い道に立っている。隙間なく建ち並ぶ長屋の向こう側には公園があるのだろう。子供たちの甲高い声が響いていた。

「それで、いったい何を話したいわけ？ もう済んだことでしょう。買い物袋を腕にひっかけ、女はセーラムに火を付ける。

「言わなくても分かるでしょう。あなたは、全て分かっている」「全てって、いったい何のことなの？」

「とぼけるのは止めましょうよ。僕は、全部分かっているんだ」「分かっているって、何が？」

「勿論、篠沢誠一を殺したのが、実は貴女だつてことです」「女は形のよい眉を寄せて、タバコの煙を男に吐きかける。

「馬鹿なこと言わないで。あの事件は、兄がやったことよ。警察だつてそう認めただから、私を釈放したんじゃないの。あなただつて見たでしょう。あのときの兄の態度、あれは、自白したのも一緒ですよ。それに、兄は自供だつてしているのよ」

「いいえ。救急車の中での邦夫さんの言動は、貴女を庇い、自ら罪を被るための芝居でしょう。ああでもしなければ、邦夫さんは貴女を守れなかつたんだ」

「ちよつと！ いい加減なこと言うの止してよ。あなた何を根拠にそんなこと言ってるわけ？ 事件を解決してくれたのは中井君だし、あなたはただ立っただけじゃないの。それに、警察に私を捕まえさせたのもあなた。あなた、自分が通報したことが間違いだったことが我慢できないんですよ。もう放つておいてよ」

「放つておけませんよ。殺人犯を野放しにはしておけません」

「本当にいい加減にして！ これ以上わけの分からないことを言うんなら、警察を呼ぶわ」

「だってあのとき、僕と貴女は目が合ったじゃないですか」

女はハンドバッグから携帯電話を取り出しそうとしていたが、その手の動きは凍結した。

「……あのときって、いつの話をしているの？」

「勿論、篠沢誠一さんが死んだ、まさにその瞬間の話です」

女は腰から地面へと崩れ落ちた。ぐにやりと足首が曲がり、片方のヒールが脱げて転がった。まるで、背骨が抜けてしまったかのような脱力であった。腕にかけていた重い物袋も投げ出され、酒壺が触れ合って大きな音を出した。

「貴女は、記憶障害など起こしてはいなかった。完全に覚醒した目をしていましたね。そう、誠一さんが最後の呻き声を上げたときでした。それまで酔って寝ていたあなたは、一瞬だが目を見開いた。そして、その瞬間に全てを悟ったのでしょう。何者かが婚約者を絞殺しているのだということを」

「ちよつと……ちよつと待って。じゃあ、あなたなの？　なんで？　私、本当に兄さんだと思ってた。暗くて、顔はみえなかったけど、兄さんの他にいないもの。誠一さんを殺そうとする人なんて……」

「ようやく認めてくれましたね。実は僕も驚いていたんですよ。貴女は泥酔し、熟睡している予定だった。ウイスキーには睡眠薬も混ぜていましたからね。でも、貴女にはあまり効かなかったようですね。しかし、貴女は婚約者が殺されかけているにも関わらず、声を発することもしなかった」

女の記憶が甦る。あの日、婚約者が風呂に入っているあいだに見つけた、台所に置かれているウイスキーの壺。女はその琥珀色の誘惑にあっさりと負けたのだ。

男は一歩進み、女との距離を縮める。

「誠一さんを殺したのは貴女も同然です。貴女は、目の前で殺人が行われているにもかかわらず、寝たふりを続け、犯人が去った後に偽装工作まで行った。邦夫さんが犯人であると信じた貴女は、一過性全健忘という知識を使い、邦夫さんが密室トリックを行ったかの

ような状況をつくり上げた。神経内科という職業と、貴女が一環して『憶えていない』と主張することで、警察は邦夫さんが犯人であると推理することを期待したんだ」

女は腰を抜かしたまま、視点の定まらぬ虚ろな目を右へ左へ動かしていた。彼女の中では、世界が逆転していたのだ。今まで見ていた景色が全くの嘘だといわれても、にわかには信じられるものではない。

構わずに男は続ける。

「実際には警察は思いのほか愚鈍で、貴女が目論んだような推理は働かせてくれなかった。それは仕方ないでしょう。あまりに唐突で、無計画な犯行だ。貴女のような若い女性に、そんな症状が起きることも予想しかねる。貴女が突発的に考えた筋書きは、幼稚過ぎて、かつ極めて自己中心のだった。だから僕が、フォローアップしなければならなかったんだ」

「どうゆうこと？」

女の声はかすれ、今にも消え去りそうに弱かった。

「それを説明する前に、一つ教えてください。貴女は何で、お兄さんの邦夫さんを犯人に仕立てたかったんです？ 婚約者の命という犠牲を払ってまで、貴女が得ようとしていたものって、何なんです？」

女は呼吸を整えるために時間をかけ、そしてゆっくりとこたえた。

「……自由」

途端、御渦は哄笑する。

「やっぱり、予想どおりだ。でも『お金』というこたえも期待していたんですよ。その方がよりシンプルだ」

「兄は、私を縛り付けたの。中井君が指摘したとおり、兄は境界例よ。依存する相手を常に必要とする。そして、その相手を失うことに異常なまでの恐れを抱く。ずっと、その相手はお母さんだった。

でもそのお母さんがいなくなることが分かると、兄は私をその相手に選んだの。私は東京から強制的に連れ帰されて、兄のために生き

ることを強いられたのよ」

「それは、結局貴女自身の問題だと思えますよ。逃げようと思えば、いくらでも逃げられたはずだ。最悪、警察に保護してもらおうという手段もある」

「警察が動いてくれるわけじゃないじゃない。兄は別に私をレイプしたり、殴りつけたりしたわけじゃないわ。兄は、とにかく周到だった……」

一時女の口は止まる。男は辛抱強く、女が再び話はじめることを待った。

「兄はお小遣いを沢山くれた。しばらくはのんびり暮らせて。好きなことをしていいって。ただ、仕事はさがすな、家を出て暮らすようなことはするな、それだけで後は不自由させないって、兄は言った。誰でも楽な方へ進んでしまおうでしょ？ 私は好きなことをした。でも、友達は皆東京や大阪で働いている。遊ぶ相手がいないければ、結局一人で時間を潰すしかないの。お酒の量が自然と増えた。兄は飲みすぎるなといいながら、いつもお酒を買って帰るの。自分は殆ど飲まなくせにね。全ては用意されていたことなの。私は兄に縛り付けられてしまったの。今回のことは……」

女の声は震えた。

「……そんな兄から逃げられる、絶好の機会だと思ったわ」

一粒、二粒と、女の頬を涙がつつた。今回の事件をとおして、彼女が本当に泣いたのは、このときだけであった。

「一過性全健忘の知識は、お兄さんに聞いていたのですか？」

女は首を横に振る。

「……暇つぶしに、兄の部屋にある本を読んでいたの。そこで知ったわ。でも、こんなことをするために憶えていたんじゃないわ。私はただ、兄から逃げたかっただけ……。あれは、咄嗟に思いついたの……」

「分かりました。これ以上貴女の不幸自慢を聞くつもりはありません。婚約者の篠沢誠一さんにも、それほど強い愛情を抱いてはいな

かったのでしょうか。次は僕が説明しましょう」

「そうよ。なんであなたが誠一さんを殺さなきゃなんないの？ わけが分からない」

「僕は、貴女の婚約者を殺すことが目的だったんです」

「だから、何でその、誠一さんを殺したの？ 彼に恨みでもあったわけ？」

「何度も言わせないでください。僕は、貴女の婚約者を殺したんです。その婚約者が、たまたま篠沢誠一という人物に過ぎなかった、というわけです」

女はようやく男の顔を見上げた。

「何で？ 何で私の婚約者を、あなたが殺さなきゃならないの？」

「中井が、貴女を愛しているからですよ」

「中井君？ あなたは、中井君のために、私の婚約者を殺したって言うの？」

「そうです。僕は中井をずっと見守ってきた。だから、彼の苦しみも悩みも、誰よりも理解しているつもりです。彼が最も愛する女性である貴女が他の男と結婚するということは、彼には途方もない苦しみとなることでしょう。はじめは、そんな苦しみを生み出す原因である貴女自身をこの世から消してしまおうかとも考えましたが、やはりそれも彼の苦しみとなります。必要最低限の行動として、貴女の婚約者を殺害するという手段しか、僕には残されていなかった」

落ち着きを取り戻しかけていた女は、男を睨んだ。刺さるような憎しみがこもった視線であった。

「中井君のこと、大学入試で知ったというのは嘘なのね」

「そう。遙か以前より、僕は彼を知っている。彼に物心がつく前からだ。僕は彼に、世界の意味を教えてもらった。知識だけではない、世界の存在価値というやつをね。彼と出会わなかったら、僕はきつと十歳まで生きてはいなかっただろう。言ったでしょ。僕は、忘れることができない体質なんだ。辛いことも悲しいことも、そして嬉しいこと、楽しかったことも、全部完璧に記憶してしまう。そして、

中井との思い出は、とても素晴らしい内容なのです。ああ、こんな話を貴女にしても理解してもらえないでしょうね。僕の中では光り輝いている記憶も、言葉にすると色あせたつまらない物にみえてしまふ。ともかく、中井は僕の恩人で、僕はその記憶を少しも欠けることなく持ち続けているわけです。これからもずっと、僕は中井を見守って生きてゆくことでしょう」

楽しそうに遊ぶ子供の声は響き続けていたが、それ以外に音は無く、不思議と自動車も通らない。空は大阪にしては珍しく澄み渡り、遙か上空を、白い飛行機が旋回しているのが見える。

女は空を見上げながら、事件の夜を思い浮かべた。そして、兄が刺されたときの、悲しそうな顔も空に浮かんだ。

「私、警察に言うわ」

「言ったでしょう。貴女はその手で婚約者を殺したも同然なんですよ。どうするんですか？ 警察に何て言うんです？ 急に記憶を取り戻しました。犯人はこの男です。と言うのですか？ 記憶を失ったことも信じてくれなかった警察が、急に思い出したという記憶を信じてくれるでしょうかね」

女は黙り込む。男に反論できないだけの後ろめたさが、女にはあったのだ。

「事件はもう、解決しているんです。この事件は、僕と貴女の共同作業だったと言えるでしょう」

僅かに強い口調で、男は続ける。

「貴女はただ寝ていればよかったです。そうでなくとも、僕が出て行った後、鍵をかけるような真似をしなければよかったです。それが貴女にとって最良の選択肢だったんだ。それならば、貴女はあれほど警察から疑われるようなことはなかった。警察も、もっと素直にお兄さんのことを疑うことができたでしょうに。あなたは少しやりすぎたんだ」

女はただ、男を睨み続けた。

「しかし、貴女が馬鹿な真似をしてくれたおかげで、僕は中井に手

柄を立てさせるといふ機会に恵まれた。貴女は偶然的に中井と再会したと思っっているかもしれないが、全ては僕が仕組んだことです。

本来は現場から逃げ出すという予定は、貴女が描いたシナリオにはないものだった。この大阪へ逃げてきたのは、伊藤の指示によるものだったでしょう。この辺りにタナカハルミという彼の女友達がいるので、よくしてくれるはずだ、とね。実際にその名前の女性と部屋を、貴女の隠れ家として準備していたんですよ」

女の顔からみるみる血色が失われる。白を通り過ぎた、青い顔で男を見上げている。

「そうして逃げてきた場所で、貴女は中井と出会ったんだ。ちなみに、中井がああ時間に電車に乗るように仕組んだのも僕です。まあ、トイレでノックしただけですけどね。はじめは近所のタナカハルミの家に住まわせて、どこかで中井と出会わせることを予定していたが、同じ電車に乗るタイミングが計れたから、運に賭けてみたんです。同じ車両に乗り、二人が出会ったのは、まさに幸運だったわけだね」

「伊藤さんとあなたは、グルだったわけね」
「グルなんて言い方は心外だな。僕らはただ、同じ目的があっただけ。僕は中井の為に篠沢誠一が邪魔だったし、伊藤は結婚相手のコブが気に入らなかった。彼はとても捻くれた男でしてね、誠実な男が嫌いなんだそうさ。あと、篠沢伸子が持つ家と土地にも興味が有る。ギャンブルでつくった借金が、かなりの額になっているんです。でも、事件当夜以来、電話もしていません。ついでに教えておきましょう。伊藤は、僕に篠沢家の合鍵を貸してくれました。それから、伊藤に指示し、事前にあの家には大量のウイスキーを持ち込ませていたのはこの僕です。近くの公衆電話から時間を見計らって、貴女の家間違い電話をかけたのも僕です」

女は唾を吐きかけたが、男にはとどかなかつた。

「僕は、貴女を中井に再会させることが目的だったのではありません。勿論、二人の間に愛が芽生えることが理想です。少なくとも、

貴女が中井に恩を感じる段階にはしておきたかった。そのために、貴女には警察に捕まってもらうしかなかった。二人で逃避行というプランも考えましたが、それは中井の人生に大きな負担となる。貴女が掴まり、それを中井が開放するという流れが、最も好ましい事態の収拾でした。だからこそ、僕は中井を、事件の解決者として導いたのです」

「もう止めて！　いかげんにしてよ。分かったわ。全部あなたの思い通りになったってことでしょ。もう満足でしょ。もう……、もう私を放っておいて……」

ついに涙声となった女を無視して、男は話す。

「いいえ、篠沢伸子の乱入は、予想した以上の結果になってしまいました。僕の計画では、彼女は刺殺することに失敗するはずだった。たとえ伸子がナイフを持って現れなくとも、僕の詭弁で検事を丸め込む自信はあったのですがね。結果として上手くいきました。お兄さんは、確かに境界例という厄介な人格障害でありましたが、貴女という妹を愛していたのでしょね。彼は貴女の目論見を察して、自ら死を望んだ。そうすることで、貴女から捨てられるということ回避したのでしょか。捨てられなくとも、死んでしまえば何にもなりませんかね」

女は顔を覆い、嗚咽する。

そして子供のように、声を上げて泣いた。

そんな女の姿を見て、男は満足げに微笑んだ。

「貴女は、僕が真実を伝えるまで、やはり中井に恩を感じていたことでしょう。少なくとも表面上ではね。しかし、それでは駄目なんです。貴女は中井を愛さなければならぬ。そうしなければ、中井は幸せにはなれないんです」

自分の泣き声が響いていたが、男の声ははつきりと、女の耳に聞こえていた。

「今、中井が手にした幸福は、なんとしてでも維持する。それが僕の願いであり、仕事であると考えています。貴女が中井を愛し、中

井が幸せに暮らせるのであれば、僕はもう貴方たち二人の前に現れることもしません。ただ遠くから、見守り続けます」

女は悟った。自由を手にするために婚約者と実の兄を亡き者としたにも関わらず、自分は最も欲していた自由を、永遠に失ったということを。

この恐ろしい男からは、一生逃れることはできないことを。

女の頭には、逆光のせいで真っ黒となった顔が思い出された。黒い顔は黙々と、篠沢誠一の首を締め付けていた。その動きは淡々としており、感情は感じられない。ただの作業として行われている殺人であった。そうであろう、怒りも恨みもない殺しだったのだから。「中井の愛した人が、アルコール依存症ではいけない。金輪際、酒は断ってもらいましょう」

男は地面に転がった買い物袋の中から、ウイスキーのビンを取り上げた。

「もう僕は行きます。ずっと僕が中井のことを見守っていることを、決して忘れないでください」

男は背を向けて歩き出した。しかしすぐに男は振り返り、もう一度同じ言葉を繰り返した。

「忘れないでください」

了

終章（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

境界例の問題など、もし間違っただけで記している箇所がありましたらご指摘下さい。

勿論、感想・批評もいただければ幸いです。

参考文献

- 『なぜ記憶が消えるのか』（ハロルド・クローアンス著／白揚社）
- 『脳と記憶の謎』（山元大輔著／講談社現代新書）
- 『神経内科』（小長谷正明著／岩波新書）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1095e/>

忘れない男と憶えない女

2010年10月8日14時39分発行